通巻9号 1992年8月5日発行(毎月1回 5日発行) 1992年4月20日第三種郵物認可

理想社会 9

Shambhala

監修：麻原彰晃



予言特集

世紀末の救世主は"盲目の人"

ノストラダムスが予言していた麻原彰晃尊師

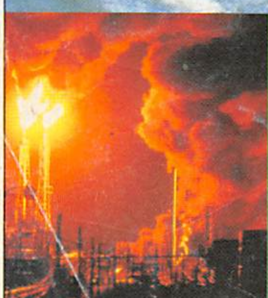
PART1 最終解脱者・麻原彰晃尊師の終末大予言
運命の分かれ目、それは1999年

PART2 世紀末救世主は"盲目の人"
尊師はノストラダムスに予言されていた！

PART3 予言されていた超人類
オウム真理教の修行者たち

PART4 「ヨハネの黙示録」「新約聖書」も予言していた
オウム真理教の救済の使命

PART5 尊師緊急メッセージ
集え、救済者たちよ！









PART6 徹底検証
尊師の予言1987〜1992年

PART7 巻末近未来予言
1993〜4年、日本は戦争に巻き込まれる！

キミはもう尊師を聴いたか？
オウム真理教ラジオ放送開始

オウム出版

覚醒せよ！

麻原彰晃尊師のラジオ番組
エウアンゲリオン・テス・バシレイアス

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(3335)4965
オウム真理教放送



世界でただ一人の最終解脱者、麻原彰晃尊師が贈るミステリアスなこの2時間――。

夜11時はAM720kHz

※短波(17.710MHz)でも午後10時から放送しています。

「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」のタイアップマガジン
「えんじょい・はぴねす」定期購読募集のお知らせ

「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」が10倍楽しくなるタイアップマガジン月刊「えんじょい・・はぴねす」の定期購読をただいま大募集しています。料金は6カ月で送料込み6000円です。お申し込み・お問い合わせは、下記まで。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
オウム真理教ラジオ放送 「えんじょい・・はぴねす」プレゼント係
TEL 03(3335)4965

※その他、オウム真理教ラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」へのご意見・ご感想などありましたら併せてお書きください。

C O N T E N T S

理想社会⑨

Shambhala

監修：麻原彰晃

予言特集

「第九章　一
彼の岸へ導くキリストの住宅で
アルファベットがテーブルの上で解釈される
盲目（片目）で黄色っぽい赤色の、透明な輝
いている長老が事態の推移の途中で掌握する
彼は新しい大元帥に交代させる」
（詳細は、予言特集PART2参照）



Aum Publishing Co., Ltd.

世主は"盲目の人"
スが予言していた









一九九九年まで、あと七年。人類の大破局まであとわずか。核戦争、地震、洪水、大噴火……わたしたちに襲いかかる災厄の数々。かつてない惨害。大予言者ノストラダムス、イエス・キリスト、覚者サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）等の古今東西の予言者は、今世紀末のわたしたちの運命を非情にも予言している。

はたして、人類は滅亡してしまうのか……。

いや、そうではないらしい。というのも、彼らの予言には、こうあるのだ。

「一部の人々が大破局を乗り越えて生き残り、新しい理想社会を建設していく」

のであると。

確かに、人類は絶望的な破滅へ

予言特集

世紀末の救
—ノストラダム
麻原彰晃尊師









と突き進み、その大部分は地獄のような苦しみに遭わされる。しかし、だ。その中において、わずかではあるが、救われる希望の道は開かれているというのだ。

では、それはどのような道なのだろうか。

わたしたちは、世紀末へ向けて、どう生きていけばいいのだろうか。

実は、そのカギは、あのオウム真理教の麻原彰晃尊師が握っている。

古今東西の予言者が、麻原尊師の活躍に人類の未来を託していたのだ。ならば、今わたしたちは、全力で尊師に注目してみようではないか。

そこから世紀末への活路が自然と開かれていくに違いない。

さて、あなたは、この大破局を生き残ることができるだろうか……

PART 1

最終解脱者・麻原彰晃尊師の終末大予言





運命の分かれ目、それは1999年

第1章

麻原尊師の緊急警告 最終戦争はこうしてやってくる!

現代に復活した聖者——麻原尊師

覚者サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）やイエス・キリストなどの聖者方は、修行によって得られた神通力を駆使して、未来に起きる出来事を正確に予知していた。正確な予言能力は聖者としての一つの「証し」である。

そして、現代——。正確な予言能力によって人々を驚かせてきた、一人の聖者が登場した。それが、**オウム真理教の開祖・麻原彰晃尊師**である。麻原尊師は八年間にわたる原始仏教とインド・ヨーガの厳しい修行を経て、ヒマラヤにおいて「最終解脱」された、日本で唯一の最終解脱者である。

最終解脱とは、仏教修行の最終段階であり、ここに至った者は、精神的には絶対自由・幸福・歓喜という至福の境地に没入し、あらゆる神秘的な力を駆使することができる。その中の一つが、未来を知ることのできる力、「死生智」である。



古今東西の聖者方は正確な予言能力を発揮した（上はサキャ神賢像）

麻原尊師の予言――驚異の適中率

この神通力を身につけた麻原尊師の予言能力はきわめて高い。百発百中といってもいい適中率で、尊師の予言された事象は、そのほとんどが〝現実化〟してきた。

その適中例は、PART6で詳しく示すが、例えば、八六年十一月十五、二十一日の大島三原山大噴火、八七年十一月十六日の同山再噴火、同年夏の記録的干ばつ、八八年七月～八月の群発地震、集中豪雨も見事にズバリと適中させた。また、八八年四月十九日のイラン・イラク戦争における米国とイランとの交戦、八八年七月二十三日の潜水艦「なだしお」の衝突事故も、九〇年八月の「湾岸危機」をきっかけにした日米経済摩擦の激化、九一年四月と九二年四月に開始された農作物（牛肉・オレンジ、オレンジ果汁）の輸入自由化も、その適中例である。特に最大の適中例は、PART6でも述べる、今年六月の「PKO（国連平和維持活動）協力法」の制定だといえる。



尊師はあらゆる事件を正確に予言されてきた



最終解脱者は、その偉大な神通力によって正確に未来を見抜くことができる

これが尊師の終末予言、「一九九九年が運命の分かれ目だ」

さて、以上に述べた例は、無数の適中例の中のごく一部ではあるが、その恐るべき予言の精度には驚かれることに違いない。

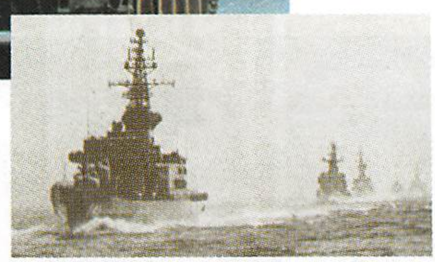
澄み切った心眼で、わたしたち人類の行く末を静かに見つめてこられた尊師。その予言の一つ一つは確実に成就し、来るべき時代へ向けて人類は一歩一歩距離を縮めている。そして、その先で人類を待ち受けている運命とは……。

そう、人類を待ち受けている運命、それは世界中の予言書が予言しているように、世界的規模での大戦争＝最終戦争、そしてその後に到来する人類の大破局なのだ。確かに、ノストラダムスもイエス・キリストもヒトラーも『ヨハネの黙示録』も最終戦争を予言しているが、その時期の特定が曖昧で、暗示的で、明瞭さに欠けているのは否定できない。その点、尊師の場合は、比類なき明瞭さをもって、核戦争のシーンを予言しているのだ。

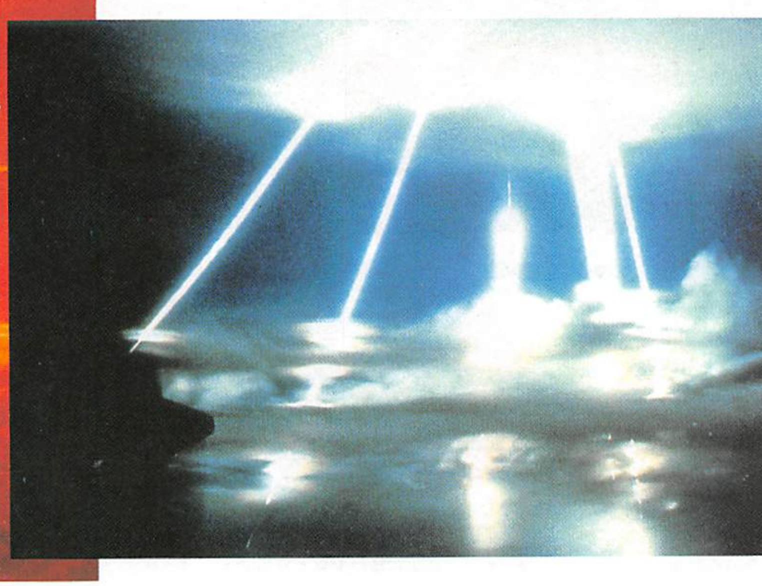
それは、次の予言である。

「一九九九年八月一日前後が運命の分かれ目だ。この日はハルマゲドンが勃発する日なのだ。世界経済が行き詰まり、生きていけないという窮地に陥ったときに、世界的規模の戦争が始まる。アメリカ、ソ連、中近東を中心とするイスラム諸国、日本が、正面切ってぶつかり合う、激しい戦争となるだろう。









だが、九九年に始まるこの戦争も、しばらくの間核兵器は使われない。二〇〇三年十月三十日から十一月二十九日までの間に、核兵器による決定的な破局が訪れる。そのピークは十一月二十五日。恐ろしい開発と改良が続けられた、高性能なSDI兵器が、地球の破壊に拍車をかけることになる」（『トワイライトゾーン』八八年一月号）。

衝撃の予言である。一九九九年、経済危機をきっかけにして、中東を舞台に世界大戦が勃発する。日本もそれに参戦する。そして、その後で人類に決定的な破局が訪れると麻原尊師は予言されているのだ。

実に具体的な描写ではないか。

それだけに、

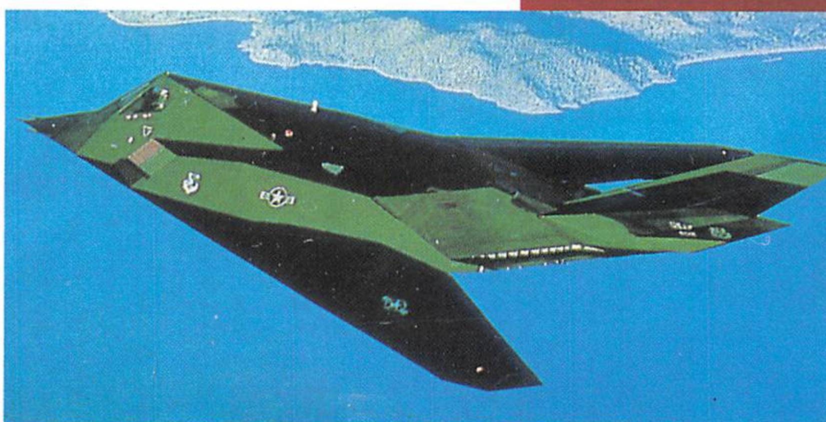
「本当に起きることなのか」

という疑問も生じよう。

しかし、この予言がなされた一九八八年から五年間の〝世界の流れ〟をよく知っている方は、現在においては、尊師の予言が五年前よりもはるかに現実味を帯びてきているということにお気づきだろう。あたかも、世界が尊師の予言を成就しようという意思をもって動いているかのようにである。

その〝世界の流れ〟とは、**中東での「湾岸戦争」**および、**中東諸国の核武装**のことである——。









石油をめぐっての湾岸戦争。第三次大戦の前哨戦として……

湾岸戦争は最終戦争の前哨戦だった

尊師の予言から三年が経過した一九九一年一月、中東で「湾岸戦争」が勃発した。中東諸国および世界中の先進諸国が派兵して対決したこの戦争は、まさに尊師の最終戦争の予言の構図と酷似している。このような戦争が起きることを、四年前に尊師以外の誰が予想できたであろうか。

そして、尊師は次のように、この湾岸戦争こそが最終戦争の前哨戦だったと述べておられる。

「皆さんもご存じのとおり、イラク対多国籍軍の戦争が始まりました。……この行為はいずれ第三次世界大戦へと引き金を引く結果となることでしょう。」（九一年一月二十二日広島にて）

では、なぜ「最終戦争が中東諸国を巻き込んで起きる」という尊師の予言がリアリティを持つのだろうか。

そう、中東といえば石油——。石油をめぐって、世界最大の産油地帯である中東で、戦いの火ぶたが切って落とされる可能性がいくらでもあるわけだ。

その典型的な例が、あの湾岸戦争だったのだ。それは、政治評論家の鳥越俊太郎氏が、

「アメリカが五十万からの軍隊を派兵したのも、世界中の先進国が軍隊を出したのも、そして日本が総額百三十億ドルもの金を出したのも、すべては自分たちの文明の生命線を握っている中東の石油を確保したいがためだった。」

と述べているとおりである。

そして、さらに戦争の危機を高めるのが、現在問題となっている人口爆発。国連人口部の統計の数字によれば、現在の地球人口は五十四億人で、このままのペースでいけば、二〇五〇年までには少なくとも百億人は超えているだろうと推測されている。よって、石油資源が急減し、石油危機が猛スピードでやってくる危険性は高い。そうすれば、石油をめぐっての大戦争も起こりかねない。事実、前掲の鳥越氏も、

「今後二十一世紀に向けてさらに発展途上国で人口が増えていくなかで、ますます人口を基盤としたエネルギー戦争というのが予想もつかないような戦争とか紛争とかいう形になって出てくる可能性がある。」

と警告を発している。

このように、尊師が予言された中東での大戦争発生は、十分現実性があるのだ。

急ピッチで進む中東諸国の核武装

そしてもう一つ——、尊師以外に誰も予想できなかった状況が現われている。それは、**中東諸国が湾岸戦争以後、急速に核武装を進めているという事実だ。**つまり、次の中東での戦争は、尊師の予言どおり大規模な世界核戦争に発展する可能性が出てきたのである。

その大きなきっかけを与えたのが、ソ連の崩壊だった。崩壊によって、それぞれの共和国が独立したのはいいが、台所事情があまりに苦しいので、なんとそれらの国々は保有している核兵器を外国に次々売りさばき出した。

それに中東諸国が飛びついたわけだ。エジプト軍戦略研究所のフサム・スウェイラム前所長が、「イスラエルと敵対している国々は、できることならみな核がほしいと思っているように、中東諸国は現在、核兵器による軍備拡大に精を出している。例えば、イランはカザフスタンから三個の戦術核兵器を一億五千万ドルで極秘入手したと伝えられている。

そして、それ以上に恐ろしいことは、旧ソ連内で核開発に従事していた核技術者が、中東諸国に流出しているという事実だ。まず、リビアが動いた。月額二万ドルで彼らを迎え、核兵器の開発に着手しているという。また、イラクは、一万人を超える核技術者と長崎原爆二個分の核物質を保有しているといわれるが、ソ連崩壊によって濃縮ウランが簡単に手に入るようになった現在、その保有量は格段に増えているとも考えられている。そして、旧ソ連の核技術者を数人連れてくれれば、原爆は簡単に完成すると見られている。また、シリアも核獲得に動きだしているという情報がある。



人口爆発は石油危機を招き、そして……

このように、旧ソ連の崩壊によって緊張が緩和されるどころか、その安価な核と核技術が洪水のように流れ込むことによって、中東は以前にもまして緊張が高まっているのだ。もし中東諸国が一通り核兵器を保有した段階で、石油危機をきっかけに戦いの炎が上がったりすれば……。世界的な核戦争に発展することはまちがいない。

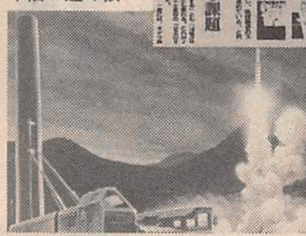
数年前、尊師が予言されたときには誰も予想できなかった中東諸国対先進諸国という構図と、急速に進む核武装……。最終核戦争は確実に現実味を帯びてきている。というわけで、

「旧ソ連の崩壊によって東西の冷戦も終わったし、現在の世界は平和の方向に向かっている――。」というよく耳にする見解が、いかに「平和ボケ」的な考えであるかということがよくおわかりいただけたのではないだろうか。



旧ソ連から中東諸国への核流出は深刻な問題となっている

↓旧ソ連の核





核武装に燃えるアラブの指導者

第2章

最終戦争への秒読みは始まっている――着々と進む日本の戦争準備

気づいてみれば第二次大戦前とソックリの現在

中東での核戦争の可能性は高い。では、それに参戦すると予言されている日本の状況はどうか。

ここでは、実際に日本が戦争を行なえる体制を整えてきたという点を見てみたい。

麻原尊師は八七年五月の「オウム真理教 秩父集中セミナー」で、今後の日本があらゆる面で第二次大戦前とソックリの状況になっていくであろうと予言されていた。具体的には、

①政治が右傾化すること、
②国家・警察権力が強大化すること、
③思想統制によって国民世論が統一されていくこと、
④経済危機が生じジリ貧へ向かっていくこと、

の四点である。まさに、あの戦前の重苦しいファシズムの再来が予言されていたのだ。（なお、この予言は、その後すぐにオウム出版から出版された『イニシエーション』〈一九八七年八月一日初版発行〉という書籍に掲載されている。）

もちろんこれらの予言は、尊師以外には予想できなかったことだ。

そして、その予言から数年を経た現在の日本を注意深く見てみよう。信じられないことかもしれないが、わたしたちが気づかないうちに、日本の政治や社会や経済、マスコミは、まさに尊師が予言した方向に変化してきているのである。

最終戦争に至るまでのプロセスを尊師がここまで正確に見抜かれていたことに対しては、正直言って驚きを禁じ得ない。では、実際これら四点の予言がどのように現実化しているのか――それを一つ一つ見ていくことにしよう。



87年5月のセミナーでその後の日本を正確に予言されていた尊師

類似点1 急激に右傾化する政財界

政治の右傾化は、戦争の前兆である。第二次大戦前はそうだった。

そして、麻原尊師は八七年の五月、その後の日本の政治について、

「政治的には右傾化してくるだろう。」

と予言されていた。

では、現在の政治はどうだろうか。

そう、事実そのとおりになってしまった。**まず第一が、今年六月のPKO協力法の制定である。**

尊師は、最終戦争に日本が参戦すると予言されていたわけだが、この法律の制定によって、その可能性が一気に高まったのだ。というのも、周知のとおり、自衛隊の海外派兵が法的に可能になったからだ。

注目すべきは、尊師がこの予言を公表された時期だ。それは八七年のことだったが、その当時は、当然PKO協力法制定の動きなどみじんもなく、わたしたちは日本が参戦するという尊師の予言を聞いて、まさかそのような憲法違反の暴挙が行われるとは思えず、耳を疑った。自衛隊は海外に出て戦争なんかできないということをみんな知っていたからだ。

しかし、今年になって、**突然自衛隊が海外へ出られるようになり、最終戦争参戦への道は開かれた。**尊師の予言の現実化が一歩近づいたわけである。こうしたことからも、尊師がいかに情報に惑わされず、神秘的な力によって冷静に正確に未来を見ておられるかがわかる。



朝日新聞

PKO協力法成立

自衛隊の本格的海外派遣に道

社党 社民連 本会議を欠席

同日選なし確定的

国民合意の芽を育てず

月内にカンボジアへ調査団

PKO協力法制定で、日本の最終戦争参戦への道は開かれた……

◉「中東へ派兵せよ」——噴出する過激発言

第二に、日本の運営に大きな影響力を持つ自民党政治家や経済界の大物が極端に右傾化し、「自衛隊の海外派遣は合憲である」と公然と主張しはじめたことだ。どう考えても、国民一般の感覚からはかなり突出した極右的意見だ。

そんな過激な論客の一人が、元自民党幹事長で次期総裁最有力候補と有望視されている有力政治家、小沢一郎氏である。

小沢氏は湾岸戦争の際、海部首相に対して、「現行法でも自衛隊の中東への派遣は可能だ」と言って、「中東に自衛隊機を派遣すべきだ」と説得した。さらに翌年には、自民党内に設置された「国際社会における日本の役割に関する特別調査会」の会長として就任。同会の答申案は、**「『武力行使は自衛のための必要最小限のもの以外は許されない』という憲法第九条の解釈は時代遅れだ。国連の指揮の下での武力行使は憲法上容認される」**という驚くべきものだった。

この過激な主張に対しては、元防衛庁長官の栗原祐幸氏ですら、

「この方向で議論を進めていくと、侵略戦争以外なら、自衛隊がどこへでも行って戦えるということになる。そうなったら、どこに歯止めがあるのか。」

と批判している。

しかし、これが自民党最大派閥の竹下派に属し、しかも次期総裁有力候補（＝次期総理大臣最有力候補）と目されている政治家と、その周辺の見解なのだ。

そして、財界にも、こうした過激な意見を持つ有力者が増えてきた。例えば、キャノン会長の賀来竜三郎氏は、

「憲法を改正して自衛の軍隊を持ち、国連平和軍にはそれを派遣すればいい」

と述べているし、また、日向方斉関西経



朝日新聞

1992年(平成4年)2月21日

国連軍参加へ検討要請

憲法解釈変更迫る

国連指揮下 武力の行使「9条に触れぬ」

自民・小沢調査会が答申案

→小沢氏率いる通称「小沢調査会」は自衛隊の海外派遣を積極的に推進した。

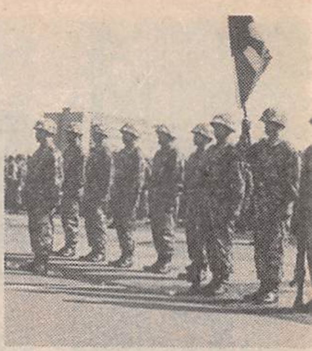
小沢一郎氏↓



湾岸戦争の際、小沢氏らによって海外に派遣されるところだった自衛隊のC130輸送機

済連合会会長（八〇年当時）は、「非常時に対しては、徴兵制などの研究なども必要であるかと思うのであります。」と、徴兵制の必要性まで訴えているのだ。

日本を動かす有力政治家と有力財界人が、堂々と「軍隊だ、徴兵制だ」との主張を展開し始めていることは恐るべきことだ。まさに日本は尊師の予言どおり進んでいるものと考えざるを得ない。戦前を彷彿とさせる。


徴兵制を望む政財界の有力者が増えてきている

類似点2
強大化する国家・警察権力

第二次大戦前は、「治安維持法」や「国家総動員法」の制定など、国家・警察権力が強化され、戦争を実施する体制が整備されていったものである。

そして、麻原尊師は八七年五月に、

「政治的な面だが、国家の力・警察の力が増大していくだろう――。」

と予言されていた。では、五年を経た今、日本はどうなっているのだろうか。

まず、国家の力が強くなった例としては、PKO協力法によって国家総動員体制の基礎が整えられたということが挙げられる。いきなりこう言っても信じられないかもしれないが、政府はその気になれば、自衛隊の海外派兵に対して国を挙げての協力体制をとることができるようになったのだ。

それは実際に条文を見ればわかる。まず、総理大臣の命令の下、すべての国家公務員は命令されれば否応なしにPKO活動等に参加しなければならないし、なんと総理大臣は、地方公務員や民間団体に対しても、人、労働、物を提供するよう〝協力〟を求めることができるのだ。もちろん、表向きは〝協力要請〟なので強制力はないが、現在の力関係からして事実上の半強制であることは、自由法曹団の弁護士等からも指摘されているとおりだ。

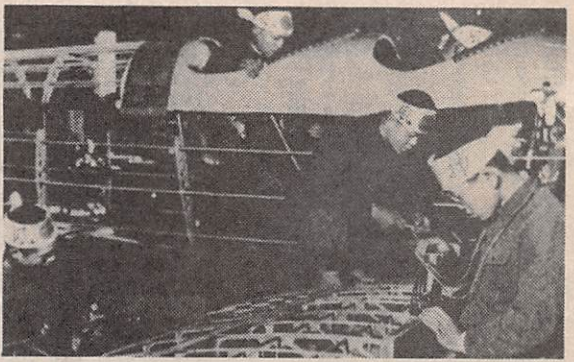
つまり国は、民間の物資や労力、専門的な知識・技術を、思うがままにかき集められるようになったわけだ。しかも、国会を経ずにである。これは、国家による徴発・徴用を認めるものであり、国家総動員体制づくりへの布石であり、国家の力の増大を示す最たる例である。

さらに、尊師の予言どおり、警察の力も飛躍的に増大している。PART6でも述べるが、「暴力団新法」がそうだ。これによると、司法手続きを経ずに警察権力だけで「暴力団」と指定した団体の活動を制限できる。そして、あの「国家秘密法案」や「拘禁二法案」の制定も水面下で画策されている。

もし悪用されれば戦前の暗黒時代が再現されるであろう、これらの法律。国家・警察の力の強大化は日々進められているのだ――。



戦前、国民はいやおうなしに戦争に協力させられた


戦闘機の製作に動員された人々、あの暗黒時代の再来は間近か……

人も物も政府の思いどおり――国家総動員法を再現するPKO協力法

以下の条文を見れば、PKO協力法が、戦前の「国家総動員法」の再来を思わせるものであることがわかる。

「第12条　本部長（＝内閣総理大臣）は、関係行政機関の長に対し、実施計画に従い、国際平和協力業務であって協力隊が行うものを実施するため必要な技術、能力等を有する職員を協力隊に派遣するよう要請することができる。（後略）」

「第12条 2　関係行政機関の長は、前項の規定による要請があったときは、その所轄事務に支障を生じない限度において、同項の職員に該当する職員を期間を定めて協力隊に派遣するものとする。」

「第11条 2　本部長は、前項の規定による（協力隊員の）採用に当たり、関係行政機関若しくは地方公共団体又は民間の団体の協力を得て、広く人材の確保に努めるものとする。」

「第26条　本部長は、第3章の規定による措置によっては国際平和協力業務を十分に実施することができないと認めるとき、又は物資協力に関し必要があると認めるときは、関係行政機関の長の協力を得て、物品の譲渡もしくは貸付け又は役務の提供について国以外の者に協力を求めることができる。」

類似点3 統一されていく思想――進むマスコミ統制

さて、戦争前には国家によって、国民への思想統制が行なわれるものだ。戦前にもマスコミ総動員の大規模な思想統制が行なわれ、世論が「米英撃つべし!」一色に染まったのはご存じの通り。

そして、麻原尊師は八七年五月にこう予言されていた。

「日本の国民は徐々に徐々に、同じようなものの考え方に統一されていくだろう――。」



かつて国民世論は「戦争賛成」へと導かれていった……



PKO法案賛成へと世論は急変。情報におどらされ、日本人は再び同じ過ちをおかそうとしている

では、現在の日本はどうか。

実は、戦前と同じ状況が今の日本にも起こってきているのだ。

それは、自衛隊の海外派兵に対する世論が、わずか一年足らずで反対から賛成へと大きく変化した事実を見ればよくわかる。軍事ジャーナリストの神浦元彰氏が、次のように述べているとおりだ。

「PKO法案は……揺さぶりだった。その結果、国民の平和感覚は大きく変化しました。その証拠に、『自衛隊をやめさえすれば、別組織で海外に出てもらってけっこう、けっこう』という社会党議員も出てきたし、『非武装であれば、PKO、国際緊急援助隊に自衛隊を出してもいいのではないか』といった街の声が大部分を占めるようになっている。」

現に、朝日新聞社の世論調査によると、九〇年十一月の時点では、法案賛成二十一%、反対五十八%と反対論が強かった。しかし、今年(九二年)五月では、賛成四十七%、反対四十一%と、賛成に向けて世論が急変しているのである。

◉こうして進んでいる政府のマスコミ統制

では、なぜ、このようなことになったのか?

それは、自民党政府が主要マスコミを支配下に置いて、国民世論を誘導しているからである。戦前の政府が言論を直接的に統制したのとは様子が違うが、現代のマスコミも実質的には政府の支配下にあるのだ。

まず、テレビやラジオは認可を要する事業なので、政府に対して立場が弱く、NHKも政府の支配下。大手の新聞社は、土地購入や広告収入について自民党の世話になるほど癒着している。その結果生じている最近の「なれ合い的」報道傾向について、中京大学社会学部の池田昭教授は、

「一九七二年にはいわゆる記者会見というものが、一方的に開かれてまして、権力側の情報しか新聞記者に流さないと。で、記者自身もそれに甘んじて事実を確かめようとせずに書いていているという傾向が強くなっているんですね。」

と述べている。

また、元兵庫県警巡査の松本均氏は、県警本部内に設置されている記者クラブの記者や管内に住む記者が、公安によって秘かに身元や思想的傾向を調べられ、監視・盗聴されていると証言。警察当局がマスコミを管理下に置いていることを告発した。

こうして自民党は主要マスコミを支配下に置き、国民世論の統一を謀っているのである。

そして――、思想統制の矛先は子供たちにも向けられている。八九年二月に文部省が発表した「新学習指導要領」では、日の丸掲揚と君が代斉唱を初めて義務づけ、国家意識と愛国心の育成を強く掲げている。また、天皇についての理解と敬愛の念を深めるべく指導するよう定められ、"教えるべき歴史上の人物"の一人として初めて軍人が選定されるとともに、戦争に反対した人物(与謝野晶子など)は削除された。

「日本の国民は徐々に徐々に、同じようなものの考え方に統一されていくだろう。」

このように、わたしたち日本国民は「同じようなものの考え方」に誘導されているのだ。それも、戦前に比べて、より巧妙な方法によって――。



「日本の国民は徐々に徐々に、同じようなものの考え方に統一されていくだろう。」子供たちへの思想統制はすでに始まっている……

類似点4 激化する経済摩擦と底なし不況

第二次大戦が、世界恐慌をきっかけに、植民地を持たない日本やドイツ等が他国の保護貿易政策によって経済的苦境に追い込まれて生じたのはご存じのとおり。

そして、麻原尊師は、一九八七年に、「日本は、アメリカ・ヨーロッパとの経済摩擦をきっかけとして、少しずつ少しずつジリ貧の生活に入っていくだろう。その本当の口火が切られるのは一九九〇年だ。」と同じような状況が発生すると予言されていた。

では、現在の日本経済はどうだろうか――。

まず、一九九〇年に生じた、PART6でも述べるように、「湾岸危機」をきっかけに日米関係がこじれ、経済摩擦が激化したことは周知の事実。

日本経済の動きも、尊師の予言どおり、「ジリ貧」状態に向けて突き進んでいる。

◉ジリ貧状態へまっしぐら

まず第一に、GNP（国民総生産）の成長率に、九一年八月から急ブレーキがかかりはじめ、八六年十二月の大型景気スタート以来、最低の伸び率にまで下がったのだ。設備投資も、九一年にはマイナスに転じ、個人消費にも陰りが見られ、飲み屋街では客足が鈍り始めた。

そして、経済摩擦の激化のために、有力な危機打開策であった〝輸出〟が不可能になってきている。某メーカーの幹部も、「過去においては輸出がダメなら国内があり、国内がダメなら輸出が逃げ道としてあったが、今は両方ダメで商品のハケ口がない」（東京商工リサーチ「TSR情報」九二年七月十六日号より）と嘆いている。

さらに、**史上空前の勢いで倒産が相次いでいる**。今年上半期の負債総額は史上最高を記録。また、大型倒産も過去最高。倒産件数も五カ月連続して一千件を超える急増ぶり。ある民間調査会社の担当者は「史上最悪」とまで語る。

株価も、今年三月中旬に二万円の大台を割り込んで以降、六月下旬には一万五千円台にまで突入して、帝国データバンクも、「底が見えていないんです。どこまで落ちるのか見当すらつきません。」（『JICPAジャーナル』九二年二月号より）と先行きの暗さを隠せない様子だ。

◉戦前の状態と酷似――経済アナリストが警告

「どこまで落ちるのか……」。この不安に答えるかのように、ある有名外国人経済アナリストが、日本経済の未来について絶望的な予測を立てている。

その人物とは、リース・モッグとデビットソンの両氏。これまで、ブラックマンデー、共産主義国家の崩壊、日本の投資ブーム崩壊などを予見し、見事に当てて評判になっている両氏は、共著『大いなる代償』の中でこういうのだ。

一九八〇～九〇年代の日経平均株価は、大恐慌が世界を襲った一九二九年前後のダウ平均株価と同じ値動きをしている（図参照）。現在一万五千円代の日経平均が同様の値動きをたどるとすれば、九三年から九四年以内には、極限的な底値へと急激なカーブを描きながら落ち込んでいく。つまり、日本の株価の最安値は日経平均で約四千円、ほぼ九十%の下落を招くだろう――というのである。あの世界恐慌の悪夢が再現される――そういうのだ。（左図参照）

その他にも、英国『エコノミスト』誌の元東京支局長ビル・エモット氏が、日本でも話題を呼んだ著書『日はまた沈む――ジャパン・パワーの限界』の中で、次のようなことを述べている。

「日本はいま、膨大な余剰資本を背景に、生産者の国から消費者の国へ、ワーカホリックの国からレジャー大国へ、貯蓄国



日本製品を破壊するアメリカ人。輸出も不可能になりつつある



史上空前の勢いで相次いでいる倒産――ジリ貧状態へまっしぐら



世界恐慌前と不気味なほど一致する現在の株価の動き

家から投機家の国へ、若者の国から年金生活者の国へと変貌をとげつつあり、この傾向がいずれ日本の繁栄に終止符を打ち、資本大国日本ははかなくも短命に終わる。九〇年代半ばに日本の衰退が始まる。」

迫り来る大不況、日本経済の陥るジリ貧状態。それは架空の話ではなく、極めて現実味をおびてきている。麻原尊師の予言どおりにである……。

経済恐慌から世界戦争へ

さて、政治的にも、社会的にも、経済的にも、そして軍事的にも、戦前と酷似する現在の日本。もし今、大規模な経済危機が日本を襲い、日本人の生活レベルが一気に低下したらどうなるだろうか……。

「九三年、日本は再軍備をするだろう。わたしたちは技術を売る以外生きていけないのだが、その貿易をブロックされたなら、力で突破するか、生活のレベルを落とすしかない。日本人の気質からいくと、必ず強硬突破するだろう。」（八七年四月十八日「実践瞑想ヨーガ」にて）

麻原尊師は、こう予言されている。

来るべき近未来の日本の状況は、あたかも、世界恐慌に苦しみながらも海外市場を持たず、打開策もなくて爆発寸前だった戦前の日本にソックリなのだ。そして、危機打開の糸口を大陸資源に見いだして、大陸に進出し、戦争を拡大していった半世紀前の日本……。あの忌まわしい過去の歴史を、日本は再び繰り返そうとしているのである。



低下した生活レベルに日本人が堪えられなくなったら……

そして、世界戦争。尊師が予言された世界戦争の勃発が、ビル・エモット氏の分析からも、次のように裏づけられるのだ。

「次に来る世界不況の最後の引き金になるのは、日本経済の衰退、東京市場の崩壊だろう」と言われているが、ビル・エモット氏は日本経済衰退の時期を九〇年代半ばだと予測していた。つまり九〇年代半ば以降、大規模な恐慌が世界中を包み込むと有力な経済アナリストは見ているのだ。

これは、

「一九九九年……世界経済が行き詰まり、生きていけないという窮地に陥ったときに世界的規模の戦争が始まり、それに日本が参戦していく」

という尊師の予言と、時期が見事に一致している。

冒頭でも述べたように、第二次世界大戦は一九二九年の世界恐慌をきっかけに勃発した。そして現代は、当時の状況とうり二つなのである。

このことからも、第三次世界大戦への準備は着々と整えられているといえよう……。

第3章
尊師の終末予言と一致する古今東西の大予言

さて、現実の世界と日本の動きを見ることによって、尊師の予言どおり、最終核戦争が中東で勃発すること、そして、それに日本が参戦していくであろうことが実感できた。

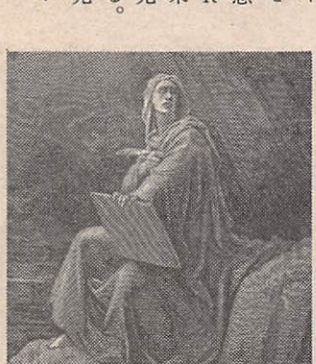
そして、この尊師の予言を裏づけるかのように、なんと世界中の予言も中東での最終戦争を暗示していたのだ。

あの大預言『ヨハネの黙示録』も中東での最終戦争を暗示

その第一が、聖書の大預言「ヨハネの黙示録」である。

「ヨハネの黙示録」とは、イエスの弟子ヨハネによって記されたもので、『新約聖書』の巻末に含まれている。ヨハネは西暦九五年ごろ、ローマ帝国のドミティアヌス帝によってエーゲ海の孤島パトモス島に流された。そこで彼は脱魂状態（瞑想の究極である「サマディ」〈PART6参照〉のこと）になり、未来の出来事を示す神秘的で恐ろしいヴィジョンを見た。その光景を記したものが、この書である。

この第十六章に、大戦争の恐るべき光景が描写されている。そして、この戦いに先だって、「全世界の王」たちが「戦い」をするために「ハルマゲドン」という所に「招集」されるという記述がある（次頁コラム参照）。ハルマゲドンとはよく知られているとおり、最終戦争を意味している。よって、この描写が最終戦争



最終戦争のヴィジョンを見たヨハネ


石油を求めて「全世界の王」が集まる……

の様子を現わしていることは間違いない。
　そして、この最終戦争の舞台が中東であることを示しているのが、次の箇所である。
「第六の者が、その鉢を大ユウフラテ川に傾けた。すると、その水は、日の出る方から来る王たちに対し道を備えるために、かれてしまった。」
　「大ユウフラテ川」とは、トルコに源に発し、シリア、イラクと流れてチグリス川と合流、シャッタル・アラブ川と名を変えて最終的にはペルシャ湾に注いでいる川である。そして、この中東を流れる川の水が涸れることによって、世界中の王が中東での最終戦争に集まってくるというのだ。まさに、ここで中東が示されているのだ。
　では、ここでいう〝水〟とは何かというと、この地域にかかわる重要な水、すなわち〝石油〟を指していると麻原尊師は解釈されている。すると、次のような解釈が可能である。
　——近い将来、自国の石油だけでは需要が賄いきれなくなったアメリカ、ロシア、日本等の先進諸国に対して、豊富な石油を有して発言力を増した中東の産油国という構図ができあがる。そして、これらの産油国が〝大ユウフラテ川〟の水がかれるように、〝輸出を禁止する〟などの強硬手段を取る。それに対して〝日の出る方から王たちが〟、すなわち日本等の複数の国々が石油を奪いに攻めてきて、その結果、最終戦争が勃発する——のであると。（なお『ヨハネの黙示録』の解釈の詳細については、『滅亡の日』『滅亡から虚空へ』麻原尊師著・オウム出版 をご覧いただきたい）。
　このように、『ヨハネの黙示録』も、石油をめぐって中東で最終戦争が起きることを暗示していたのである

書籍案内

『滅亡の日』
『ヨハネの黙示録』の謎を尊師が徹底的に解読。人類滅亡のシナリオの封印が解かれた。


1854円
『滅亡から虚空へ（続・滅亡の日）』

そして、あのヒトラーもノストラダムスも予言

　そして、あのナチス・ドイツのヒトラー総統も、中東での最終戦争を予言していたというのだ。
「ヒトラーと予言とどんな関係があるのか？」
という疑問を持たれる方もあろう。だが、ヒトラーがオカルティストだったことは周知の事実だし、また、彼は瞑想等の神秘的な力によって未来を知る能力を持っていたともいわれている。
　事実、彼が第一次大戦に伝令兵として従軍していたとき、戦場で敵の砲弾が落下する位置を予測して被弾を避けていた話は比較的よく知られている。だから彼の戦友は、「ヒトラーについて行けば絶対に死なない」と言っていたほどだ。
　そんな彼は、日本の近代化、月着陸、コンピュータと情報システムの発達、日本・韓国・台湾の自動車産業の発達、ゴルバチョフ書記長の登場、大陸間弾道ミサイル、北海の汚染、酸性雨等の予言を残し、そのほとんどを適中させてきたという。
　そして、最終戦争の予言だ。彼は、一九四五年の三月から四月にかけて国民に対して行なったラジオ放送で、「ユダヤ」そして「あわれなアラブ四カ国」が関与し、「東西が激突」する「最終戦争」が勃発すること、その舞台は中東であることを予言しているのである（五島勉著『1999年以後』祥伝社より）。


ナチスの総統
アドルフ・ヒトラー

　なお、あの大予言者ノストラダムスも、『諸世紀』第五巻二十五番の詩で、中東での最終戦争を予言しているという学者もいる。
　このように、中東で最終戦争が起きることは、『ヨハネの黙示録』、ヒトラー、

『ヨハネの黙示録』における最終戦争の描写

　第六の者が、その鉢を大ユウフラテ川に傾けた。すると、その水は、日の出る方から来る王たちに対し道を備えるために、かれてしまった。また見ると、龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきた。これらは、しるしを行なう悪霊の霊であって、全世界の王たちのところに行き、彼らを召集したが、それは、全能なる神の大いなる日に、戦いをするためであった。(見よ、わたしは盗人のように来る。裸のままで歩かないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身に着けている者は、さいわいである。）三つの霊は、ヘブル語でハルマゲドンという所に、王たちを召集した。
　第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声が聖所の中から、御座から出て、「事はすでに成った」と言った。すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった。大いなる都は三つに裂かれ、諸国民の町々は倒れた。神は大いなるバビロンを思い起し、これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなった。また1タラントの重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた。人々は、この雹の災害のゆえに神をのろった。その災害が、非常に大きかったからである。（第16章1～21節）

そしてノストラダムスによっても予言されていたのである。神秘的な力を持つ人物は、当然のことながら、すべて同じ未来ヴィジョンを見ているのである（予言のメカニズムについては、ＰＡＲＴ６の第二章「なぜ当たるのか、予言メカニズムの解明」参照）。

終末戦争を前にして……わたしたちはどうすれば

以上に見てきたように、麻原尊師の予言どおり、世界的規模の核戦争が中東で発生し、それに日本が参戦していく条件が着々と整いつつあることがわかった。

ＰＫＯ協力法成立、国家総動員体制の整備、思想統制の強化、迫り来る経済危機、爆発的な人口増加、解決の糸口のないエネルギー危機、中東に拡散する核兵器……そして最終戦争。

麻原尊師の予言は一歩一歩現実化に近づいている。人類の破局は目前に迫っている。著しい進歩を遂げた恐るべき破壊力を持つ核兵器が、この地球上で次々と爆発していく時代がもうそこまで来ているのだ。燃え盛る太陽のような強烈な熱線と放射能と爆風によって、地上があまねくなめ尽くされ、あらゆる物質が粉砕され、多くの生命が奪われる危機が、もうそこまで迫っているのだ。世界中の予言書に描写されている終末の惨状が、この地上に出現するときが来ているのだ。

このような有史以来の重大な危機に直面したわたしたちは、いったいどうすればよいのだろうか。混乱と流血の惨劇の中で、親が死に、子がもだえ、恋人が倒れ、友人が傷ついていく様を、なす術もなく眺めつつ、自らも苦しみながら廃虚の中へ倒れていくしかないのであろうか……。



世界の予言書に見る人類大破局の描写

麻原尊師は、人類は中東で勃発する終末戦争を機に破局へ突き進んでいくと予言されていたが、その破局の様子は、世界中の予言書にも描写されているのだ。

ここでは、仏教経典『転輪獅子吼経』と『ヨハネの黙示録』、そして『新約聖書』から、破局の描写を見てみることにしよう。

これらの経典は作成された時期も場所も全く異なっているのにもかかわらず、内容が奇妙に一致する箇所がある。きっと、これらの予言書の著者たちも、麻原尊師と同様に、アストラル世界の同じ未来ヴィジョン（ＰＡＲＴ６参照）等を見ていたのであろう。

◆『転輪獅子吼経』の描写
・七日間の最終戦争――核シェルターで生き残る人々

まず、『転輪獅子吼経』に記述されている最終戦争の描写を見てみよう。

「人間の寿命が十歳のとき、七日間、『兵器が重大な影響を与える期間』があるのだ。そこで、人々はお互いに『獣』として認識し合うのである。

人々は鋭利な武器を手に現われ、その鋭利な武器によって、『これが獣だ。これが獣だ。』と、お互いに生命を奪い合い、人々の大部分はここで死に至るのである。……しかし、人間の中にはこのように考える者も現われるのである。

『わたしたちはだれの命も奪うまい。また、だれもわたしたちの命を奪うことはあるまい。わたしたちは、草木のジャングル、林のジャングル、樹木のジャングル、渡るのが困難な川、でこぼこの岩山に入り、野生の根が実となる食物で暮らすことにしよう。』と彼らは考えるのである。

そこで、人々はその七日間身を隠し、野生の根が実となる食物で暮らすのである。

そして、この七日間が過ぎ、人々は身を現わすのである。

『よかった。あなたも生きていたのか。』

『友よ、あなたも生きていたのか。』

人々は集まり、お互いに抱擁しあい、祝い歌い、安心しあうのである。」

「『獣』として認識する」というのは、これは猟師が獣を襲うような気持ち――すなわち相手に対して強烈な敵愾心を持つということを表わしている。人々は互いに激しく憎しみ合い、最終戦争に至るのだ。

興味深いことに、ここには一部の人々が、「でこぼこの岩山」という核シェルターらしき施設に避難し、食糧を備蓄して核戦争を生き残る様子までが記述されているのである。この後生き残った人々によって理想的な社会がつくられていく。なお、詳細は『人類滅亡の真実』（麻原彰晃著・オウム出版）参照のこと。

◆『ヨハネの黙示録』の描写
・『ヨハネの黙示録』も核シェルターを予言

そして、『転輪獅子吼経』と興味深い一致が見られるのが、次の『ヨハネの黙示録』の破局の記述だ。

「小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようになり、天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落とされるように地に落ちた。天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と島とはその場所から移されてしまった。地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。そして、山と岩とにむかって言った、『さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔を小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか。』」（第六章）

これは大破局の際の火山の大噴火等を描写しているのだが、ここで人々が「ほら穴や山の岩かげ」に身を隠すあたりは、『転輪獅子吼経』で人々が「でこぼこの岩山」に避難したという記述と奇妙に一致している。

（『ヨハネの黙示録』の詳細な解釈については『滅亡の日』『滅亡から虚空へ』（麻原彰晃著・オウム出版））

◆『マタイによる福音書』の描写（イエス・キリストの予言）

・そして最後が来るのである

以下に挙げるのは、すべて『マタイによる福音書』の中のイエス・キリストの言葉である。イエスは破局の様子を以下のようにはっきりと予言している。

「また、戦争と戦争のうわさを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起こらねばならないが、まだ終わりではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。……そしてそれから最後が来るのである。」

「そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。屋上にいる者は、家からものを取り出そうとして下におりるな。畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは不幸である。あなたがたの逃げるのが、冬または安息日にならないように祈れ。その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな患難が起るからである。もしその期間が縮められないなら、救われる者はひとりもいないだろう。しかし、選民のためには、その期間が縮められるであろう。」

「しかし、その時に起る患難の後、たちまち日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。」（第二十四章）

なお『新約聖書』の解釈の詳細は、『キリスト宣言』『キリスト宣言PART2』（麻原尊師著・オウム出版）を参照していただきたい。

◆大本教指導者・出口王仁三郎

戦前の大本教の指導者で、日露戦争や第二次大戦の経緯、原爆投下を予言し、予言者としても有名だった出口。彼は、「火の雨が降る」という空襲の予言が適中したことをある人から戦後指摘された際、こう答えた。

「あれはまだ本物じゃない。ほんとうの火の雨はこれからじゃ」

これは、第二次大戦以上の大戦が今後到来することを暗示している。

◆破局の時は近い！

以上に見たように、世紀末の破局は世界中の予言書によって予言されている。

「でも、それはこの世紀末のことを指しているのか？」

と思われるかも知れない。

しかし、それらの書物には、次のように、破局が起きる時代の世相までもが描写されており、明らかに現代を指しているのだ。

例えば、『マタイによる福音書』には、イエスの言葉として、

「人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう」（第二四章）

とある。つまり破局の時代には、「ノアの方舟」の話にもあるように、精神性が堕落して人々は神を信じなくなり、そして洪水が頻発するのだ。

また、『ヨハネの黙示録』には、

「悪霊のたぐいや、金、銀、銅、石、木で造られ、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を礼拝して、やめようともしなかった。また、彼らは、その犯した殺人や、まじないや、不品行や、盗みを悔い改めようとしなかった」（第九章）

と記されており、破局の前には、偶像崇拝等の低次の信仰が流行し、人々の間には悪事が蔓延するとされている。

『転輪獅子吼経』も同じことを述べている。

その時には、「死後の世界を否定したり、天界はないと主張する」見解が多きを占めるようになるとあるのだが、これはイエスの「ノアの時のよう」という言葉と一致する。そして、人間の第一の主食が穀類になるとも記されている。

さらに、

「聖なる修行者をはじめとして、本来尊敬を集めるはずの者たちがことごとく軽蔑され、それ人を堕落させる職業の者たちが尊敬される。そして、人を善しとする風潮が蔓延する。そして、人間の質が悪くなり、動物化する。近親者において和合がなくなり、邪悪心ばかりが表われ、険悪で殺伐とした風潮が助長される」

というのだ。

以上のような聖書や仏典の記述が、まさにこの現代の世相を指していることはいうまでもなかろう。わたしたちの周囲を見渡せば、よくわかることだ。

そして、もう一つ。『転輪獅子吼経』には、最終戦争が起きるのは、「人間の寿命が十歳のとき」だと記されているが、これもまた現代の人間を意味してるのだ。というのも、それは、中川智正医師が、

「生物学的には、寿命は受精の時点から考えるのが妥当なので、人工妊娠中絶はもちろん、IUDという避妊器具などによっても、受精直後から出産までに多くの生命が失われていることになる。特に中絶が大規模に行われている旧ソ連やIUDの普及が著しい欧米の数字を含めば、『平均寿命』が十歳というのはまさに現代の情勢をよく表した表現です。」

と話しているとおりなのである。

さて、これら聖書や仏典の描写が現代においてすでに適中している以上、その後に書かれている描写、すなわち、戦争、地震、噴火、洪水などの恐るべき大破局がまもなく現実化することは疑いない。

そう、破局の時は近いのだ！

PART2 世紀末救世主は"盲目の人"

尊師はノストラダムスに予言されていた！



現実の世界は、滅亡予言どおりに突き進んでいる——もう人類に救われる道は残されていないのだろうか。

いや、古今東西の予言者は、この哀れな人類を見捨ててはいなかった。わたしたちが救われる唯一の道を、彼らは皆こう予言しているのである。

「世紀末の人類大破局を前にして、救世主が登場する。彼は選ばれた一部の人々を率いて人類を正しい方向へと導いていく。そして、大破局の過ぎ去った地球に新しい世界を建設していく——。」

残された道。それは、世紀末に登場する救世主のもとに集って、彼の導きのもとに真理の大道を歩むことだと予言者はいう。では、わたしたちが仰ぐべき救世主とはいったいだれなのだろうか。

実は、その姿は、あの大予言者ノストラダムスによって、はっきり予言されていたのだ。



大予言者ノストラダムス

大予言者として有名なノストラダムスは、十六世紀のフランスに生きた人物である。彼は瞑想によって数々の未来のヴィジョンを見て、それを謎めいた四行詩に表現し、その詩集を『諸世紀』と題して発行した。

彼は、人類のその後の歴史を恐るべき正確さで予言していた。そして、今世紀末の人類の大破局と、そのときに登場する救世主についても予言を残していたのであった。彼の予言詩から、世紀末の救世主の描写をつぶさに見てみることにしよう。



世紀末救世主を予言していたノストラダムス



信頼性高い オウムのノストラダムス解釈

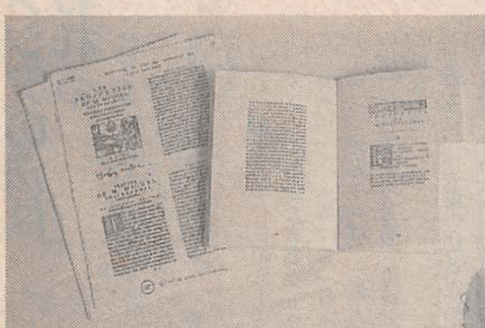
　なお、オウム真理教はノストラダムスの詩句を正確に解釈するために、現地フランスへ飛び、他のノストラダムス研究家の追随を許さぬほどの資料をそろえ、人脈を得た。例えば、日本では未公開（日本の研究家が「失われた予言詩」と言っていたもの）の詩のコピーを入手し、リヨンのノストラダムス協会からは「本物」だと太鼓判を押されているノストラダムスの生前の詩集（一五五五年・五七年版）をも入手した。また、同協会のリーダーであり、文献学者、研究家としても有名なショマラ氏との交流も保っている。

　なお、そうした調査の結果、現在日本に出回っているノストラダムスの詩には、偽物が多く含まれていることがわかった。あのノストラダムスの「一九九九年七の月……」という有名な詩でさえ、ノストラダムスの死後の版から出ていることを突き止めたのだ。日本の出版社や研究者は、よく調べもせずに信憑性の低い資料をもとに解釈を出し続けていたわけだ。

　よって、オウム真理教では、実際の翻訳作業にあたって、本物と保証されている原典のみに基づいて、十六世紀のフランス語辞典、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語の辞書、ならびに練金術の辞書を使用し、古語を含む考え得る限りの訳文を作るという厳密な方法を採った。その結果、日本で広く流通している一九四九年版には、本物とされる一五五五、五七年版と比べて、いたるところに表記の違いが見られることが明らかになったのである。

　さらに正確な解釈における極めつきは、予言解読者としての麻原尊師の適性の高さである。ノストラダムスは、「占星術によって、不眠不休と計算をともなった霊感や神秘的な啓示のおかげで、わたしの予言は文書にされた」と述べているが、これは、占星術、霊感、神秘的な啓示等を理解し体験している者、つまり尊師であればこそ正確な解読ができるということを意味する。

　このように、資料、人脈、解読者という三点において、オウム真理教のノストラダムス解釈は、他に抜きんでた高い信憑性を持っているのである。



オウム真理教が収集したノストラダムス関係の文献。日本で未公開のものも含まれている



現地フランスへ調査に飛んだ麻原尊師



ノストラダムス協会会長のショマラ氏との対談

オウム真理教のノストラダムス研究成果

　オウム真理教は、総力を挙げてノストラダムスの予言詩を解読。その結果、衝撃的な内容が次々と判明した。その研究成果は以下の文献によって、世に公表されている。解読内容の詳細については、そちらをご覧いただきたい。

『ノストラダムス秘密の大予言』（麻原彰晃著）



600円

『マハーヤーナ』NO．20・21（麻原彰晃監修）
ビデオ『ノストラダムス秘密の大予言——一九九九年の謎』（麻原彰晃監修）
ビデオ『ノストラダムス秘密の大予言PART2——遥かなる時間を隔てて今よみがえるノストラダムス』（麻原彰晃監修）（いずれもオウム出版）



1・2とも1000円

　なお、オウム真理教のラジオ放送「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」でも、ノストラダムスの予言詩の解読コーナーを設けている。詳細は本誌巻末ラジオ案内参照。



第一の詩　メシアの法は日本から現われる

では、いよいよ、ノストラダムスが救世主をはっきり描写している、四つの重要な詩を順に見てみよう。

第一番目は、救世主が登場するという詩。第二番目は、救世主の教えを示す詩。第三番目は、救世主の外見的特徴を示す詩。そして最後は、救世主の教団の特徴と登場するときの世界の動きを示す詩である。

まずは、第一番目の救世主の登場を描写した詩、第五巻の五十三番を見ていただきたい。

「第五章五十三
太陽の法と金星が争う
予言に合った（予言されていた）魂を支配者にする
二つのどちらも理解しない（お互いに理解できない）
偉大なメシアの法は太陽に由来する」
（一五五七年版・オウム真理教翻訳チーム訳）

この詩のポイントは、〝太陽の法〟と金星という言葉である。練金術辞典によると、太陽とは絶対的な真理を表わし、金星とは享楽的、エゴイスティック、快楽、無気力を表わす。

よって、この詩を要約するとこうなる。すなわち、真理に属する者と享楽的な煩悩に支配される者は、お互いに理解できず、その両者が、あるいはそういう社会が争う。そして、そういう勢力のぶつかり合う時代に、予言されていた真理の法を説くメシア（＝救世主）が登場するのであると。

なお、参考までにご紹介すると、ノストラダムスの解読で有名な五島勉氏は、この詩の中の「太陽」を「日本」と解釈している。だとすれば、「偉大なメシアの法」は日本から登場する法と読めることになる。

ちなみに、〝太陽の法と金星が争う〟といえば、オウム真理教は煩悩から離れることで絶対的な幸福を得るという立場を貫いたため、煩悩を肯定する現代社会と衝突したという経緯がある。

そして、こうした時期に出現するという救世主――これは麻原彰晃尊師のことを指していると思われてならない。次の詩を読めば、ますますその確信が強まってくるのを感じる。



救世主は日本から登場する！

世紀末の人類救済の使命を担う救世主は、この日本から登場する――。それをうかがわせる予言や発言をしている人物は数多い。ここでは、その一部をご紹介しよう。

◆アメリカの〝二十世紀における世界最大の予言者〟といわれるジーン・ディクソン



彼女は、こう予言している。

「世界の変革があるとすれば、まず日本に何らかの変革が起こり、それが世界に波及するだろう。こうして、世界の人々は日本人を畏敬するようになる。」

「東洋の神秘的思想は壮大なスケールをもって全世界を席巻し、キリスト教世界に非常に大きな変化を与えるだろう」

◆〝今世紀最大の天才〟アインシュタイン博士



一九二二年に来日した博士は、こう語った。

「世界の未来は進むだけ進み、その間いくたびか争いは繰り返されて、最後の戦いに疲れるときがくる。そのとき人類は真実の平和を求めて、世界的な盟主をあげねばならない。

この世界の盟主なるものは、武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を抜き超えた、最も古く、また尊い家柄でなくてはならぬ。

世界の文化は、アジアに始まってアジアに還る。それはアジアの高峰、日本に立ち戻らねばならない。

我々は神に感謝する。我々に日本という尊い国をつくってくれたことを……」





第二の詩 弟子に「不死」を説く救世主

なぜなら、この詩には救世主がどんな〝法〟を説くのか、その特徴がはっきりと記されているからだ。

「第四章　三十一
真夜中、高い山の上に月
ただ一つの頭脳を持つ新しい賢人がそれを見た
弟子を通じて不死になることを訓戒する
目は南に、手は内奥、体は火に」
（一五五五年版・オウム真理教翻訳チーム訳）



弟子に「不死」に至ることを説く尊師

ここに出てくる「ただ一つの頭脳を持つ新しい賢人」、これが救世主のことである。というのも、「ただ一つの頭脳」とは、この世でその人物しか持ち合わせていない頭脳ということであり、「新しい賢人」とは知性と智慧を兼ね備えた聖者のことを指している。つまり、人間を超えた偉大な精神性を持った唯一の人物ということになり、救世主を意味していることは疑いない。現に、他の予言でも同じ表現を使って救世主を表わしている例があるのだが、それは後述しよう。

そして、この詩で最も重要な語句は、何といっても「不死」である。これが、救世主の説く〝法〟の特徴を一番はっきり示しているからだ。皆さんは、

「不死に至ることを説いている人なんかいるのか？」

と思われるかもしれないが、わたしたちは詩の中にこの言葉を見つけたときは正直言って驚いた。

なぜかというと、現にオウム真理教では、**麻原尊師**によって「不死」に至る道が説かれているからであり、教団の指導者である「師」になるためには、この「不死」を得なければならないとされているからである。オウム真理教の修行者は皆それを目標にして修行に励んでいるのである。



◆歴代のローマ法皇の中でも特に霊性が高いといわれるピオ十二世

一九五二年、法皇はバチカンからNHKを通じて全日本へ向けて次のように語った。

「慈悲深き我らの主は、来るべき世紀を予言して、東の国の多くの人々が天国の饗宴に座するため『来り参じるだろう』といわれました。この喜ぶべき予言が愛する日本に実現いたしますことを……

ああすべての国々の王、すべての国々の望み、東よりの光、輝かしき永遠の光にして正義の太陽なる神よ！……御身の愛する日本、そして御身の名において、わたしがこよなく愛する日本の上にお恵みをもたらしたまわんことを……」（以上・広瀬謙次郎著『救世主は日本から現われる』（徳間書店）より）



バチカンまでもが、日本からの救世主の登場を予言していた

◆戦前の大宗教家であり予言者でもあった大本教の指導者・出口王仁三郎



彼は、日露戦争、第二次大戦の経緯、原爆の投下等を予言、適中させた有名な予言者でもあったが、ある人物に渡した遺書の中に、このような記述がある。

「いま、大本にあらはれし、変性女子（出口王仁三郎）はニセモノじゃ。誠の女子があらはれて、やがて尻尾が見えるだろ。女子の身魂を立て直し、根本改造しなくては、誠の道は何時までもひらくによしなし。さればとて此れにまさりし候補者を、物色しても見当たらぬ。時節を待ちていたならば、何れあらはれ来るだろう。」

つまり信者から救世主といわれていた彼も、自分は本物ではない、時期が来れば後から本物の救世主が出現すると予言しているのである。



「不死」――それは意識の完全な連続

ここでいう「不死」とは仏教用語だ。仏教の修行ステージには「不死のステージ」といわれる段階があるが、具体的には"意識が完全に連続する状態"のことを表わしている。どういうことか、以下にその意味を説明しよう。

わたしたちは、死に際して、魂が肉体を離れる。それと同時に、魂は「バルドー」と呼ばれる死後の中間状態に飛び込み、そのショックのために気絶してしまう。気絶した魂は、次の転生（生れ変わり）に先だって、生きていたときに積んだ善業・悪業に対する裁きを受ける。このときは意識を取り戻しているのだが、裁きの結果によって次の世界へと飛び込み、生まれ変わっていく段階で再び意識をなくす。このときに前生の記憶さえも失ってしまうのである。だから通常わたしたちは前生を覚えていないのだ。

しかし、もし死に際しても意識を失うことがなければどうだろう。鮮明な意識を保ちながら、バルドーへ移行し、そして転生すれば……。肉体は変わっても、意識だけは続いているので、転生しても前生の記憶は残ったままになる。以前自分はどこに住んでいたか、何をしていたか、だれと暮らしていたか、などということも承知している。このような状態は、事実上の「不死」である。

よって、意識の完全に連続した状態を仏教では「不死」と呼ぶのである。そして仏教では、この不死に至ったものこそ、個人の修行の到達点である「マハー・ムドラー」の完成者と呼ぶのである（マハー・ムドラーの詳細については『マハー・ムドラー』〈オウム出版〉を参照のこと）。修行によって意識の完全な連続を得た者は、実際二十四時間眠らなくてもすむようになり、睡眠によって意識が途切れることがない。これは、オウム真理教の百何十人もの「師」のステージにある者が経験しているのであり、オウム真理教の修行者は皆それを目標にしているのだ。

事実、皆さんも実際に尊師の説法をお聴きになればわかるように、「不死」という言葉が頻繁に登場する。よって、「弟子を通じて不死になることを訓戒する」という救世主が、麻原尊師のことを指しているのは間違いないといえる。



尊師の指導のもとで修行に励み「不死」に到達した「マハー・ムドラー」の成就者たち



尊師の秘儀「シャクティーパット」も予言されていた

では、次の描写に移ろう。四行目の神秘的な記述は、皆さんにはよくわからないかもしれないが、これもわたしたちから見れば麻原尊師のことを指していることがすぐわかる。これは、尊師が行なってきた「シャクティーパット」の様子そのものだからだ。

シャクティーパットとは、解脱者の手を通しての神聖なエネルギー移入のことであるが、「手は内奥」というのが、相手の心の内側を操作することを表わしている。これによってクンダリニー（尾てい骨に眠る霊的エネルギー）が覚醒し、体温が上昇し、「体は炎」となる。「目は南に」は、南にあるといわれる理想郷「シャンバラ」を目標としているのに他ならない。また、シャクティーパットは初期のころには「山の上」で行なわれたのである（なお、麻原彰晃尊師のシャクティーパットについては、『原爆覚醒』『奇跡のエンパワーメント』いずれもオウム出版をご覧いただきたい）。

このような「不死」を説き、シャクティーパットを行なう「ただ一つの頭脳を持つ新しい賢人」といえば、やはり日本で"唯一"最終解脱を果たされている麻原彰晃尊師しかいらっしゃらないことがわかるのである。

さらに、この詩の番号には、救世主がだれかを特定する決め手が隠されている。この詩の番号は四章の三十一。『諸世紀』の出版年の一五五五年に四百三十一を足すと一九八六年となり、麻原尊師が宗教活動とシャクティーパットを開始した年とピッタリ一致するのだ。ちなみに、ノストラダムスが年代を表わすのに数字のトリックを使っていたということは、よく知られている。

まさしくこの詩は麻原尊師の登場を予言したものといわざるを得ないわけである。

シャクティーパット



シャクティーパットとは、霊的エネルギー移入の技法である。成就・解脱した高いステージの修行者のみが、相手の額に右手の親指を当て、それを通じて霊的エネルギーを注入することができる。このとき、施術側は膨大なエネルギーを失う。それに対して、受け手側は移入されたエネルギーによって心身が浄化され、修行ステージが大幅にアップするのである。このシャクティーパットだけで、サマディを体験したという例さえある。現在、オウム真理教では、少なくとも「マハームドラー」（ジュニアーナ・ヨーガ）という三つ目のヨーガを成就した正悟師がシャクティーパットを行なっている。



第三の詩　ズバリ尊師を予言——救世主は盲目の人！

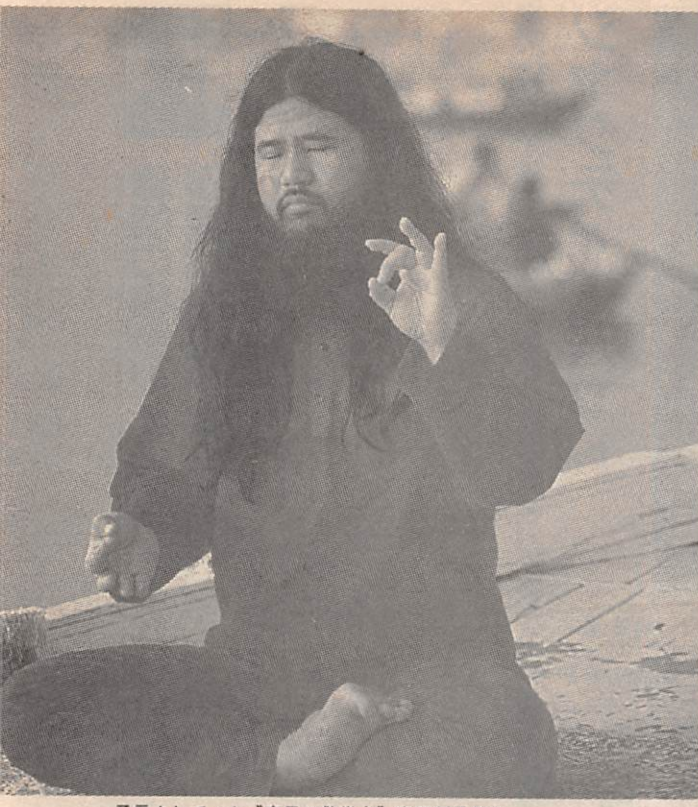
そして、この詩は"極めつけ"である。救世主の外見的特徴がハッキリ示されているからだ。

「第九章　一
彼の岸へ導くキリストの住宅で
アルファベットがテーブルの上で解釈される
盲目（片目）で黄色っぽい赤色の、透明な輝いている長老が事態の推移の途中で掌握する
彼は新しい大元帥に交代させる」
（一五六八年版・オウム真理教翻訳チーム訳）

まず、四行目の「彼は新しい大元帥に交代させる」という箇所が、「彼」が救世主であることを示している。というのも、「大元帥」とは国王の最高補佐官を意味し、これを交代させ得るのだから、最高の権威を持った国王＝救世主なのである。

さて、「彼の岸」とは「彼岸」のこと、すなわち仏教の修行の最終目的地を表わす。「キリスト」とは、イエス・キリストとよく混同されるが、これは単に救世主のことを表わす普通名詞なのであり、つまり救世主がその境地へと人々を導いてくれるということを意味する。次に、「アルファベットがテーブルの上で解釈される」だが、これは、その救世主がノストラダムスの詩を解釈している様子である。

そして、次が決定的な箇所である。「盲目（片目）」、これが救世主の何よりの特徴なのだ。これはズバリ尊師を指しているというほかない。というのも、この原語である「bourgne」には、「盲目」



予言されていた"盲目の救世主"麻原彰晃尊師

という意味と「片目」という意味があるが、尊師は幼少の頃から片目が不自由でいらっしゃったのだ。そして長年の修行によって解脱を果たされた後、多くの弟子たちの修行を進めるために、自らの霊的エネルギーを与え続け、彼らを高い修行ステージに導いたのだが、一方の尊師は弟子の悪いカルマを受けて、肉体的に多くの打撃を被られてしまった。その結果、現在は両眼とも視力を失っておられるのである。これが事実であることは、マスコミや外部の著名人が確認している。よって「盲目」と「片目」の両方の意味を有するこの言葉（bourgne）は、まさに尊師のことを指しているとしかいいようがなく、自己の身命をなげうって救済にあたる救世主の証しにほかならないのだ。

さらに、「黄色っぽい赤色」は、「狐の毛」という意味もあり、これは東洋人の肌の色を表現している。「透明な輝いている」は、成就者の神聖なエネルギーそのもの。「長老」も「経験を積んだ、智慧のある」という意味から成就者のことを指している。「事態の推移の途中で掌握する」というのは、世界の激変の中で救済の主導権を掌握するということで、救世主のことを意味する。

以上の事実から、この詩に登場するキリストとは、麻原彰晃尊師以外には考えられないのだ。



第四の詩 オウム・バッシングまで予言されていた

そして最後の詩は、救世主の教団の特徴と、登場する時の世界の動きを示すものである。

「第八章 十一
おびただしい（キリスト教の）信者たちが、罪の行ないの結果によって区別される
神聖世界の王が暴力行為なしに家族制度を破壊する
精神異常の時代の近くで強められた大国（ロシア）が壊される
そのとき、一方悔い改めた人々は盲目の人によって艱難を受け取る」
（一五六八年版・オウム真理教翻訳チーム訳）

ここからも、救世主が麻原尊師であることがありありとうかがえる。

まず、「精神異常の時代の近くで強められた大国が壊される」は、救世主が登場する時代の状況を表わしているのだが、まさに現代を指しているのである。総理府の調査でも、日本人の五十七・四％が「ふだんイライラしたり、ストレスがたまっているのを感じる」と答えるほど、極度の精神的緊張と疲労を強いられている現代、病院の精神科を訪れる人はますます増加している。人類史上かつてない規模で人々が精神に変調を来しているこの世紀末が、「精神異常の時代」と表現されていることはだれもが納得できよう。そして「強められた大国が壊される」とは、今世紀前半に生まれ、次第に力を増してきた超大国ソビエト連邦が崩壊した事実を意味していることは間違いない。



「強められた大国」ソ連が崩壊したときに……



原始仏教を忠実に実践するオウム真理教は「出家修行」を重視する——写真はオウム真理教の出家者たち

そして、ちょうどその時期に「盲目の人」のもとに集った修行者は「艱難を受け取る」という。実際、オウム真理教は出家制度を原因として、一時期激しくバッシングされた経緯があるが、それはソ連が崩壊に向かった九〇年から九一年にかけてのことだった。時期的にピッタリ一致する。

また、ここには救世主率いる教団の特徴が示されている。「神聖世界の王」すなわち救世主が「暴力行為なしに家族制度を破壊」した——これは、道を求める人々を家族から離して出家修行に導いたということに他ならない。

そして一行目の「おびただしい（キリスト教の）信者たちが、罪の行ないの結果によって区別される」とは、真理を実践せず、観念的な宗教を実践している者（例えば現代のキリスト教信者）は、区別されて、救済されないということを表わしているのだ。換言すれば、盲目の救世主の下で真理の実践を行なう人々が救済されるということを意味しているのである。



四百年後の“息子”へむけて——ノストラダムスが尊師に託した予言の解釈

さて、以上の四つの詩を見れば、ノストラダムスの予言していた救世主が麻原尊師に他ならないことは、十分納得できるだろう。

「それでも……。」という方には、ここでもう一つの決定的事実をお知らせしよう。それは、ノストラダムスが息子のセザールにあてて書いたといわれる「セザールへの手紙」についての事実だ。

この手紙は、一五五五年版『諸世紀』の「序文」という形式で書かれている。そして、ノストラダムスは、セザールに向けて次のように記している。

「最後に、わが息子よ、お前の父であるM・ノストラダムスのこの贈り物を受け取りなさい。そして、ここに書かれた四行詩のそれぞれの予言を発表（解明）することをお前に望む——。」

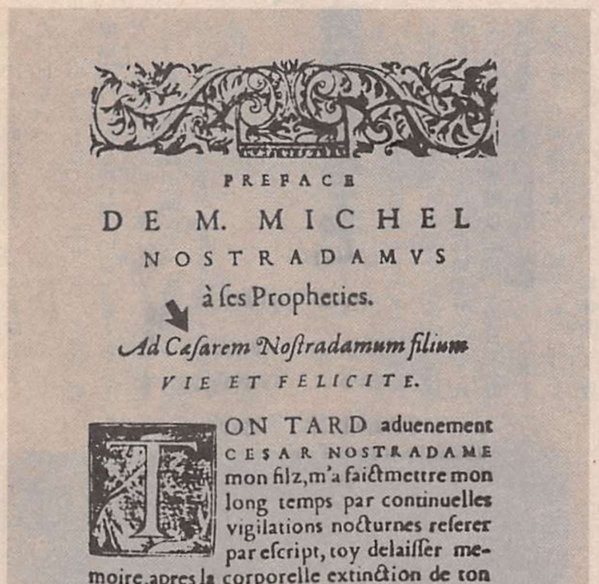
これだけを見るならば、何の変哲もない。単に、親が子に自分の仕事を完結させようとしているだけである。

だが、そう単純なものでもないようなのだ。というのも、この手紙が書かれた一五五五年、当のセザールは、まだ一歳わずかだったのだ。一歳の赤ん坊に発表も解明もあったものではない。

さらに、である。この手紙の冒頭部には、表題として「息子セザールへ宛てた序文」と書かれている（はずな）のだが、よく見てみると、肝心の「セザール」の箇所が、フランス語ではなくて、ラテン語で「カエサル」となっているのだ。そのうえ、その箇所だけが、他の文章とは違って、斜字体で印刷されており、他の文章との違いが際だっているのである。

手紙の本文中では、セザールのことをフランス語できちんと「セザール」と記しているのに、なぜ、この重要な表題だけはラテン語で字体を変えて「カエサル」としているのか……。ノストラダムスは、きっと特別な意味を込めたのに違いない。

つまり、ノストラダムスは、表面上は“息子への手紙”という形式をとりながら、実は別人にあててこの手紙を書き、自分の予言詩の解読を託したのではないか？と考えられるのだ。



PREFACE

DE M. MICHEL

NOSTRADAMVS

à ſes Propheties.

Ad Caſarem Noſtradamum filium

VIE ET FELICITE.

TON TARD aduenement CESAR NOSTRADAME mon filz, m'a faict mettre mon long temps par continuelles vigilations nocturnes reſerer par eſcript, toy delaiſſer memoire, apres la corporelle extinction de ton progeniteur, au commun profit des humains de ce que la Diuine eſſence par Aſtronomiques reuolutions m'ont donne congnoiſſance. Et depuis qu'il a pleu au Dieu immortel

A ij

矢印の部分が「カエサル」となっている。ノストラダムスはどういう意味をこめたのか？



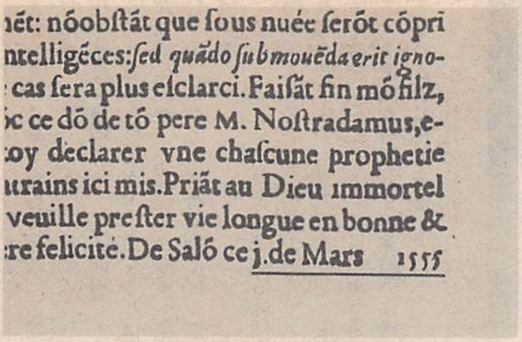
カエサル——それは尊師

では、だれに託したのだろうか？ 唯一の手がかりは、「カエサル」である。

ご存じのとおり、カエサルとは、「シーザー」の名でも知られている古代ローマ帝国の有名な英雄であり、事実上の君主である。よって、君主が手がかりとなる。では、ノストラダムスの詩の中に、君主が登場するものはなかったか。

あった。それは、先に挙げた第九章一の詩だ。そこでノストラダムスは、君主と同じ意味の「国王」を登場させていた。「新しい大元師に交代させる」人物という表現を使って、である。そして、その国王とは、「テーブルの上でアルファベットを解釈する」という予言の解読者でもあった。これは一致する。そして、何よりもその国王とは、「盲目」の「キリスト」である麻原尊師のことを意味していたではないか。

ということは、「カエサル」とは、麻原尊師のことを指していると考えられる。だとすれば、あのノストラダムスのことだ。きっとどこか他にも、尊師をハッキリうかがわせる手がかりを残しているに違いない……。


nét: nóobſtát que ſous nuée ſerót cópri
ntelligéces: ſed quãdo ſubmouẽda erit igno-
cas ſera plus eſclarci. Faiſát fin mó filz,
óc ce dó de tó pere M. Noſtradamus, e-
toy declarer vne chaſcune prophetie
urains ici mis. Priát au Dieu immortel
veuille preſter vie longue en bonne &
re felicité. De Saló ce j. de Mars 1555

下線部に、この手紙が書かれた日付として1555年3月1日と記されている（セザールへの手紙の最終部分）



奇跡的な符合——四百年の時空を超えて

そこで、ノストラダムスがよく数字のトリックを用いていた点に着目してみる。ここで登場する数字といえば、手紙が書かれた年月日である。見れば、一五五五年三月一日。そして、夜に書かれたという記述がある。つまりフランスとの時差を考慮すると、日本時間では一五五五年三月二日に書かれていたということになる。

やっぱり！ 数字には意味が込められていたのだ。というのも、尊師の誕生日は一九五五年三月二日。つまり、この手紙が書かれたのは、くしくも麻原尊師が誕生された時から数えてピッタリ四百年前に当たるのである！ この、とても偶然とは思えない奇跡的な符合！

きっとノストラダムスは、労作『諸世紀』を書き終えた後、万感の思いを込め、ちょうど四百年後に登場することになる未来の“息子”、麻原尊師に予言詩の解読を託して、この手紙を書いたのであろう——。

なお、あの大預言書『ヨハネの黙示録』にも、予言を解読することになる麻原尊師に対する呼びかけが冒頭部分で記されていたのだが（詳細は『滅亡の日』〈麻原彰晃著・オウム出版〉参照）、ノストラダムスも同様に未来の解読者へ向けてメールを送っていたとは、興味深い一致である。二つの予言書とも、予言を理解して有効に活用してくれるであろう未来の救世主に対して、解読を期待していたことは間違いあるまい。

秘せられた詩、それはいずれ……

さて、四つの詩のリアルな描写と「セザールへの手紙」にまつわる事実をご覧になって皆さんはどう思われただろうか。人類を滅亡から救う世紀末救世主は麻原彰晃尊師——。あの大予言者ノストラダムスも、未来ヴィジョンによって、その姿を、その特徴を、実にリアルにとらえていたのである。

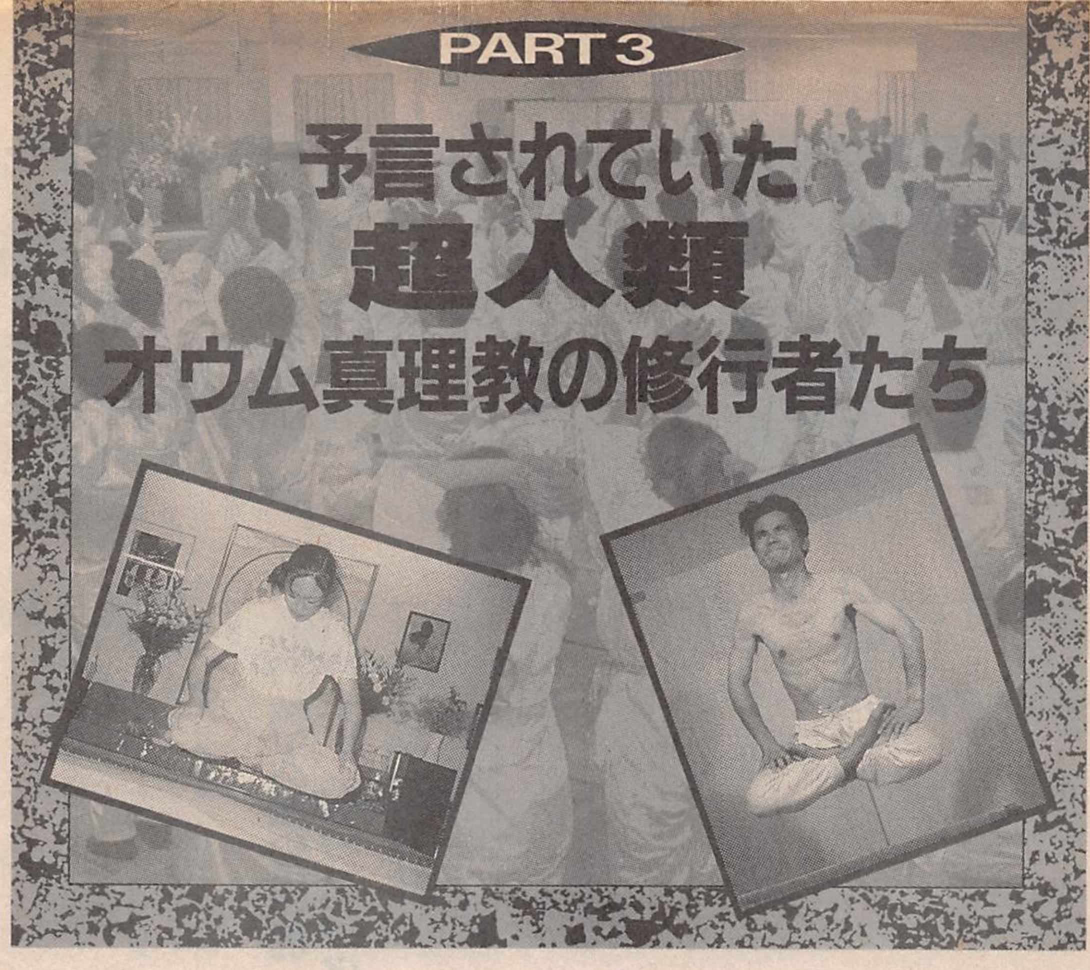
ただ、オウム真理教が総力を挙げて解釈したノストラダムスの詩は他にも多数あるのだが、残念ながら様々な事情により、今はそのすべてを公表することはできない。ただし、尊師とオウム真理教を予言した重要な詩が存在していることだけは断言しておこう。

それらの詩については、オウム真理教のラジオ放送で「麻原彰晃尊師のノストラダムスの大予言コーナー」を放送しているので、そちらで適当な時期に公開されることだろう。なお、ラジオ放送の詳細は本書の巻末を参照していただきたい。



PART 3

予言されていた
超人類
オウム真理教の修行者たち



第1章

破局を救うのは、救世主が生み出す超人類

尊師が説く世紀末の救済計画とは？

ノストラダムスが予言していたように、この世紀末に人類を救済する救世主とは、麻原彰晃尊師のことだった。

しかし、だ。いくら救世主といえども一人の力には限界がある。では、尊師は、破局へ向けてまっしぐらに突き進む日本と世界を、どうやって救済しようとおっしゃるのだろうか。尊師は、その問いにこう答えられた。

「まず、ハルマゲドンは回避できない。しかし、オウムが頑張って多くの成就者を出すことができれば、その被害を少なくすることができる。ハルマゲドンで死ぬ人々を、世界人口の四分の一に食い止めることができる。そして、残り四分の三の人口の中のどれだけ生き残れるかは、オウムの救済活動次第だ。わたしは、わたしに与えられたこの使命に命を懸けているんだよ。」

よく聴いていただきたい。ハルマゲドン＝最終戦争は避けられない。しかし――、オウム真理教が多くの「成就者」を出せば、被害は最小限に抑えられると尊師はいうのだ！

「成就者」＝「超人類」が地球を救う

では、破局を救うカギとなる「成就者」とは何だろうか。それは、人間の心の中に潜む煩悩を修行によって滅尽した「解脱者」。神通力を身につけ、精神的にも肉体的にも人間をはるかに超越した「超人類」のことである。

オウム真理教は、原始仏教とインド・ヨーガの修行体系によって、今この瞬間にも「超人類」を続々と生み出している。そして、この「超人類」の増加が人類の破局を最小限に抑え、新しい世界を建設していくということは、世界中の予言者が予言してきたことである。

そんな予言者の一人が、大正から昭和にかけて『超古代史』を復活させたことで有名な酒井勝軍という人物だ。彼は、日本の敗戦とその後の経済的復興、そしてイスラエルの建国等を見事に予言していた。そして、彼は岩手県の五葉山でハルマゲドンの黙示を神授され、次のような注目すべき予言を残している。

「人類は今世紀末のハルマゲドンで滅亡する。生き残るのは慈悲深い神仙民族だけだ。その王は日本から出現するが現在の天皇とは違う——。」



酒井勝軍

「神仙」とは辞書を調べると、「修行の結果、神通力を得た仙人」となっている。すると、これはまさに神通力を持った超人類がそのころまでに集団（民族）をつくっているということだ。そしてその王が麻原彰晃尊師を指していることは、もはやいうまでもあるまい。

また、『ヨハネの黙示録』も、超人類の出現を示唆しているのである。そこには、世界の終末の際に選ばれる少数の人物の特徴について、

「彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。」（第十四章）

と記されているが、〝あがなう（redeem）〟とは〝救われる〟という意味であり、人間の中から救われた初めての実り（初穂）という言葉の中に、人類を超える超人類の誕生が暗示されているのだ。

超人類の出現——魂の二分化の後に

そして、ナチス・ドイツの総統ヒトラー……。彼も「今世紀末の大破局が救いの〝神人・超人〟を生み出す」と予言した一人だ。例えば、彼は、ナチス党幹部に向かって、

「人類はいま、つぎの階段を昇り、新しい戸口に立っている。新しい種族が輪郭を示しはじめている。それは超人の種族だ。」

と述べている。また高名な写真家のレニ・リーフェンシュタールに対しては、

「そして大破局が起こる。今世紀末に起こる。しかし救いのイエス・キリストなんか来ない。別の救世主が来る。**そのとき人類を救うのは人類を超えるもの……彼らと彼女たちが、新しい世界・新しい宗教を創る**」

という予言を残しているのだ。

そして彼は、もう一つ興味深いことを予言している。それは、世紀末における超人類の出現によって、人類は、超人類とそうでない者に〝二分化〟していくだろうというものである（前掲五島著より）。

それについては、実は仏教やゾロアスター教、キリスト教も同じことをいっているのだ。例えば、イエス・キリストは、

「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼いが羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、羊を右に、やぎを左におくであろう。」（『マタイによる福音書』第二十五章）

と述べ、「羊」に象徴される超人類と、「やぎ」に象徴されるそうでない人類との二つに分かれていくことを予言した。そして、彼らのその後の運命を、こう語っている。





「そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の命に入るであろう。」（『マタイによる福音書』第二十五章）

と。つまり、超人類は「永遠の命」を得、新たなる境地に至ることが予言されているのだ。

これらの予言からも、世紀末の大破局を乗り越え、新しい世界を建設していくカギを握っているのが、「超人類」であることは疑いないだろう。しかもヒトラーは、超人類を生み出す人間の二分化は、**「〝東方〟がその巨大な実験場になる」**とも予言している。

ということは、超人類＝成就者を次々に生み出していくという、尊師が実践されている救済計画は、はるかの昔から予定されていた計画であることがわかるのである。

ノストラダムスも説く〝別の者〟――それは超人類！

そして、またノストラダムスに戻ろう。彼こそ最も端的に予言しているのだ。「人類大破局の際、人間とは違う〝別の者〟や〝新しい種族〟が生まれて新しい世界を建設していく」ということを。それは、次の詩においてである。



集え、救世主のもとへ

「第一章　四十八
二十年間の月の統治の後
七千年間、別の者が王国を支配する
太陽が月のうんざりした日々の責任を引き受けるとき
わたしの予言は成就し（わたしの詩は）それ以降なくなる」
（一五五五年版・オウム真理教翻訳チーム訳）

ここにいう「別の者」こそ、歴史に姿を現わす超人類にほかならない。この詩を要約すると、こうだ。

「月」＝反射光のように実体のない宗教（キリスト教）の後、太陽のように自ら光を放つ力のある宗教が登場する。その結果、二千年間にわたって続いたキリスト教世界は崩壊し、「別の者」＝超人類による新たな世界が始まる。そして、太陽のように自ら光を作り出して未来を変えてしまう宗教の登場によって、ノストラダムスが予言していた未来は変えられてしまい、予言は的中しなくなってしまう――ということである。

実に興味深い。というのも、人間はそのカルマ（業）に束縛されて生きているわけだが、オウム真理教の「解脱」へ向かう修行によれば、最終的にカルマを超えられる。つまり、自己に課せられた運命を超え、自分自身で未来を作ることができるのである。よって、ノストラダムスの予言は当たらなくなるというわけだ。未来を自在に作り出せる超人類によって、新たな「王国」が築き上げられる。大破局を超えて――。

人類の悲惨な行く末を見ていたノストラダムスは、世紀末に出現する「別の者」、つまり救世主と超人類に、すなわち麻原彰晃尊師とオウム真理教に、地球と人類の未来を託していたのであった。

集え、救世主のもとへ

このように、聖書やノストラダムス等の世界の予言は物語っている――。世紀末の大破局を乗り越えて、新世界を築いていく使命を担っている人々。それは、修行によって神通力を身につけ、精神的にも肉体的にも進化し、未来をも自在に創造できる超人類に他ならないのであると。

わたしたちに残された道、それは滅亡へと歩む堕落した生き方を捨てて、予言された救世主＝麻原彰晃尊師のもとに集い、超人類への道を歩む以外にはないのだ！

第2章

「超人類集団」オウム真理教が見せた奇跡の数々

「超人類集団」――オウム真理教とは？

では、この世紀末救済活動のカギを握る超人類を生み出しているオウム真理教とは、いったいどんな団体なのか。そこに集う人々は、いったいどのように「超人類」なのか――。そのナゾを見てみよう。

超人類というからには、当然、人間の持つあらゆる能力を超越していなければならない。その点、オウム真理教の修行者は、原始仏教とインド・ヨーガの修行によって、経典に記された、あるいは経典に記されてはいるが今では〝伝説〟として語り継がれているのみの驚異的な神通力を身につけているのである。

その第一に挙げられるのが、「サマディ」である。

サマディ――超人類の証（あかし）

サマディとは日本語では「三昧」と言われ、瞑想の究極的な状態を意味する。

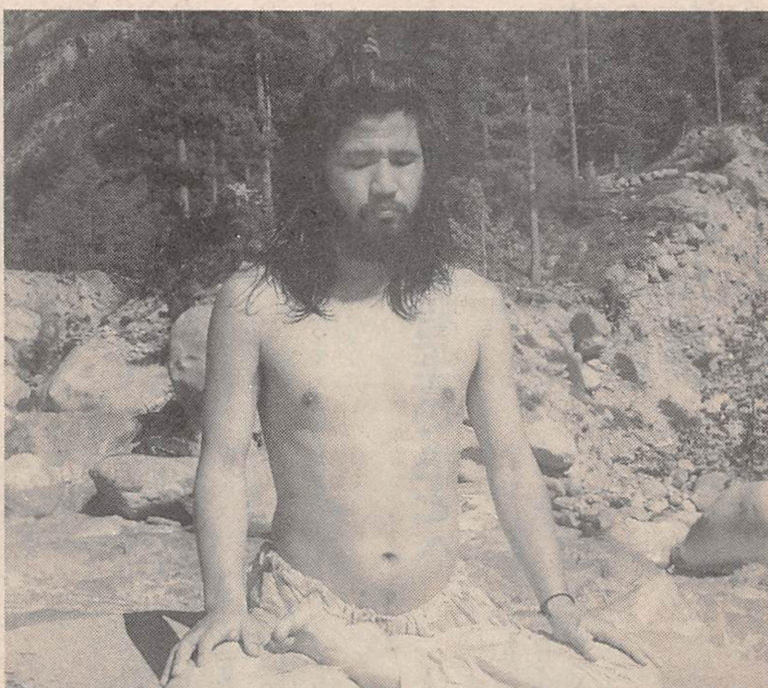
このときの内的体験としては、特別な霊的身体が肉体を離れて異次元を経験し、この宇宙の真の構造、この宇宙を支配する絶対的な法則を知ることができる。また最終的には、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜という状態に没入することができる。

そして驚くべきは、そのときの肉体的な特徴である。このとき、心臓、呼吸、代謝などのすべての生理機能は停止し（もしくは容易に確認できないくらい微弱になる）、一見すると「死の状態」のそれと全く同じになる。わかりやすく言い換えれば、サマディに入っている状態では、その人は飲まず、食わず、排泄もせず、そして一切の酸素も消費しないのである。

もちろん、〝伝説〟とされているように、だれもがサマディに入れるわけではない。ここに至るためには煩悩を止滅することが必要であり、そのためには超潜在意識（人間の奥深い意識。潜在意識のさらに奥にある）に到達し、根本的に煩悩を止滅する力が必要なのである。

なお、日本の仏教界でこの修行ステージに至った人は皆無に近い。そして、世界においても現在ではほとんど存在していないのだ。

だからこそ、サマディは〝伝説〟と化しているわけなのである。



究極の瞑想状態「サマディ」、麻原尊師は多くの弟子をその境地に導いて超人類を次々と生み出した

人を超えた五日間

ところがオウム真理教では、麻原彰晃尊師の指導によって、多数の弟子たちがこの高度な修行ステージに到達したのだ。そして、彼らによって、九一年十一月以降、伝説の「サマディ」実験が連続して行なわれたのである。

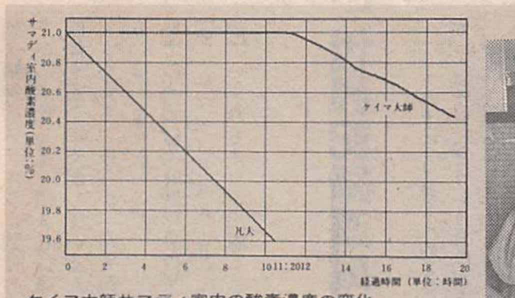
それはどういうものかというと、一辺三メートルのチェンバー（二十七立方メートルの箱）を土中に埋め、一般人ならばわずか三日間で死に至る限られた酸素量しかないそのチェンバーの中で、五日間飲まず食わずで過ごすという実験であった。現代科学の常識からいえば、結論は百%〝死〟である。

しかし、高度な修行ステージに達した彼らは、この五日間を無事に過ごしきったのである。常人が三日で死に至る酸素量の中を五日間過ごしたこと自体、成就者の酸素消費量が常人よりはるかに少ないことの証明であるが、内部に取り付けられた酸素濃度計のデータが、それを科学的に明らかにしている。

また、八八年五月に、麻原尊師の一番弟子であるマハー・ケイマ正大師が行なった水中サマディ（チェンバーを水中に入れて行なう）実験では、なんと十二時間にわたる連続無呼吸状態が記録されているのである（下図参照）。

なお、こうしたサマディ実験は、マスコミの前で公開された。NHKや日本テレビなどのテレビ局や、『週刊SPA!』などの週刊誌が取材にかけつけ、その面前で奇跡は行なわれたのだ。

現在ではほとんど〝伝説〟と化しているサマディを、これだけ行なうことができるのは、日本ではオウム真理教の修行者をおいては他にはいない。



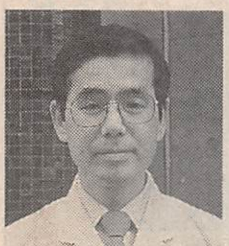
ケイマ大師サマディ室内の酸素濃度の変化
（1988年5月17日、静岡県富士宮市オウム真理教総本部道場）
装置の構成…サマディ室3×3×2.4 m、実質内容積20.0㎥

マハー・ケイマ正大師サマディ室内の酸素濃度グラフ



サマディ中のマハー・ケイマ正大師

呼吸停止・断水断食
――西洋医学の常識を超える



この奇跡の土中サマディを現代の西洋医学の最先端ではどうとらえるか。林郁夫医師（慶應大学医学部卒業後、米国デトロイト・サイナイ病院心臓血管外科研究所に招かれる。帰国後、慶大医学部客員講師、国立療養所晴嵐荘病院医局長を務める。現オウム真理教附属医院医局長）はこう語る。「まず、このように酸素消費量が落ちるということは、非常に代謝の落ちている状態を表わしています。深い眠りなどに入っているように見受けられますが、実際サマディのときは意識ははっきりしていますから、説明がつきません。またサマディ中、数時間呼吸が停止していますが、現代医学では脳に酸素が回らなくなって八分で死亡となっているので、まさしく驚異であるとしか言えませんね。

断水・断食については、現在オウム真理教では九日間の断水断食の例が示されていますが、医学的には七日間で死亡に至るという見解もあって、これもまた驚くべき例であると思います。普通、五日間を過ぎる断食を行なうと、胃酸によって胃潰瘍を起こすのですが、どの場合もほとんど異常は見あたりませんでした。わたしも、修行を始める前に断食に挑戦したことはあったのですが、胃が焼けるようになって一日ももたなかった覚えがあります。しかし、今では平気で一週間の断水断食ができますから、本当に修行の効果というものは素晴らしいものだと思っています。

修行によって確実に人間を超えていくことができる。これらのデータを見て、そう考えざるをえません。」



酸素濃度を計る計器↓

限られた酸素量しかないチェンバー内部。ここで5日間のサマディに挑戦する



「サマディ」実験の模様は『週刊SPA!』（91年12月18日号）で報道された。マスコミ陣の前で、修行者が超人であることが証明されたのだ

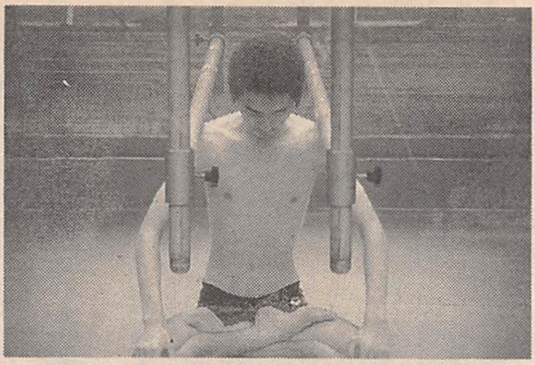
ちなみに仏典には、人間界より高い世界の住人は、空気中のプラーナを吸収して生きているので食物という物質をとらなくてすみ、また呼吸は一日一回しかしないと記されている。

オウム真理教の修行者が、「水なし、食なし、空気なし」の空間で平然と過ごすことができたのは、まさに彼らが仏典に記されているような人間以上の高い霊的・精神的ステージに到達しているからである。そして、常人とは違って、心が肉体を完全に支配しているからである。

すなわち、彼らが「超人類」であるからにほかならないのだ。（サマディについての詳細は『麻原彰晃のザ・サマディ』『ザ・サマディPARTⅡ』『甦る聖者伝説』いずれもオウム出版 を参照のこと）

「水中クンバカ」世界記録達成！

さらにサマディと並ぶ奇跡が行なわれた。オウム真理教の出家修行者・長谷川充男氏が、「水中クンバカ」で〝世界記録〟を達成したのである。



世界記録を達成した、オウム真理教出家修行者、長谷川氏

「クンバカ」とは息を止める修行のことだが、ではそれにどういう意味があるのか——。

呼吸と煩悩の量とは比例する。ヨーガ経典には、呼吸が少ないということは、それだけ煩悩が少ないことだと記されている。また、原始仏典にも、「心の安定した〝そのような人（サキャ神賢）〟には、入息と出息はなかった」とあり、覚者サキャ神賢は呼吸をしていなかったことが描かれている。すなわち、息を止めていられる時間の長さは、先ほどのサマディと同様、超人類の目安ともなり得るのだ。

それを証明したのが「水中クンバカ」の実験である。長谷川氏は、ギネスブックの条件に倣って三十分間の酸素吸入を行なった後、水中に潜り、息を止めた。そして、十四分二十七秒三十二もの間、呼吸を停止させたのである。これは一九五九年にアメリカのロバート・フォスター氏が樹立した世界記録を四十五秒も上回る三十年ぶりの快挙であった。

書籍案内

『麻原彰晃のザ・サマディ』
尊師がサマディの世界のすべてを明かす。



1200円

『ザ・サマディPARTⅡ』
尊師の愛弟子マイトレーヤ正悟師による土中サマディ五日間の感動の記録。



700円

『甦る聖者伝説』
麻原尊師の弟子たちがなし遂げた土中サマディの全記録。

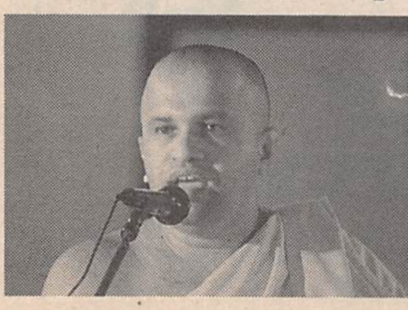


570円

また、オウム真理教には、在家修行者、すなわち普通の生活を送りながら修行をしている人の中にも、同じ条件で十分以上クンバカできる人が多数いるのである。

このようなオウム真理教の修行者は、超人類時代の到来を強く予感させてくれる。（水中クンバカについての詳細は『麻原彰晃のザ・サマディ』を参照のこと）

「初めて見た、本当にすごい！」——仏教国スリランカで尊敬を集めている出家修行者で、南スリランカ福祉協会会長であるグナロカ氏のコメント



「わたし自身は初めて見ましたが、サマディそのものはインド仏教にも伝えられているものです。もちろん釈迦牟尼も修行の中で同様のことをやられていましたし、そのことは本にも書いてあります。

やはりきちんとした修行をされている方だからできる、素晴らしいことだと思います。普通の人では絶対にできるものではありません。

これから彼（オウムの修行者）がより修行に励んだら、仏典に書かれているようなもっとすごい奇跡も起こせるのではないでしょうか。例えば、身体から光を発したりするような。より高いステージに至ったら、そういうことも可能だと思います。

とにかく、今回の土中サマディは、一般人にはできない本当にすごいことだと思います。」

重力の壁を超える——空中浮揚の奇跡

もし重力を無視して、自由自在に空を飛ぶことができたら……。だれでも一度はこのかなわぬ夢を願ったことがあろう。しかし、**オウム真理教の修行者には可能なのだ。修行によって重力の壁を超え、当たり前のように宙に舞うことができるのである。**そう、「空中浮揚」のことだ。

それは解脱者が備えている神通力の一つで、ヨーガの世界では、正しい修行によって胸部に位置する霊的センター（アナハタ・チャクラ）を活性化し、風（ルン）のステージに到達すると可能になるといわれている。

そういえば、仏教の開祖覚者サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）が、空中浮揚のことを、「修行すればだれでも身につく最初の神通である」と語り、自らもその奇跡を見せたことは有名。そして、あのイエス・キリストも水上を歩行したという記述が聖書にあり、またチベットの偉大なヨーガ行者ミラレパや中国の仙人たちが空を飛んだ記録も残されている。そのすべてが本当かどうかはわからないが、いずれにせよ、聖者として人々の尊崇を集めている方々が、いずれも共通して重力を超えたという伝説を残しているのは興味深い。そこから、空中浮揚ができるのは、優れた精神性を持つ人物であることがわかる。

なお、麻原尊師の場合は、マスコミ注視の前で空中浮揚され、その模様が『週刊プレイボーイ』（八六年二月十八日号）に写真入りや『新鮮』（八六年一月号）で報道された。また、科学雑誌『ウータン』（八六年八月号）も尊師の浮揚を取り上げている。

そして、尊師の弟子たちも、すでに千名以上がこの浮揚やその前段階を体験しているのだ。

人間ばかりでなく、地球上のすべての生物を束縛する絶対的な力を、いとも容易に打ち破る彼ら……。地上の常識を超えた超人類であることは間違いない。

（空中浮揚についての詳細は『麻原彰晃のズバリ！浮揚』オウム出版　をご覧いただきたい）

書籍案内



1200円

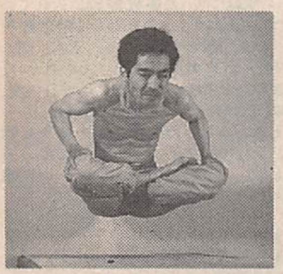
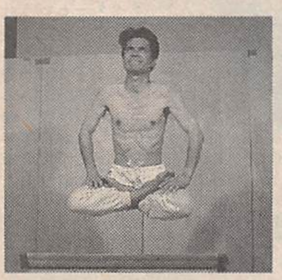
「ズバリ！　浮揚」
28人の決定的瞬間と体験談、空中浮揚の仕組みを解説する仏教・ヨーガ理論。さらには物理的考察からマル秘トレーニング法まで、空中浮揚のすべてを満載。



→尊師の空中浮揚を取材し、報道した『週刊プレイボーイ』（八六年二月十八日号）

科学雑誌『ウータン』（八六年八月号）も尊師の浮揚を取り上げた↓




←尊師の弟子たちもすでに千名以上が体験！

神に通じる力——「六神通」を獲得

水がなくても、食事がなくても、空気がなくても生きられる。そして、あのニュートンも真っ青の空中浮揚。超人類へと進化しているオウム真理教の修行者は、サマディ等の体験を通じて、それ以外にもあらゆる神通を身につけているのだ。

神通にはいろいろあるが、主なものは仏典に記されている次の六つである。

・神足通（空中浮揚やテレポーテーションを行なったり、高い世界へ飛んだりすることのできる能力）
・天耳通（神々の声を聞いたり、遠くの音を聞いたりする能力）
・他心通（他人の心を知る能力）
・宿命通（前生を知る能力）
・天眼通（一般に遠隔透視能力と言われているが、これは北伝系仏教の間違いであって、実際には南伝仏教のいう死生智のこと。死生智とは転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる能力）
・漏尽通（完全なる絶対なる神の叡智）

神通力は超人類の証——わたしの神通体験

ここに掲載する例は、麻原尊師の弟子の神通体験のほんの一部である。例は無数にあるのだが、紙面の都合でとても全部は載せられないので、日常的なものに限って掲載した。

さらに高度な尊師や弟子の神通体験等は、『超越神力1〜4』『神通力』『生死を超える』（オウム出版）等を参照していただきたい。

＊

◆目に見える煩悩
——マハー・ケイマ正大師



人の想念が物質化して、白いエネルギーの矢となって飛んでいく様子はよく見えます。その人が集中していると太い矢のようで、集中力が弱いと、白い糸のようです。相手の心の働きが、自分の心の働きとして移ったり、相手の使っているチャクラが、自分のチャクラの振動として伝わってきたりすることは、よくあります。また、直観的に相手の引っかかっているところを言い当ててしまうこともよくあり、相手の心の煩悩の色を、黒、赤、黄、白と断片的に透視できます。……また、相手の好みの食べ物、好みの異性や、エネルギーがどのような状態であるかもよくわかります。

◆相手の好みまでピタリ
——ウルヴェーラ・カッサパ師



ある日瞑想をしていると、急にパッとヴィジョンが目の前に広がった。ソースを塗った美味しそうなお好み焼き。「何？これ」自分の煩悩だろうか？でも別にお好み焼きなんか食べたくないのに……。不思議に思った師は、隣で修行していた法友にそれとなく聞いてみた。
「もしかして、お好み焼きが好きなんじゃないですか？」
「えっ！ そうです。何でわかるの？」
びっくりしたのか、思わず相手は声を大きくした。ちょうどそのころ、彼はお好み焼きのヴィジョンを見ていたのだ。

◆百発百中、色で心を見る
——アーナンダ師



アーナンダ師がある女性の信徒に会ったときの話である。グリーンと、どんよりとした黄色のエネルギーが見えた。グリーンは動物、黄色は低級霊域、いわゆる餓鬼の色である。
「あなたには、動物の色と餓鬼の色が見える。無智に流された貪りの強い生活をしているんじゃないですか。」
「……そのとおりです」
そして、その後、「うん？ 猫が見える」彼女と相対したアーナンダ師は猫のヴィジョンを見た。
「わたしには、今シマ猫のイメージやヴィジョンがたくさん見えるんだけれども、今実際こういう夢はたくさん見てませんか。」
こう問うたアーナンダ師に彼女は告白した。実は、彼女は、自分が大きいシマ猫に変貌したヴィジョンを見ていたのである。

◆他心通で相手の心もズバリ
——ディーラー師



道場で信徒さんの対応をしていると、その方の心が手にとるようにわかったり、その方の性格を表わす色が見えたりすることは日常茶飯事です。先日も、信徒さんのご自宅にお邪魔したのですが、その方に会った途端すごい悲しみのヴァイブレーションが伝わってきました。聞いてみると、その方は昨日も今日も寂しくて泣いていたとのことでした。また、そのとき目をつむると青い色が霊視できたので、「とても信仰心のある方ですね」と言うとズバリ当たっていたそうです。一度他心通を試してみようと実験をしたこともありました。それはジャンケンをするときに、相手の出すものを言い当てるというものでした。一回、二回、三回、わたしは彼に勝ち続けました。そして、連続して勝つことなんと九回。最後は、「すごいね」って誉められたので、心が動揺して、相手の出すものがわからなくなってしまったのですが。

◆なくし物を見つけた千里眼
——チューラガヴァッチャ正師



瞑想中、ふっと意識が途切れ、急に、あることを思い出した。それは、東京の事務所にいたとき、大事な物をなくしたことだった。その瞬間、目の前にヴィジョンが大きく映し出された。それは、その事務所のある一室だった。そして意識は、なぜか部屋の隅にある箱に集中し、じーっと見ていると、その中に篭があるのが透けて見える。さらに見ると、その篭の中には、なくしたと思っていた物が見えた。「こんなところにあった」と思った瞬間、瞑想から覚めた。そして実際、電話で確認したら、本当にそこから見つかったのだ。

◆変化身で京都まで
——タントラギーター正師



「あの日、わたしに会いに来たでしょう」
妹との久しぶりの電話でこう言われたとき、かすかな驚きと同時に、「やっぱりわたしの体験は正しかったんだな」という修行に対する確信が広がりました。

クンダリニー・ヨーガ（生命エネルギーのヨーガ）の成就に向けた極厳修行に入れていただいたわたしは、二カ月にわたる瞑想修行を行なった後、最後の仕上げとして四日間の土中サマディに挑戦しました。あの日とは、このときのことですが、わたしは修行中で、当然、妹に直接会えるはずはありません。

このとき、わたしの変化身が肉体から抜け出し、京都の妹のところまで飛んでいったのでした。そして、妹のヴィジョンに現われたというわけなのです。

◆〝心を計る〟他心通
——キレーサ・バハーナ・アーナンダ正師



フリーライターという仕事柄、取材で人と接する機会も多く、つい相手を観察してしまうクセが身についているせいもあってか、わたしの場合、修行が進むにしたがって特に〝他心通〟という神通力の開発が顕著なようです。雑誌の仕事である人を取材したとき、相手に意識を集中して話していると、突然、相手の感情らしきものがヴァイブレーションで伝わってくるのです。触れたくない話題に移ると表面上は何くわぬ顔で平静を保っていても、ごまかそうという意識や不快感が伝わってきたり、まるでリトマス試験紙で心を計っているかのようでした。また、電話をかけようとした瞬間、相手の怒りの波動が伝わってきたり、また、急な用事で連絡を取りたがっていた知人の焦りの感情が伝わってきて外出先から電話をして驚かれたり——などということもありました。

＊

まるでＳＦ映画の主人公のような神秘的な力を駆使するオウム真理教の修行者。ノストラダムスが「別の者」と呼んだ理由もわかる気がする。



550～650円

『神通力』
尊師の見せた神通力のすべてを集大成。



1800円

『生死を超える』
八年の歳月を経て修行の最終地点に到達された尊師の体験が解脱への道程を克明に語りかける。



3090円

『マハーヤーナ・スートラ』
多くの人々が求めてやまなかった解脱へのステップが明らかにされた！



680円

『能力覚醒の秘法を解く』
修行によって潜在能力を開発し超人類へ至るための方法を明らかにする。

オウム理論による難病奇病の奇跡的治験例を一挙に公開する四冊
『麻原彰晃の　あっ！　ガンが消えた』
『ホイホイアレルギー解消法』
『おとうさん、生きて！』
『高血圧は治る』

ヒトラーも真っ青の超人類──オウムの修行者

予言能力を持つナチスの総統ヒトラー。彼が、世紀末の超人類の登場を予言していたことは本文でも述べた。

彼は、写真家のレニに対して「救いの超人や神人」の特徴について、こう述べたという。

「彼らや彼女たちは、知能が数次元高いだけではない。外見は人間とあまり変わらないが、人間にとっては危険な、どんな毒や殺人光線を浴びても生きていられる。神経も内臓も、人間と違う次元に進化してしまうんだからね。」

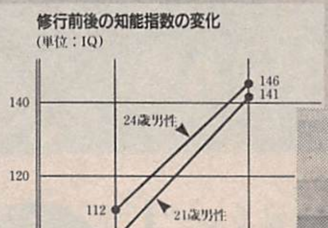
知能が高く、簡単には死なない──まさに超人だが、これも見事にオウム真理教の修行者のことを表わしているとしかいいようがない。

クンダリニー覚醒でハイレベルの知能

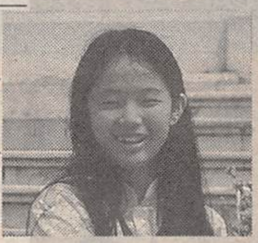
まず、オウム真理教の修行者は、クンダリニーを覚醒させているので、予言どおり知能が高い。クンダリニーとは、本文で述べてきたように、人間の尾てい骨に眠っている霊的なエネルギーのことだが、これが覚醒すれば、もともとわたしたちの内側に宿っている神秘的な力＝神通力を使いこなせるようになる。

そして、クンダリニーのエネルギーが、ストレスをエネルギーに変えて昇華すると、大脳を刺激し好影響を及ぼす。麻原尊師が次におっしゃるとおりだ。

「上昇のエネルギーが、完全に頭頂を突き抜けたとき、エネルギーと知性は合一する。これは、上昇したエネルギーが大脳を震動させ、特殊な働きをさせるようになるということです。そして、エネルギーと知性が合一した瞬間、その人はスーパーマンになるんだね。このスーパーマンの頭脳は明晰だ。偉大な科学者にだってなることができる。」（『マハーヤーナ・スートラ』麻原彰晃著・オウム出版）



↓ドゥルガー



現に、クンダリニー開発前後でどれだけ知能に変化が出るかを数値的に確かめるため、学生修行者によるIQテスト（A.W.Munxert,J.E. Klausnizer のもの）が行なわれたのだが、上図をご覧くだされぱおわかりのとおり、両者とも驚くほどIQ値が上昇しているのだ。

また、クンダリニー・ヨーガの成就者であり、尊師の長女であるドゥルガー（12歳）は、物心つくころから尊師の身近で、真理に基づき常に論理的に思考し、話し合うことを学んできたため、知能指数が175という超天才の数字を示している。

受験生もうらやむ話だが、クンダリニー覚醒等の修行による飛躍的な知能アップの方法については、『能力覚醒の秘法を解く』（オウム真理教東大生チーム著・オウム出版）をご覧いただきたい。

修行で不死身の身体に〝神化〟

「人間にとっては危険な、どんな毒や殺人光線を浴びても生きていられる。神経も内臓も、人間と違う次元に進化してしまう」

というのも、オウム真理教の修行者の特徴を物語っている。

というのも、原始仏教の修行は、「五蘊」と呼ばれる物質・非物質を含む人間のすべての構成要素を、人間レベル以上に変革していくことである。よって、通常の人間ならば死ぬような目に遭っても、修行者は簡単には死なない。

例えば、高速道路で事故が起きて車がぐしゃぐしゃに大破したのにもかかわらず、軽度のムチ打ちですんだり、1500ボルトの電圧が数秒間流れたのにもかかわらず、その部分が少し焦げただけですんでしまったという例がある。

また、尊師ご自身も過去に直腸ガンにかかったとき、医者から手術をしなければ数カ月しか命がもたないと言われていたのにもかかわらず、修行だけで完治してしまった。さらに、重症筋無力症という現代医学では不治の病を見事に治してしまったという例もある。

こうした例は枚挙にいとまがないが、これも、オウム真理教の修行者が常人の構成要素を超越した五蘊を得ているからにほかならない。

（なお仏教・ヨーガ理論による難病・奇病治癒の実例は、『麻原彰晃のあっ！ガンが消えた』『ホイホイアレルギー解消法』『おとうさん、生きて!』『高血圧は治る』いずれもオウム出版をご覧いただきたい）

このように、ヒトラーが言った「知能が高く、容易には死なない超人類」とは、オウム真理教の修行者そのものである。

ちなみに、彼は超人類のことを、

「自己と世界を完全にコントロールできる種族」

とも予言しているが、これもオウム真理教の修行者を表わしている。なぜならば、常人は煩悩に振り回されて自己を見失っているが、修行者は煩悩を滅尽していて煩悩に惑わされることがなく、自己を完全にコントロールしているといえるからである。もしヒトラーが現実にオウム真理教の修行者を目の前にしたら……真っ青になったのではないだろうか。

PART4

『ヨハネの黙示録』『新約聖書』も予言していた！



オウム真理教の救済の使命

世界中の予言書に暗示されているオウム真理教

PART3で見たように、世紀末救済のカギを握る超人類とは、オウム真理教の修行者であることがわかった。

「本当かなあ……」。まだそうおっしゃる方には、世界中の予言書にオウム真理教の活躍が予言されている事実を示すことにしよう。人類が破局を迎え、救世主・麻原尊師が登場することが、あらゆる予言書に描かれていたのと同じように、救世主率いる救済団体の特徴もリアルに予言されていたのである。

その描写から、世紀末の人類救済の使命を担っているのがオウム真理教に他ならないことが読み取っていただけるだろう。

第1章

『新約聖書』に予言されているオウム真理教

皆さんご存じのとおり、『新約聖書』はキリスト教の聖典である。ここには『福音書』という、キリスト教の開祖イエス・キリストの言行を弟子たちが記した書が含まれている。

『福音書』を見ると、イエスは教えを垂れる以外に、世界の終末の様子や、それに際して現われる救世主、そして救世主率いる救済団体の特徴を予言していたことがわかるのだ。

狭き門から入れ——それはキリスト教系ではない

さて、イエスの予言を取り上げるにあたって、キリスト教信者の中には、こういう疑問を持たれる方がいるかもしれない。

「聖書に書かれている予言なんだから、世紀末の救済団体は当然キリスト教系の



←世紀末の救世主と救済団体を予言していたイエス・キリスト

「命にいたる門は狭く、その道は細い」→

はずじゃないのか？」

その疑問はもっともだ。しかし、何もイエスは「キリスト教」なる宗教を作り上げ、彼らだけに世紀末の救済をさせようと意図していたわけではない。よって、キリスト教系の団体以外から救済団体が出ないと考えるのはナンセンスであろう。

それに、イエスの予言を詳細に検討するならば、それがキリスト教系の団体でないことは明らかなのだ。事実、イエスは、世紀末に現われる救済団体は、次のように容易に入ることのできない少数派の団体であると予言している。

「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいって行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。」（『マタイによる福音書』第七章）

よく考えてみてほしい。世界中にキリスト教が広まり、キリスト教国が世界の主導権を握っている現在、多数派のキリスト教にいたる〝門〟が〝狭い門〟だといえようか。

その上、イエスは次のように、救済の団体は迫害を受けるとも予言しているのだ。

「そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ……また、あなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。」（『マタイによる福音書』第二四章）

「だから、この世はあなたがたを憎むのである。……しかし、事実、彼らはわたしとわたしの父とを見て、憎んだのである。」（『ヨハネによる福音書』第十五章）

「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである。……わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う……あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」（『マタイによる福音書』第五章）

もはや救済団体がキリスト教系でないことは明らかだ。現在では圧倒的多数派のキリスト教信者が、「わたしの名のゆえに」つまりイエスの名のゆえに、「すべての民に憎まれる」わけがないからである。

迫害を超え真理を説く——オウム真理教

イエスの予言によれば、救済の団体は、少数派であり、かつ近年迫害を受けてきた経験を持つ団体でなければならないことになる。そして、その教えは、〝滅びにいたる門〟すなわち、人類を滅亡に追い込んでいる現代社会主流の思想とは正反対の思想に基づいていなければならない。

ということは、まさにオウム真理教がそれに該当するのである。

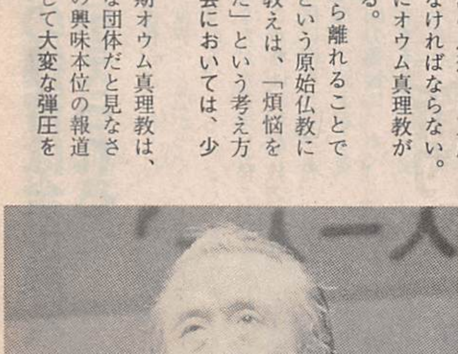
まず第一に、「煩悩から離れることで真の幸福が得られる」という原始仏教に基づくオウム真理教の教えは、「煩悩を満たすことが幸福なんだ」という考え方が大勢を占める現代社会においては、少数派である。

それがために、一時期オウム真理教は、日本中から誤って奇異な団体だと見なされたものだ。マスコミの興味本位の報道も加わり、それが発展して大変な弾圧を受けたこともあった。

中京大学社会学部の池田昭教授（宗教社会学）も、オウム真理教に対する弾圧を調査研究した結果、

「これは戦後最大の宗教弾圧だ！」

と驚嘆していたが、救済の団体がいわれ



中京大学社会学部の池田昭教授

なき迫害に見舞われる運命を持っていることは、すでに予言されていたことにすぎない。

しかし、激しい迫害を受けても、それを乗り越えて力強く発展していくのが、救済の団体なのである。現に、『ヨハネの黙示録』の中にも、こう記されているではないか。

「あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなた方のうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。あなた方は十日の間、苦難にあうであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。」(第二章)

事実、オウム真理教の中にも、警察権力によって誤って逮捕され〝獄〟に入れられた者がいる。だが、彼らは、神と尊師を信じて忠実に修行に励み続けたところ、仏教における個の完成のステージ「マハー・ムドラー」を成就し、見事「いのちの冠」を得たのである。もちろん彼らの潔白は証明され、現在は解放されている。


オウム真理教 警官、進出阻止促す?

オウム真理教潰し謀略

証拠残さない、社会的な反

オウム信者を住民と認めず

波野村議会が決議

阿蘇・波野村

事前に村に情報提供

業者装って情報収集も

熊本県議会

予言どおり、いわれなき迫害を受けたオウム真理教

このように、救済の団体は、迫害にもめげず拡大し、御国の福音をのべ伝えることが予言されているのだ。そしてオウム真理教が、その予言どおりに歩んでいることは、マスコミにこう報道されはじめている。

「新宗教ブームというバブルでは、単に信者数を競うような宗教団体が現れ、泡のように消えていった。その中にあり、安易な妥協を拒み続けることで生き残った感のあるオウム真理教と麻原彰晃。……(尊師の)視界には、『物質の豊かさ』の向こう側が、しっかりと捉えられていた。」(『バート』九二年六月号)

このように、オウム真理教に加えられてきたいわれなき迫害と、「狭い門から入れ」というイエスの言葉こそが、予言されていた救済の団体がオウム真理教に他ならないことを示す何よりの証拠なのである。

御国の福音は全世界へ宣べ伝えられる



現に、世紀末の救済団体が説く教えは、迫害を乗り越えて、全世界へと広がっていくとイエスは予言している。

「そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ……またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。……しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。そして御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界へ宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」(『マタイによる福音書』第二四章)

救世主によって説かれる「御国の福音」、つまり救済団体の真理の教えは、終末が来る前に必ず全世界へとのべ伝えられる。そして、オウム真理教の教えも、現に世界中にのべ伝えられているのだ。

というのも、現在オウム真理教では、日本全国に、そして全世界に向けては英語で、毎日ラジオ放送を行なっている。内容は、原始仏教の教義に基づく尊師の説法や修行の体験談等だが、全世界どこでもだれでも、オウム真理教の教えに耳を傾けることができるのだ(詳細は本誌巻末「キミはもう尊師を聴いたか?」参照)。現に、世界中の人々から放送の反響が毎日続々と手紙で寄せられてきており、まさに尊師の教えは「全世界へのべ伝えられ」ているのである。

また、ラジオだけではなく、麻原尊師の活動スケールも、ロシア、インド、チベット、ブータン、ラオス、スリランカ、アメリカ、ドイツなど全世界的に拡大してきており(本誌巻末「世界との交流」参照)、海外支部も次々設立され、その教えは着実に全世界へと広まっている。

迫害を乗り越え、終末の前に全世界に教えをのべ伝える救世団体――それはオウム真理教のことに他ならないのである。



三日三晩地の中に……

さらにイエスは、救済の団体がサマディを行なうことまで予言している。

イエスが、律法学者やパリサイ人から、救世主であることの証明（しるし）を見せてほしいと言われたときのこと。堕落した時代には、救世主はある奇跡を見せることによって、自らが神の使いであることを証明するだろうとイエスは答えた。

それは、

「人の子も三日三晩、地の中にいるであろう」（『マタイによる福音書』第十二章）という言葉である。



イエスもオウム真理教の土中サマディを予言していた

これはすなわち、「土中サマディ」を三日間行なえる者が、救済者であると言っているのに他ならない。地中に三日間とどまることは、一般人には不可能であるが、それは人間が生命を維持するのに必要な酸素量に対して、地中の酸素量が持たないからである。これを成し遂げられるのは、呼吸や心臓が停止する瞑想の究極状態サマディに入れる者だけなのは、PART3で述べたとおりだ。

この予言者としての条件を満たすことができるのは、正しい修行を行なった者だけであり、この日本では、唯一原始仏教の修行法を忠実に再現したオウム真理教の修行者だけなのである。よって、イエスは、オウム真理教の人々こそが世紀末の救済に乗り出していくことを予言していたのだ。

火と聖霊のバプテスマ——奇跡のイニシエーション

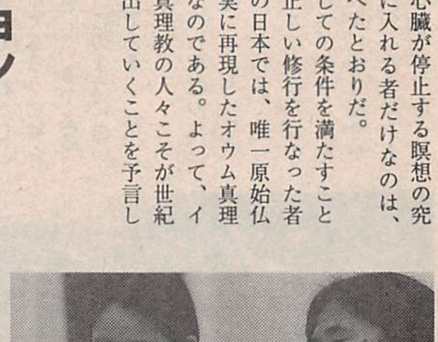
さらに、オウム真理教の修行体系の描写までが明確に予言されている。

バプテスマ（洗礼）のヨハネは、彼より後に来る救世主について、

「わたしよりも力のある方で、わたしはそのくつを脱がせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう」（『マタイによる福音書』第三章）と述べている。

バプテスマとは「洗礼」と訳されるが、ヨーガで言えば「イニシエーション」に該当する。イニシエーションとは、解脱者による神聖なエネルギー移入を指す。そして、ここにいう「火によるバプテスマ」とは、クンダリニー（尾てい骨に眠る霊的エネルギーで人間の精神次元を向上させる）を覚醒させるイニシエーションのことである。また、「聖霊によるバプテスマ」とは、意識をチェンジさせるイニシエーションのことである。

この二つのイニシエーションを行なえるのは、現在では世界でただ一人、麻原彰晃尊師をおいて他にはいないのである。よって、救済の団体が、麻原尊師率いるオウム真理教であることが示されているのだ（オウム真理教のイニシエーションについては『原爆覚醒』『奇跡のエンパワーメント』麻原彰晃著・オウム出版をご覧いただきたい）。



「火と聖霊によるバプテスマ」ができるのは、世界で麻原尊師ただ一人だけ

あらゆる真理を解きあかす

さらにイエスは、救済の団体を率いる救世主の特徴を予言している。

つまり、

「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」と述べているのだ。

これは、世紀末救世主は、キリスト教だけではなくて、今まで登場したいろいろな予言者、あるいは成就者たちが説き記した教えを、完全な形でこの現代に通用させる法則で説き明かすということである。

その点、麻原彰晃尊師は、原始仏教、インド・ヨーガの修行はもちろんのこと、仙道や神道等の修行、さらに四柱推命や奇門遁甲等の運命学、占星術等の奥義を幅広く極め、それらを駆使して弟子を真理へと導いている。

また、チベットやスリランカからは、日本に伝わっていない仏教経典を多数収

集し、その翻訳を行なっている。その成果は、『原始仏典講義』〈オウム出版〉等によって世間に公表され、また教団機関誌『仏典研究』でも明らかにされている。
そして、『ヨハネの黙示録』や『ノストラダムスの予言』、『大聖パドマサンバヴァの予言』等の有名な予言書も解読されている。

さらに最近は、キリスト教の真義をも明らかにされた〈前掲『キリスト宣言1～2』参照〉。
これは、まさに「あらゆる真理に導く」という救世主の条件そのものを満たしており、それから教えを受ける「あなたがた」＝救済団体とは、オウム真理教に他ならないのである。

「真理の御霊」こそ救世主

そして、イエスは世紀末救世主のことを「父のみもとから来る真理の御霊」と呼んでいる（『マタイによる福音書』第一五章）。
これは、くしくも「真理」を名に冠するオウム真理教の開祖を指しているのであり、救済団体がその尊師率いるオウム真理教であることを意味しているといえる。

このように、予言者イエスの言葉を総合すれば、世紀末に現れる超人類の救済団体とは、オウム真理教に他ならないことがはっきりわかるのである。


麻原尊師は日本に伝わっていない経典を世界各地から集め、弟子たちを「あらゆる真理」へと導いている

書籍案内



550円

『キリスト宣言』
神の審判のとき、この世は破滅する――。『聖書』にまつわる破局の様相が、今ここに明かされる。イエス・キリストの大予言をいよいよ解読！ わたしたちの未来はいかに?

第2章

『ヨハネの黙示録』に予言されているオウム真理教

さらに、あの大預言書『ヨハネの黙示録』にも、オウム真理教のリアルな描写があるのだ。

彼らは白い衣を着て……

『ヨハネの黙示録』によると、救済の団体のメンバーは、次のように、白い衣を着ているというのである。
「彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩みを続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である。勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。」（第三章）
これこそ、オウム真理教の修行者を表わしている。というのも、テレビ・雑誌で報道されよく知られているように、オウム真理教の出家修行者は白のユニフォームを着ているのだ。特に、師の称号が贈られると、純白のシルクの衣をまとうことが許されるのである。


白のユニフォームを着た、オウム真理教の出家修行者たち

よって、勝利を得る救済団体とは、オウム真理教に他ならないのだ。



「額に印を押す」——まさにシャクティーパットの記述である

額に印を押せ——シャクティーパットの記述

さらに、注目すべき記述がある。オウム真理教の代表的イニシエーションであるシャクティーパットの記述が見られるのだ。ＰＡＲＴ２でも述べたように、シャクティーパットについては、ノストラダムスも救世主が行なうものとして、「手は内奥」「体は火に」という表現で予言していたが、『ヨハネの黙示録』にも同様に予言されていたとは驚きである。

「もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、『わたしたちの神の僕（しもべ）らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない』」（第七章）

「額の印」——これがシャクティーパットを表わしている。シャクティーパットは額から相手に霊的エネルギーを入れる技法であるが、そのエネルギーの根元はシヴァ大神である。したがって、オウムでシャクティーパットを受けた人はすべて〝額に神（シヴァ大神）の印を押された〟ということになるのだ。

ところでここでは、オウムのシャクティーパットが終了するまでは、〝地と海と木〟とをそこなうような変化が起こらないと記されている。つまり、言い換えれば、シャクティーパットが終わると、世界も一気に終末を迎えるということになる。

現在、オウム真理教のシャクティーパットは続行中だが、予言によると、額に印を押される人の数は限られている。あなたも早くそのうちの一人となり、「神の僕」＝超人類への道を歩まれんことを願う。

成就・解脱の示唆——もはや飢えることはない

さらに、オウム真理教の修行の成果までが、ハッキリと示されている。

「彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとって下さるであろう」（第七章）

この記述は、オウム真理教の修行によって得られる状態を描写している。

「もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。」という状態、そして神が「彼らの目から涙をことごとくぬぐいとって下さる」状態というのは、苦悩を超えた状態のこと。これは修行によって、煩悩を滅尽し、成就・解脱した状態、サマディの状態を示唆している。このとき人間は、生死を超え、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の状態に到達するのである。

「本当にそんなことがあるのか？」

そう思われる方は、コラム（至福の境地——これがサマディ体験だ！）をご覧いただきたい。

そして、「いのちの水の泉」。これも、オウム真理教にはぴったり該当する言葉がある。これは、ツァンダリーという瞑想法がもたらす「不死の甘露」のことだ。不死の甘露とは、クンダリニーが上昇して、頭頂にある霊的センター（サハスラーラ・チャクラ）に到達すると、頭頂から

落ちてくるもので、これは心を歓喜状態にする。さらにこれが体中に満ちると意識が鮮明になり、かつ途切れることがなくなる（意識の完全な連続）。もちろん眠っている間もである。よって、〝不死〟の甘露と呼ばれるのである。「いのちの水の泉」とピッタリ一致する表現であることには驚かされる（『生死を超える』麻原彰晃著・オウム出版 参照）。

一見謎めいたこうした言葉も、仏教・ヨーガの視点から見れば、何を意味しているのかがすぐわかる。まさに、『ヨハネの黙示録』に登場する人々とは、この高度な修行ステージまで容易に到達することができるオウム真理教の修行者のことを指しているとしかいいようがない。



戒律守る純潔な修行者

さらに、救済の団体に集う者の特徴として、「戒律」を守っている様子が記されている。

「彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった。」（『ヨハネの黙示録』第一四章）

仏教の修行者は、煩悩を滅尽し解脱に到るために、戒律を守る修行を行なっている。そうして煩悩を減少させていく。

まず「女にふれたことのない者」とは、性欲の戒律を守っている者のことを表わしている。特にオウムの出家修行者は、異性に触れないという戒律がある。「純潔な者」というのも、そういう意味を含んでいる。

「小羊の行く所へは、どこへでもついて行く」とは、救世主に対する絶対的な帰依を表わしている。仏教の修行においては、弟子は、神秘的な力によって自分以上に自分のことを知り抜いているグルの指導を百パーセント受け入れるのである。すなわち、グルは自分を修行の最終地点に導いてくれる最良の道案内人であるから、弟子はグルの行くところなら「どこへでもついて行く」のだ。

そして、「彼らの口には偽りがなく」というのは、嘘をつかない実践をしていることを指す。これを「不妄語の戒」という。「彼らは傷のない者」とは、戒律を守っていて悪業がない修行者のことを言っている。

享楽的風潮が蔓延する現代社会において、これだけ禁欲的な修行を徹底して行なっている団体といえば、原始仏教の教義に基づいた修行を行なっているオウム真理教であるとしか考えられない。

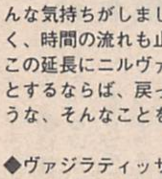
さて、これらの驚くべき一致点。このオウム真理教のリアルな描写は、ヨハネ

◆タントラデュバ正師



どんどん瞑想状態が明るくなり、たった一人で座っていると、心が寂静へと溶け込んでいくような感じがしました。軽くて広い心の状態です。瞑想を終わって目を開けると、辺りがキラキラ輝いて見えました。光に満ちた空間だけがあり、もう何もいらない——そんな気持ちがしました。心には雑念がなく、時間の流れも止まっているのです。この延長にニルヴァーナ——涅槃があるとするならば、戻ってきたくはないだろうな、そんなことを考えました。

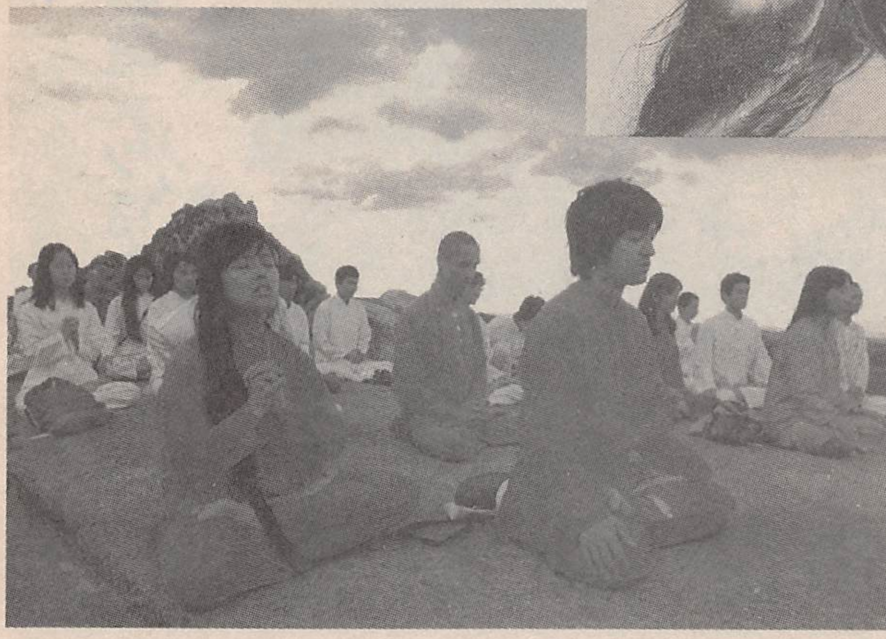
◆ヴァジラティッサ師



そのときは全く蓮華座（一番厳しい座法）が痛くなく、肉体の感覚すらなく、なんともいえない至福感がします。そして、そのサマディから醒めたときは、ものすごく頭が冴えわたり、集中力が増し、「こうなるだろうな」と思ったことは、すべて当たってしまうほど、直感が鋭くなるのです。睡眠も普通の人に比べると、すごく少なくなります。わたしは、医者という職業柄、「呼吸をしないと生きていけないんだ」とか、「心臓が止まると死だ」とかいう、現代の医学的常識にだいぶとらわれていたのですが、これらの自分の実体験を通して、それが幻影であることを理解することができました。偉大なる聖者方が知っていらした真実の世界を体験するために、これからも修行を続けていきたいと思います。







がオウム真理教のヴィジョンをはっきり見ていたからこそ可能であったことは疑いない。

予言されていた最後の救済団体——それはオウム真理教だったのである。

至福の境地——これがサマディ体験だ!!

◆マハー・ケイマ正大師



一瞬のうちに自分の心が変化してしまいました。これは説明のしようがないですね……パッと心が軽くなって、体のだるさが一気にとれてしまいましたね。もう、あれは奇跡というか、すごい体験だったとしかいいようがありません。心も体も考え方もすべて変化してしまったと。それまで『苦』だったものが『苦』でなくなってしまうということは、とても言葉では表現できませんね。」

◆ヤソーダラー正大師



〝空〟の境地は、とても言葉では表現できません。煩悩がなく、一切の雑念がなく、意識は鮮明で集中し続けている、心は満ち足りて幸福の中に安住している、自分の発する光に包まれている——この終極にマハー・ニルヴァーナ(仏教修行の最終地点)が存在しているのだということに、もはや疑いはありません。

◆マイトレーヤ正悟師



瞑想課題について思索し始める。性欲について思索を始めた。その瞬間だった。性欲がズバッと落ちた。続けてプライドについて瞑想した。すると、思索を始めてすぐに、プライドに対応するチァクラのあたりに何かがチカッと光って消滅した。そして、強いエネルギーが昇り、目の前で光が満たされていった。……「煩悩は本当に滅することができるんだな」と、わたしは実感した。それは、わたしが修行を始めてからずっと求め続け、初めて体験した〝本当の喜び〟だった。煩悩を満たすことによっては絶対に得られない、自分のすべてが喜んでいる状態だった。

◆プンナ・マンターニープッタ正悟師



マハー・ムドラーにおける瞑想中、煩悩が次から次へと浮いてきた。それは、まさに煩悩という「もの」であった。「もの」としかいいようがない。何か「形のある物のようなもの」と表現した方が正確かもしれない。それが浮いた瞬間、統制を加えずとも勝手にバラバラになって落ちていった。一番引っかかっていたものに対してはもちろん統制を加えたが、これもズバーッと面白いように落ちていった。そして、いつしか、わたしの心は静止した。目をつぶっても周りは輝いていた。外的情報に一切心が乱されず、静止したままである。オールイズ ストップ ストップ。その状態がキープされたのだった。この煩悩が落ちた体験の後、わたしは不動心を得た。

◆アヌーパマ正師



いっさいの欲求がわいてこない。雑念もわいてこない。完全に無思考の状態——。こんな静かな平安な状態は初めてだ。……この後、煩悩が引きちぎれるように落ちていった。目の前を白い餅のような煩悩の塊がぶちぶちと落ちていく(なぜか、煩悩が塊のように感じられる)。性欲が落ちていく。食欲も落ちていく……。わたしは自分の呼吸が完全に止まっているのを認識した。

PART 5

集え、救済者たちよ!

◉尊師緊急メッセージ◉





超人類の千年王国

世界中の予言書は物語っていた。

世紀末の大破局に際して登場する救世主が麻原彰晃尊師であること、

超人類による救済団体が尊師率いるオウム真理教に他ならないこと、

そして、大破局の後に、超人類による新しい世界が出現することを——。

ノストラダムスは、それまでの世界が崩壊した後、〝別の者〟つまり超人類によって、新しい〝王国〟が築かれていくと予言していた。

また、ヒトラーも、大破局の後に、超人類の支配する社会が出現すると述べていた。

それに、仏教経典『転輪獅子吼経』にも、「七日間の最終戦争」の後に、真理に基づいた理想的な社会が登場するという記述がある。

そして、あの『ヨハネの黙示録』にも、

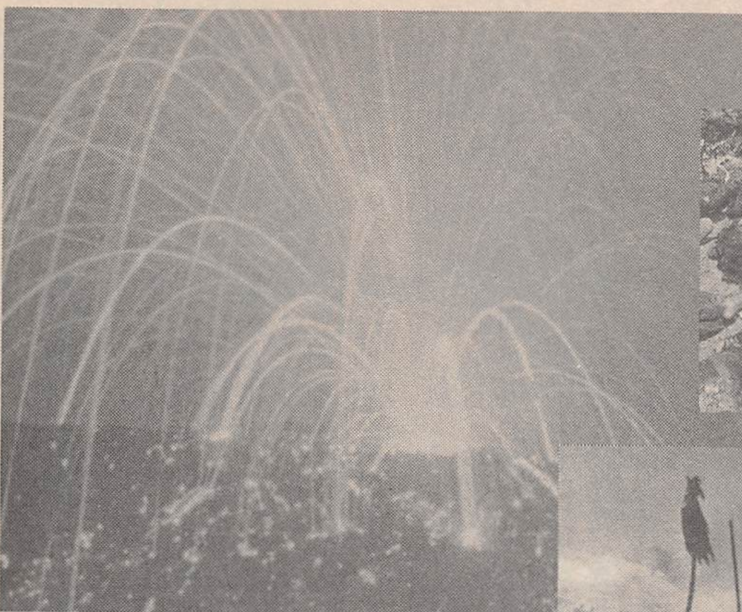
「彼らは生き返って、キリストと共に千年の間、支配した。」(第二十章)

と予言されているのだ。

これは、人類が夢みた「千年王国」。人類を破局に導いている物質主義文明をはるかに超越した、高度な精神文明が花開く理想の世界となるのである。

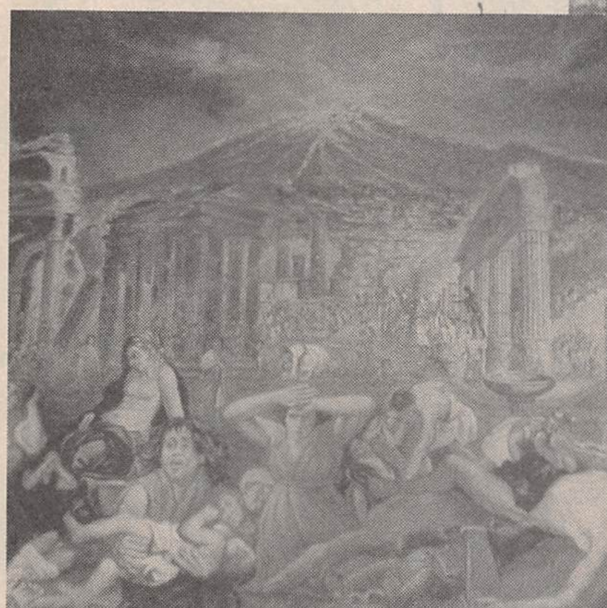
人類は、大破局を乗り越えて、ここに新たな世紀を迎えることが予言されているのだ——。













歩め、超人類への道

大破局に臨んで、人類の二分化が進みつつある今、どちらの道を選ぶのもあなた次第である。

「このまま煩悩的な生き方を続けて大破局で滅びるのか？　それとも予言された超人類への道を歩み、破局を乗り越え、千年王国の建設に参加するのか？」

できることならば、あなたには超人類への道を歩んでほしい。そして、破局を超えて、予言された新たな世界の建設に参画してほしい。

もう時間は残されていない。すでに見てきたように、危機は目に見え始めているのだから。

海外派兵の法制化、国家総動員体制の推進、迫り来る経済危機、第二次世界大戦前と酷似した不穏な状況になりつつある日本。人口爆発がもたらすエネルギー危機、食糧危機、中東に集中する核兵器、世界的規模での経済恐慌、深刻な環境破壊、異常気象の続発、難病奇病の蔓延、そして最終核戦争を予感させる世界……。重大な問題が山積し、もう人類の手には負えなくなっている。

煩悩を肯定し、増大させ、エゴを思うがままにのさばらせている人類は、このままいけば、予言どおりの大破局を迎えることになろう。そうすれば、あなたの愛する人々は皆、苦しみながら悲惨な最期を遂げることになろう。

だからこそ、あなたに残されているのは〝超人類への道〟だけなのだ。予言された救世主のもとに集い、超人類として生まれ変わること、そして、その力によって愛する人々を大破局から救済し、新たな世界へと導いていくこと――。

それこそが、そう、あなたに課せられた〝救済者〟としての歴史的使命に他ならないのだ。

尊師からあなたへの緊急メッセージ

わたしの救済計画は、残念なことに毎年一割くらいずつ
遅れてしまっている。

これは、わたしの前生の優秀な弟子たちが、
いまだ現世に執着していて、自分が生まれた使命に
気づいていないがためである。

一刻も早くこの世がマーヤ（幻影）であることに気づき、
わたしのもとに集まるべきである
（その前生の優秀な弟子たちの一人が、
今これを読んでいるあなたかもしれないのだが）。

もし彼らすべてが集まり力を合わせたならば、
今までの救済の遅れを取り戻すことができると、わたしは確信している。

早くわたしのもとに来てほしい。
そして、わたしの救済活動に力を貸してほしい。

何よりも、彼らの使命が救済なのだから。





PART 6

徹底検証

尊師の予言1987~1992

さて、PART6では趣を変えて、本特集のキーとなる「予言」について詳しく掘り下げて分析してみよう。まずは、尊師の予言からだ。

第1章 麻原尊師の適中予言総チェック

驚くべき適中率

PART1で述べたように、PKO協力法や日本の右傾化を見事適中させてきた麻原尊師。もちろん、尊師の予言の適中例はそれだけにはとどまらない。これまで発表された予言はことごとく現実化してきたので、「ひょっとしたら尊師の意思どおりに世の中が動いているのではないか？」と錯覚してしまうほどだ。

自然現象、社会現象、政治の動きなど、尊師は神秘的な力を駆使してあらゆる事象の未来を鋭く見通してきた。では、その驚くべき適中事例を以下にいくつかご紹介しよう。



◆予言適中一覧

86年11月	大島三原山の噴火	①
87年1月11月	大島三原山の再噴火	②
87年夏	記録的干ばつ	③
88年4月	イラン・イラク戦争の米国介入	④
88年7月～8月	群発地震、集中豪雨	⑤
88年7月～8月	潜水艦「なだしお」の衝突等の海難事故	⑥
90年	日米経済摩擦の激化	⑦
91年と92年	農作物輸入自由化スタート	⑧
87年以降	記録的異常気象の増大	⑨
87年以降	国政選挙における自民党の大勝と大敗	⑩
	国家と警察の権力が強化されていくこと	⑪
	マスコミ情報の享楽化	⑫
92年6月	日本の右傾化並びにPKO協力法の制定	⑬


ごう音と火柱に追われ
三原山、12年ぶり噴火
火口上300メートルまで溶岩
また噴火…「つらい」三原山
その瞬間、島では
頭の上を火山弾
鼓膜が破れそう
緊張する測候所員


炎暑 死者も出た
都内で62人倒れる
野球練習で
塗装工事で
暑さで58人倒れる
特派員報告
百年間で最悪
干ばつ あえぐインド
迫る飢え・コレラ
ガンジー政権に痛手

①八六年十一月　大島三原山の大噴火

まず、皆さんの記憶にも強く残っているであろう印象深い出来事から見てみよう。麻原尊師は、八六年、

「今年の終わりごろに、三原山が爆発するぞ。」（八六年三月・本栖湖での修行にて）

と大勢の修行者の前で予言された。

そして、その年の十一月十五日、予言どおり三原山は噴火した。さらに、同月二十一日には大噴火を起こし、島民が避難を余儀なくされたのは記憶に新しい。これは、見事な適中だった。

②八七年十一月　大島三原山の再噴火

さらに尊師は、

「三原山は再噴火するよ。」

と予言された。翌八七年十一月十六日、やはり尊師のお言葉どおり三原山は再噴火したのだった。

③八七年夏　記録的干ばつ

「今年は、干ばつがあるよ。」（八七年五月・秩父集中セミナーにて）

この予言はすぐ現実化した。八七年の夏は、気象庁が〝梅雨入り宣言〟をしても、いっこうに雨が降らないという事態になった。そして東南アジア各国は記録的大干ばつに襲われた。特にインドでは過去百年間で最悪という規模で、一千万トン以上の米の減収、三千万頭以上の牛が死亡もしくは乳が出なくなるという被害を受けた。またカンボジアでは一九五五年、六四年以来の雨不足で、米価が急上昇した。

さらに、尊師はこう続けられた。

「しばらくの間、暑さに気をつけなくてはね。」

これも適中した。八七年七月下旬、関東地方では日射病・熱射病で倒れる人が

続出。特に二十三日には、東京都内で五十八人が倒れ、翌二十四日には全国各地で死者まで出ているのだ。その結果、二十五日の都内全域の救急車出動件数は千三百一件にも上り、昭和十一年に救急業務が開始されて以来、最高の記録をマークしたのである。まさに気象庁もうらやむ尊師の予言能力である。

④八八年四月　イラン・イラク戦争の米国介入

「四月中旬には、イラン・イラク戦争が激しさを増すかもしれません。このとき、アメリカが強く干渉したら、それを回避できそうです」（『マハーヤーナ』八八年四月号）

これも適中。四月十九日『朝日新聞』の一面トップ記事に、

「『米・イランが交戦』ペルシャ湾、米石油基地攻撃」

と載っていた。また、四月二十五日の見出し記事には、

「イラン・イラク戦争　大国管理の色彩強まる」

とある。つまり、アメリカの武力を持った強い干渉により、イラン・イラク戦争は沈静化されたものといえる。これで、アメリカの干渉が成功したことがわかるだろう。

⑤八八年七月～八月　群発地震、集中豪雨

「本期間（七月十日から八月九日）中は、地震、大災害、集中豪雨……という可能性が高いでしょう」（『マハーヤーナ』八八年七月号）

予言は適中した。地震の起こった期間は、要注意日として挙げてあった日にちとほぼ一致していた。七月二十六日から八月二日にかけては、伊豆半島東方沖で一万三百四十八回の群発地震が記録されたのだ。また翌三日には、一時間の間に震度三が二回も発生し、この後数日間、地震は起き続けている。

さらに、集中豪雨についてもズバリ適中した。七月二十日、二十一日の広島、島根での集中豪雨は、死者行方不明十五人という被害を出した。千葉でも、大雨のため、各地で浸水。八月一日の新聞では、中国の浙江省でも集中豪雨があり、三百二十余りの村落が濁流に洗われ、死者行方不明四百人以上という、多くの犠牲者を出した。信じられないほどの自然災害である。

特に、集中豪雨については、この月だけに予言した事項である。


朝日新聞　1988年（昭和63年）4月19日　火曜日

米・イランが交戦

ペルシャ湾　米、石油基地攻撃

「米艦触雷に

2艦艇も




朝日新聞　1988年（昭和63年）7月21日　木曜日

豪雨で死者不明15人

広島・島根

鉄砲水、民家襲う

土砂崩れで国道寸断

群発地震が活発化

伊豆東方沖「有感」70回も


自衛隊潜水艦と衝突

釣り船沈没、29人不明

1人死亡、18人

横須賀沖

回避間に合わず

⑥八八年七月〜八月　潜水艦「なだしお」の衝突等の海難事故

「七月後半から八月にかけて、海での事故・惨事が起こる可能性があります」

(『マハーヤーナ』八八年七月号)

この時期には、あの海上自衛隊潜水艦「なだしお」と大型釣り船が衝突するというショッキングな事故が発生し、死者三十人が出た。七月二十三日のことだった。

その他にも、八月六日の多くの死傷者を出したインドの客船転覆事故をはじめ、七月二十一日の中国で二百五十人を乗せた渡し船が沈んだ事故、その他、四件以上の事故がこの短い期間に起こっている。



日本製品を叩き壊すアメリカ人

⑦九〇年　日米経済摩擦の激化

「日本は、アメリカ・ヨーロッパとの経済摩擦をきっかけとして、少しずつ少しずつジリ貧の生活に入っていくだろう。その本当の口火が切られるのは一九九〇年だ。」(八七年五月・秩父集中セミナーにて)

これも見事適中した。確かに、一九九〇年を境にして日米経済摩擦は激化し、日本経済はジリ貧の一途をたどっているのである。

一九九〇年、イラクのクウェート侵攻に端を発した「湾岸危機」のときのこと。アメリカは、湾岸に出兵せず出費もしない日本に対して、「なぜ積極的な貢献をしないのか?」と不満を持ち、本気になって怒り出したのである。こうして、それまでくすぶり続けてきた対日感情が一気に悪化したのだ。

それは、トーマス・フォーリー下院議員が、

「日本は湾岸戦争に本気で取り組んでいないというのがアメリカの感情だ。湾岸問題が日米摩擦に新たな一面を加えていることは事実だ。」

と述べ、また、パトリック・リーヒー議員が、

「わたしは議会やアメリカ国民の中に今回のような日本に対する強い憎しみを見たのは始めてだ。我々の多くは日本との強い結びつきを支持してきたが、今回の結果が、それを壊してしまった」

と話しているとおりである。

また、アメリカの市民レベルにおいても、日本に対する反感が一挙に爆発してしまった。その事実は、湾岸戦争後に実施された「対日アメリカ世論調査」が明らかにしている。

それによると、①「日本に対してどういう評価をするようになったか」との問いに対して、「否定的になった」が五十六%を占め、②「貿易問題で強硬姿勢が必要だ」と述べたのが全体の六十八%にも上ったのである(『ビジネスウィーク』一九九一年四月一日号参考)。

その結果、アメリカ国内には、「日本とはまともに交渉しても仕方がないから、強硬手段に訴えよ」という過激な主張が一気に広がりはじめた。こうして日米間には、それまでに見られなかった決定的な亀裂が生じてしまったのだ。

麻原尊師は、このように経済摩擦の「本当の口火が切られる」時期＝一九九〇年を正確に見抜かれていたのであった(参考『アメリカ発ドキュメント・日本叩き』アイペックプレス刊)。なお「ジリ貧」の事実についてはPARTⅠで述べた。

⑧九一年、九二年　農作物輸入自由化スタート

「一九九一年から二年くらいの間に、農作物の輸入自由化が行なわれるだろうね。」(八七年五月・秩父集中セミナーにて)

これは皆さんご存じのとおりである。尊師がこの予言を公表されて約一年後の八八年六月二十日、佐藤農水相とヤイター米通商代表の交渉によって、牛肉・オレンジを三年後から、オレンジ果汁を四年後から、それぞれ輸入自由化することが



牛肉輸入自由化スタート

「いいものなら…」立ち向かう産地

ブランドに一層

時時刻刻

尊師の予定どおり、一九九一年に牛肉・オレンジの輸入が自由化された

決定された。それまで十年以上にもわたった日米間の大きな懸案が解決されたのである。

　そして予定通り、牛肉・オレンジは一九九一年の四月一日に、オレンジ果汁は一九九二年四月一日に、自由化がスタートされたのだった。完全な適中である。

ちなみに現在は、米の自由化をめぐっての議論が交わされている。



雷の多発も異常気象の一つである



洪水も多発している



気象庁発表
全国で軒並み
観測史上最高
年平均気温

冬なのにポカポカ陽気

⑨記録的異常気象の増大

「冬と夏の区別がつきづらくなってくるだろうね。例えば四月五月になろうとしているのに急に冷えたり、あるいは十二月になってぽかぽか陽気になったりといった現象が起きてくるだろう。」（八七年五月・秩父集中セミナーにて）

　尊師の予言どおり、八七年以降には、記録的な異常気象が次々と日本を襲った。

（1）まず「四月五月になろうとしているのに急に冷え込んだ」という例から見てみよう。

　八九年五月には、急にシベリアから張り出してきた寒気団の影響で気温が低下。雷と雹を伴った激しい雨が降り、農作物に被害が出た。特に栃木県下では五月の落雷としては平年の三倍、十九日間連続の長雨という異常な気象だった。九〇年の四月末から五月初めにかけても同様の気象が発生。群馬県では、霜や雹や集中豪雨により農作物に被害五億円以上の損害が出た。今年（九二年）の五月にも、日本海上空の寒気の影響によって急な冷え込みに見舞われ、大粒の雹が降り、雷が連日発生し、雨の日が続いた。宇都宮では、雷観測日が十日、降雹連続三日という、宇都宮地方気象台の観測史上最多の記録をマークした。

（2）次に、「十二月になってぽかぽか陽気になったりといった現象」の例としては、九〇年十二月の全国的な記録的暖冬を挙げることができる。東京では十二月一日に、十二月としては観測史上最高の二十三・五度を記録。また、十一月にも、全国の半数以上の気象観測地点で、十一月としては観測史上最高を記録し、そのために紅葉も観測史上最も遅れたほどの異常高温であった。

　その年の全国の年平均気温について、『朝日新聞』は、「大阪では鹿児島並み、東京でも宮崎並みの南国温度を体験」と報道している（大阪版・九〇年十二月七日付）が、まさにこれこそ、麻原尊師の予言された「十二月になってのぽかぽか陽気」にほかならない。

（3）その他にも、「冬と夏の区別がつきづらくなってくる」という例として、八八年七月には全国的な冷夏（七月中の日照時間は軒並最小時間を更新。最高気温の平均値も平年を五度下回る。米どころ宮城ではササニシキの作表指数が史上最悪の七五まで落ち込み、千葉では、海水浴客数が前年に比べ五十三％激減。十月には栃木で春から夏にかけて咲くはずのツツジが狂い咲き）が襲ったと思えば、その年の冬は暖冬となった（十一月には東京で一月末に咲くはずのウメが満開。持ち主は「狂い咲きは二十年間で初めて」と語る）。

　九〇年二月も暖冬（平年より二度以上高い異常高温。桜の開花時期が全国百カ所の観測所のほぼ全域で平年より早まり、そのうち五十四カ所では観測史上最早の記録をマーク）。九一年も全国各地で異常高温で暖冬。そして同年の八月には例年の気温を五度も下回る冷夏となった。

　——以上のように麻原尊師の予言が公表されて以降は、夏に冷え込み、冬に温かくなるという異常な気象、しかも「観測史上最大」という表現が乱れ飛ぶ異常気象が極端に多く見られるようになってきたのだ。

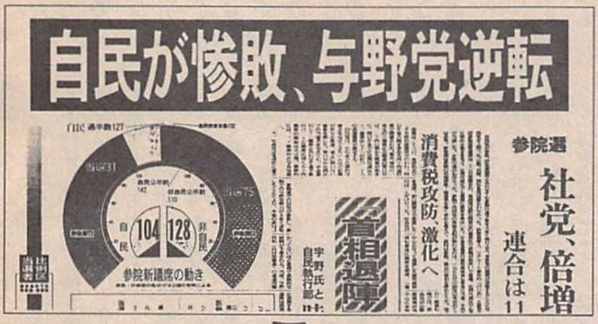

自民圧勝、最高の300議席

社会は惨敗

公明微減　共産横ばい　民社

参院でも安定多数

86年7月　参院選結果


自民が惨敗、与野党逆転

参院選　社党、倍増

連合は11

消費税攻防、激化へ

87年7月　参院選結果


自民大勝、自公民で過半数

選挙区選開票結果

参院の新勢力

自民	公明	民社	連合	社会	共産
107	23	6	12	70	10

公明躍進　自民1

共産、民社は不振

92年7月　参院選結果

自民党が大勝したり、大敗したり……

まさに尊師が予言されていたとおりに選挙は動いた





⑩国政選挙における自民党の大勝と大敗

「日本における選挙だが、これは非常に波があるだろう。波があるというのは、例えば自民党が大勝したり、逆に大敗したりということだ。」（八七年五月・秩父集中セミナーにて）

　この予言もそっくりそのまま実現した。以下に選挙における自民党の動きを見てみよう。

　麻原尊師がこの予言を公表されたのは一九八七年の五月のことだが、その前年の七月に行なわれた衆参同日選挙において、自民党は、衆議院では三百議席、参議院では選挙区で五十議席を確保し、両院において過去の記録を塗りかえるという「圧勝」を果たしていた。つまり、自民党は党史始まって以来の絶頂の極みにあったのだ。

　ところが、予言の二年後の、八九年七月に行なわれた参議院選挙においては、自民党は一転して大惨敗を喫した。消費税導入やリクルート問題が影響し、議席は過半数を大きく割り込み、与野党が逆転。前回と全く正反対で、党史始まって以来最悪の敗北となった。

　九〇年二月の衆議院選挙においては、若干議席を減らしたものの、何とか安定多数を確保。

　そして、今年七月の参議院選挙では、また一転して大勝利を収めたのだった。過去最高記録の八六年の衆参同日選の獲得議席に迫る勢いで、しかも、過去最低だった前回八九年の三十六議席からみれば倍増近い大勝となったのである。

　麻原尊師の予言を間に挟んだ三回の参議院選挙において、自民党は、過去最高の勝利、過去最低の惨敗、そして過去最高に次ぐ大勝、という激しい波を経験したのだった。

⑪国家と警察の権力が強化されていくこと

「政治的な面だが、国家の力・警察の力が増大していくだろう――。」（八七年五月・秩父集中セミナーにて）

　この予言も五年を経た今、現実のもの

となってしまった。

まず、PKO協力法の制定がそうだ。詳しくは本文で述べるが、この法律によって、政府はPKO参加等の国家的規模の活動にあたって、国内の人と物とを意のままに動かせる強大な力を手に入れたのだ。

そして、今年（九二年）三月一日から施行された「暴力団新法」。これは、暴力団の活動制限が名目になっているが、「暴力団」と指定するのは警察であり、その活動を制限するのも警察なのである。つまり、司法手続きを一切経ずに、警察権力だけでその活動を封じ込めることができるのだ。「これは憲法に違反する稀代の悪法だ」（遠藤誠弁護士）という批判の声も多い。

さらに、国家秘密を知ろうとする者に「スパイ」のレッテルを貼って処罰できる「国家秘密法案」や、被疑者に対する警察権力を格段に強める「拘禁二法案」の制定も、自民党政府によって推進されている。こうして国家・警察の力は刻々と強化されているのだ。

さて、もしこうした法律が悪用・濫用されるようになったら日本はどうなるだろうか。戦前、「治安維持法」などの悪法を武器にした特別高等警察は、国民の思想・言論を圧殺したが、あの悪夢が再現されることになるのは間違いない。

⑫マスコミ情報の享楽化

「人々は、よりいっそう現実主義に移行していくだろう。そしてわたしたちを操っているマスコミは、わたしたちに食欲、性欲、それからスポーツという三つの享楽しか与えなくなるだろう。別の言い方をすれば、精神的な面を徐々に制約していく、ということだ。」（八七年五月・秩父集中セミナーにて）

これは、世の中を注意深く見ている方ならばお気づきだろう。近年、マスコミの流す情報があまりに低俗になってきているということを――。

（1）まず、食欲に関してだが、あの〝グルメブーム〟が巻き起こって以来、食に関する情報はここ数年でめっきり増えた。例えば、腕のいい料理人や、「黄金の舌」をもつ天下の食通が活躍するグルメ漫画の隆盛はその一例（特に週刊誌『ビッグコミックスピリッツ』連載の「美味しんぼ」は有名）。また、通常の雑誌にも「有名料理店コーナー」などが大きく掲載されるようになり、テレビでも料理関係番組の花盛り。チャンネルをひねれば、「あれが美味しい、これが名産だ」という情報が氾濫している。今年の四月からは、テレビ朝日で『セイシュンの食卓』という、出演者が踊りながら料理を作るという番組がスタートし、高視聴率を獲得している。さらに、最近は、「グルメビデオ」なるものまでが出現し、登場人物がテーブルの上に並べられたフランス料理のフルコースを一つ一つ食べる光景が丹念に映し出され、それを眺めて楽しむそうである。

（2）性欲の情報に関してもいうまでもない。これまでは雑誌や映画が主流を占めていたが、尊師の予言以後は性情報を提供する媒体が著しく拡大しているのだ。まず「アダルトビデオ」の登場と急速な普及、そしてそれを貸し出すビデオショップの繁盛ぶりである。一昔前と違って、ビデオは今や性情報の中心源だといえよう。そして、電話だ。八九年からサービスが開始された「ダイヤルQ2」（NTTの情報料回収代行サービス）は、その半数以上が「声のポルノ」ともいわれるワイセツなアダルト番組や、不特定の男女の声を結ぶ「ツーショット」等の性番組に占められ、社会問題化した。こうした個人の生活に根ざした新たな情報媒体によって、情報がいたるところに提供されているというのが現代の特徴である。

（3）スポーツについても同様である。テレビでは大型スポーツ番組の増加が、新聞ではスポーツ欄の増加と充実が、ここ数年で手に取るようにわかる。スポーツ新聞の売上増大もその傾向を示している。また最近は、小さな地方のマラソンまでをもNHKと民放が争って放映しているくらいである。

そして、オリンピックに乗じて、スポーツの商業化がいっそう促進されている。

ちなみに、バルセロナ・オリンピックに関して、ある一般大型商業紙が、スポーツ面とは別枠を設けて大きく報道しているが、これなどもマスコミのスポーツ偏重報道を示すものだといえるだろう。

⑬PKO協力法を予言していた尊師

この予言は、最近になって見事適中し、わたしたちを驚かせた決定版である。

それは、今年の六月十五日に可決された「PKO協力法（国連平和維持活動協力法）」についての予言だ。自衛隊を海外に派遣するしないで国論はまっぷたつに分裂し、大混乱の後、結局強行採決されてしまった。

なんと麻原尊師は、このPKO協力法の制定と、その制定に至るまでの経過、そして、未来の日本に起きるであろうことを、正確に予言されていたのである！



日本は尊師の予言どおりに進んだ

「一九九一年から二年くらいの間に……日本の政治は右傾化してくるはずだ。そして、一九九三年には再軍備だ。」

　尊師がこう予言されたのは、今から五年前の八七年五月に開かれた「オウム真理教・秩父集中セミナー」でのことであった。この予言は、その後すぐにオウム出版から出版された『イニシエーション』（一九八七年八月一日初版発行）という書籍に掲載されている。

　そして日本は、それから五年後の現在に至るまで、本当に尊師の予言どおりに進んできたのである。その経緯を見てみよう。

　まず一九九〇年八月に「湾岸危機」が生じると、政府は十月に自衛隊を中東に派遣するための「国際平和協力法案」を国会に上程。十一月には広範な国民の反対を受けて廃案となったが、それでも政府は海外派兵の野望を捨てず、九一年九月には、先の「国際平和協力法案」とほぼ同内容の「PKO協力法案」を上程。そして今年六月ようやく可決となったわけだ。戦後一貫してタブー視されてきた自衛隊の海外派兵を大胆にも容認したこの法律の制定。これは尊師の予言どおり「政治の右傾化」を示すものと言わざるをえない。

　そして、「一九九三年に再軍備が行なわれるだろう」との予言――。これは、今後のことだけに明言はできない。だが最近の情勢を見てみると、これは、PKO協力法に基づいて、少なくとも来年（九三年）までには実行されるであろうカンボジアへの自衛隊派遣を暗示しているとも考えられるのである。



PKO協力法によって海外にも出られるようになった自衛隊



平和協力法案
自衛隊派遣が「効果的」
首相表明 懇談で 委員会までに提出
自衛隊の輸送は「委託」
協力法案骨子提示 文民統制確立を強調
政府筋見解
自衛隊の応戦も可能
中東派遣は武装のまま
国連協力法案の廃案確定
自公民 本会議入り要求
「無効」と社共反発
自衛隊と別個に新組織
自公民で合意文書
幹事長書記長 社党は加わらず
PKO法案 未明に可決
参院特別委 自公民が押し切る
「PKO法案に反対」
学者・文化人が緊急アピール
PKO法案、学者は「ノー」
論壇
PKO軍事部門参加は違憲
山内敏弘

日本は尊師の予言どおりに進んだ――右傾化、そして再軍備へ……

予言は一歩一歩成就している

ところで、この予言が公表された八七年といえば、PKO協力法の制定のきっかけとなった一九九〇年の「湾岸危機」の気配すら全く感じられなかったときである。そのようなときに、PKO協力法制定に至るまでのその後の急激な政治の動きを、そして戦後のタブーを破る自衛隊の海外派兵を、神秘的な力によって鋭く見抜いていた人物は、日本ではこの麻原尊師一人だけだろう。

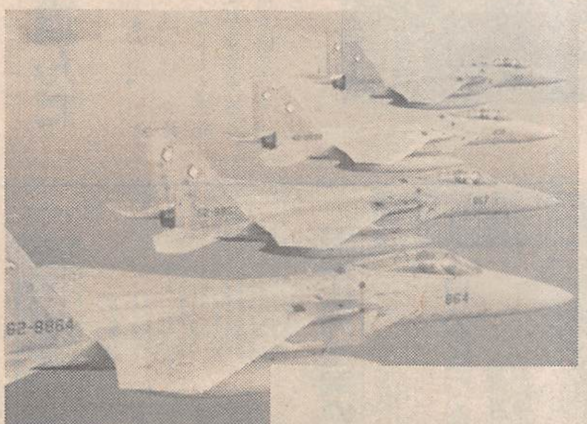
そして、PKO協力法の制定を知った麻原尊師は、一九八七年の自身の予言を振り返って、次のように述べておられる。

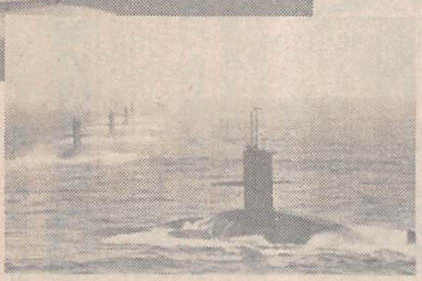
「確実に一歩一歩予言は成就しています。例えば、一九八六年だったかな、七年だったかね、一九九三年再軍備になると、わたしは予言しています。現に九二年PKO法案が成立しました。これは自衛隊から『軍隊』に移行するための道です。」（一九九二年六月二十一日・和歌山支部道場にて）

「これは明らかに自衛隊の『軍備化』と見ていいと思います。そこはわかるよね。自衛隊とは、攻められて初めて、防衛として反撃することを自衛といいます。そしてその団体のことを自衛隊といいます。しかし、その自衛隊が先駆けとして外国に行くとしたならば、それはもう明らかに軍隊としての機能を有していると考えてよろしいと。で、これがいい悪いというのは別にして、予言では九三年に再軍備だよね。だから予言どおり、しっかりと進んでいるというふうに考えるべきである。」（一九九二年六月十四日・名古屋支部道場にて）

さて、以上のように、尊師にかかれば未来はすべて〝お見通し〟というわけだ。







強力な兵装を誇る「自衛隊」海外に出られるようになって実質的に「軍隊」へと変貌した



第2章

なぜ当たるのか 予言メカニズムの解明

驚異的な正確さで次々と適中してきた尊師の予言。皆さんもきっと驚かれたに違いない。しかし、
「どうして未来を予知することなんてできるんだ?」
と疑問を持たれることだろう。
では、その疑問に答えよう。予言の秘密を次に明かすことにしよう。

予言の謎を解く宇宙の構造

予言というものが、どのようなメカニズムによって可能になるのかを理解するためには、まずその前に、この宇宙の構造を知らなければならない。

仏教・ヨーガ理論によると、わたしたちが現在住んでいる宇宙は、始まりとてないはるか昔に発生した大爆発（現代科学でいう「ビッグ・バン」に該当する）によって形成された。そして、爆発後の宇宙は、コーザル界、アストラル界、現象界という三つの世界から成り立っている（下図参照）。それぞれの世界の特徴は次のとおりである。

・コーザル界……光優位のデータの世界。上へ行くほど透明な光が強くなり、光が情報として存在している。無始の過去からはるかな未来に至るまでのデータが存在している。

・アストラル界……音（ヴァイブレーション）優位の微細な物質でできた世界。イメージの世界。

・現象界……熱優位の粗雑な物質でできている世界。今現在わたしたちが住んでいる人間界が含まれる。

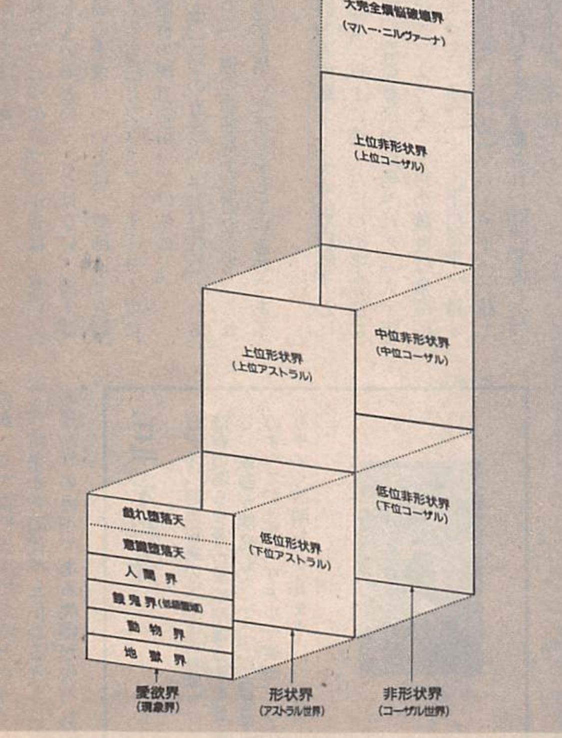
この三つの世界は相互に連動している。つまり、光でできたコーザル界のデータが、原子や素粒子よりももっと微細な物質でできたイメージの世界であるアストラル界に降りてくると、そこでそのデータに対応するイメージが現われ、それが現象界に投影されて事象が生じるのである。（次頁図参照）

つまり、わたしたちの目前で起きる出来事は、すべて、コーザル世界のデータとアストラル世界のイメージが投影されたものにすぎない。よって、未来に起きる出来事を見ようと思えば、コーザル世界のデータとアストラル世界のヴィジョンをあらかじめ見ればわかるのである。

現代科学と一致するその宇宙観

そういっても信じられない方がいるかもしれないが、実はこの仏教・ヨーガの宇宙観は、現代科学の研究結果と一致するのである。

現に最近は、最先端の物理学者の間でも、見えない世界、五官では感知できない世界が実在するという意見が発表されるようになっている。日本で初めてノーベル物



三つの世界から成り立っている宇宙の構造



湯川秀樹博士

理学賞を受賞した湯川秀樹博士も、そのうちの一人として次のように語っている。

「私はこの現実の世界のほかに、何らかの意味で別の世界があることを想像せずにはおられない。すなわち現実の世界の裏には色々な意味で、多彩多様の世界があるのではないか、そして現実の世界も、その別の世界の一つであって、それが偶然かあるいは何らかの理由によって、別の世界のエネルギーが物質となって実現されたのではなかろうか？」（佐保田鶴治著『ヨーガの宗教理念』より）

湯川博士は、最先端の物理学の研究を経て以上のような考えに達したわけであるが、博士の言う「現実の世界も……別の世界のエネルギーが物質となって実現されたのではなかろうか？」という考えは、まさにコーザル世界のデータとアストラル世界のイメージが現象界に投影されて事象が生じるという、仏教・ヨーガの宇宙観に通じるものがある。

なお、仏教・ヨーガの修行者は、瞑想の究極状態である「サマディ」（詳細はPART3を参照）によって、何千年も前から、経験的に真の宇宙の構造を理解していたのだ。

①予言のメカニズム——未来への三つのアプローチ

では、宇宙の仕組みがわかったところで、予言の方法についてお話ししよう。予言は、次の三つの方法に基づいてなされるのである。

まず一つ目は、直観智によるものである。これは、コーザル世界にある宇宙神素よりデータを得る方法であり、そこから得られる予言の狂いは、まずないといえる。宇宙神素とは、宇宙レベルのデータから個人のデータまでを蓄えている、巨大な球体光である（『生死を超える』麻原彰晃著 オウム出版 参照）。例えば、「大宇宙占星学」（後述）での予言は、特殊な占星学を用いて、直観智で導き出したものなのだ。

二つ目は、アストラル世界の未来ヴィジョンによるものである。これは、アストラル世界へ飛んで、未来ヴィジョンを見てきてから、推測する方法である。しかし、この未来ヴィジョンはコーザル世界のデータとは異なり、その予言にズレが生じるといった欠点がある。つまり、その事柄が起きる時期が、正確には把握できないのだ。

三つ目は、ジュニアーナ・ヨーガ（哲学のヨーガ）によるものである。これは、今の現象界の動きを徹底的に解析し、データをインプットしておいてから、予言を引き出す方法である。

これらの三つのアプローチは、互いに独立しているということはない。例えば、円相場の予言については、尊師は、直観智による方法とジュニアーナ・ヨーガによる解析の両方を用いているのだ。

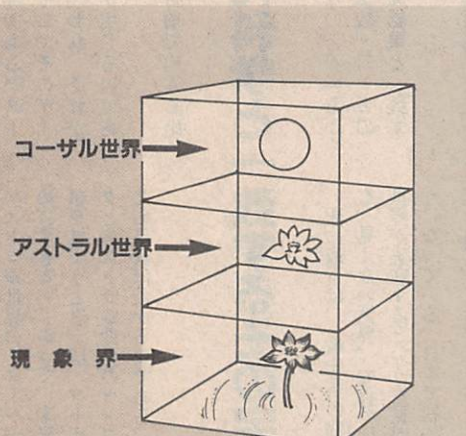
以上の三つの方法で、予言は行なわれる。もちろん、他の著名な予言者たちも、これらの方法を用いて予言をしているのである。

②驚異の適中率——「大宇宙占星学」とは

そして、以上に述べた三つの予言法に加えて、麻原尊師が開発された「大宇宙占星学」によって、予言の確度は飛躍的に高まっている。「大宇宙占星学」はオウム真理教の月刊誌『マハーヤーナ』誌上でも、NO8より連載され、好評を博した。

大宇宙占星学はどのようにして生まれたのかを、ここで少し触れておこう。

古くから、現代に伝わる運命学で「奇門遁甲」というものがあるのをご存じの方も多いであろう。『三国史』でおなじみの中国の軍師、諸葛孔明が編み出したといわれる運命学である。尊師は今まで数多くの運命学を研究していらっしゃったが、中でも特に絶大なパワーと適中率を持っていたのが、この奇門遁甲であるという。しかし、古来から現代へと伝わるうちに、この運命学のカギである奥儀が失われてし



●この世界の現象は、「データの世界」コーザル世界からアストラル世界へ降りたデータが、この世で現象化したものである。

まっていた。それを、麻原尊師がアストラル世界（高次の異次元世界）の一人のグル（霊的指導者）であるマニクラチューという方から示唆を受け、完璧な形で再現したものが、この大宇宙占星学なのである（『マハーヤーナ』NO8参照）。

大宇宙占星学では、実際の星の配置からこの大宇宙の法則を読み取り、未来を予言するのであるが、同じように星の配置を利用した西洋占星術などとは大きく異なっている。それは、大宇宙占星学と、これらの占星術の適中率を見ていただければ明らかであると思う。特に大宇宙占星学を活用するためには、以下の条件を備えていなければならない。

それは、アストラル世界が指示する「天の時」、地上のエネルギーを表わす「地の利」、功徳を表わす「人徳」、正しい修行をした者でないと得ることのできない「インスピレーション」である。

これらの点は、既存のあらゆる運命学との決定的な違いということができよう（『マハーヤーナ』NO10参照）。

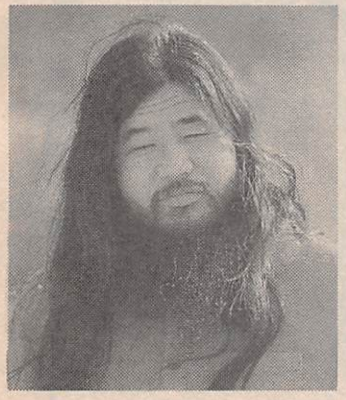
「聖者」だから可能な業

これでおわかりいただけただろう、尊師の予言のヒミツが。尊師の予言が正確に適中するのは、以上に述べた宇宙観を背景にし、いくつかの方法を巧みに組み合わせているからなのである。

しかし、この方法によれば、だれにでも予言が可能だというわけではない。コーザル世界、アストラル世界、現象界に対する正確なアプローチや、大宇宙占星学を利用する際に必要なインスピレーションを得ることは、正しい修行によって煩悩を滅尽して「解脱」し、心が浄化され光に満ちている聖者でなければ不可能なのだ。

古今東西の聖者方が予言者としても有名であったことはすでに述べたが、それは、こういう理由からである。聖者だからこそ可能なワザ——それが未来予言なのである。

古今東西の予言者が予言した世紀末救世主の姿や救済団体の描写がピッタリ一致するのは、基本的にこうした同じ方法によって、彼らが予言を行なっていたからにほかならない。彼らは確実に、麻原尊師とオウム真理教のヴィジョンをその霊的な目で見ていたのである。



“正夢”が裏づける仏教・ヨーガの宇宙観

わたしたちの目の前で起きる出来事は、すべてコーザル世界のデータとアストラル世界のイメージが投影されたものにすぎない——。この仏教・ヨーガの宇宙観は、意外にも簡単に納得できる。

なぜならば、皆〝正夢〟によって経験しているからである。正夢とは、予知夢と言い換えることもできるが、要は、未来に起きる出来事をあらかじめ見てしまう夢のことだ。これは、睡眠中に意識が現象界を離れ、現象界に投影される前のアストラル世界のイメージを見てしまうことによって、生じる。修行が進めば、こうした体験は頻繁に起こる。修行者による例をいくつか挙げよう。

＊

◆ほんとに起きた衝突事故
——ヴァラヘーランニャカーニ師

夢の中でのことです。自転車に乗って颯爽と走っていたわたしは、ある曲がり角までやってきました。すると、一時停止義務を無視した自動車がいきなりわたしの方向に突っ込んできて、跳ね飛ばされてしまいました。

そして、夢から覚めた明くる朝のこと。ある用事で自転車に乗って走っていたわたしは、夢で事故に遭った場所まで来たときに、夢の中での出来事を思い出していました。「ここで事故に巻き込まれたんだ」と。すると本当に一時停止義務を無視した自動車が突っ込んできてわたしに衝突したのです。全くの夢どおりの展開に、驚きというより〝予知夢〟だったんだと納得したのを覚えています。

◆警告されたオーバーヒート
——スワミ・アッジュナ

夢の中で車に乗っていたら、ボンネットから煙が噴き出して走行不可能になってしまいました。オーバーヒートです。目的地に行けずに困ってしまったわたしは、そこで目が覚めました。さて、朝のこと。気になったわたしは、車に乗り込みエンジンをかけてみたところ、いきなりボンネットから煙が噴き出し始めたのです。ボンネットを開けて見ると、水が全くなくなっていることがわかりました。つまり、オーバーヒートです。もう少しで夢のとおり目的地に行けなくなるところだったのです。

◆あっ！同じ問題が
——郡谷昌弘さん

テレビで、あるクイズ番組を見ていたとき、つい居眠りをしてしまいました。すると、夢の中でもそのクイズ番組が続けられており、司会者がある問題を出題し、出演者がそれに回答していました。五分くらい経ったでしょうか、そこで目が覚めました。そのクイズ番組は現実にまだ続いていたのですが、すると、ほどなくして夢の中で見た問題と同じ問題を司会者が出題したのです。『あれ、夢で見たのと同じだ』と思って、『確か回答はこうだったな』と思い出していたら、これまた夢の中で回答したのと同じ出演者が、夢と同じ回答をしたものだから驚いてしまいました。

＊

こうした経験はだれにでもあるだろう。現象界の事象がすべて高次の世界の投影にすぎないという、仏教・ヨーガの宇宙観が実感できる。

PART 7

1993~4年、日本は戦争に巻き込まれる！

巻末近未来予言



本特集では、世界中の予言を分析することによって、大破局に至る終末核戦争の実相、そしてその際に登場する救世主や救済団体の姿を追究してきた。

そして、そのような予言がどうして可能なのかというメカニズムを解明した。

さて、最後に、世紀末の大変動に至るまで、日本がどういう道を歩むのかを明らかにしておこう。大破局を前にした当面の動きを知っておくことは、わたしたちにとって決して不利益ではないだろうからだ。

日本は戦争に巻きこまれる！

では、これから当面、日本にどんな運命が待ち受けていると尊師はおっしゃるのか。

「九三、九四年に、（日本は）戦争に巻き込まれる。」

尊師はこう予言されている。

昨年（一九九一年）の十一月九日に開かれた「川崎説法祭・予言セミナー」でのこと。それ以前に、「日本は再軍備をするだろう」との予言を聞いていたわたしたちは、さらに戦慄の予言を耳にして思わず背筋が寒くなった。

とはいうものの、この予言が発表された時点では、これを聞いたわたしたちには、何のことを指しているのか、さっぱりわからなかった。

しかしその後、PKO協力法の制定によって、慌ただしく自衛隊の海外派兵が決定され、そして派兵予定先のカンボジアの軍事情勢が不安定になってきた今になって、こう思う。

カンボジアでの自衛隊の動き、これが「日本が戦争に巻き込まれる」一つのきっかけになるのではないかと——。

事実、次に見ていくように、その可能性は十分考えられるのだ。



「93~4年に日本は戦争に巻き込まれる」——91年11月の川崎でのセミナーにて

PKOで戦闘参加は必至



PKOに参加すれば必ず戦闘に巻き込まれるだろう

では、PKO（国連平和維持活動）に参加した自衛隊は、どのように危険に巻き込まれる可能性があるのだろうか。

PKOの平和維持軍の活動とは、停戦後の武装勢力の間に割って入って、戦闘が再び起こらないように武力をもって監視するものである。

しかし、いくら停戦後の監視活動とはいっても、局部的に戦闘が再発してそれに巻き込まれたり、ゲリラ等の攻撃を受ける危険性が高い。平和維持軍は自衛の範囲内ならば武器を使用することが認められているので、攻撃を受けて応戦すれば必ず〝ドンパチ〟に発展していくだろう。

現に、愛知大学の三好正弘教授が、**「内戦状態では、一国に複数の『政府』があり、内戦に巻き込まれる場合もある。」**と述べているように、これまで各地に派遣されてきた平和維持軍は、内戦等に巻き込まれて、多くの犠牲者を出してきたのだ。

例えば、一九六〇年にコンゴ（現ザイール）に派遣された「コンゴ国連軍」は、現地勢力からの攻撃を受けて、戦闘機まで繰り出した大戦闘の後、二百三十四名が死亡。一九六四年にキプロスに派遣された「国連キプロス平和維持軍」は、百四十九名が死亡。さらに一九七八年にレバノンに派遣された「国連レバノン暫定軍」は各武装分子の抗争に直面し、百七十名が死亡。これまでのPKOによって、合計七百七十二名もが死亡しているのである。

後方支援でも危ない！

だからだろう。政府は世論を考慮して、少なくともむこう三年間は、自衛隊の平和維持軍参加を見合わせ、その後方支援業務（通信・建設・修理等）だけに限定するという。

だが、後方支援任務とはいっても、戦闘に巻き込まれる危険は避けられないのだ。それは、軍事評論家の藤井治夫氏が、

「後方支援部隊は任務を妨害しようとするグループの攻撃を受けやすく、戦闘に巻き込まれる危険性は高い。自己防衛のための武器使用を隊員個人の判断にゆだねるという政府答弁はまやかしだ。憲法上認められない組織体としての武力行使に発展する恐れがある。」と警告しているとおりである。

日本だけ逃げ出せない

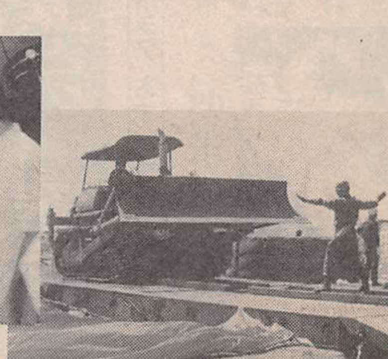
それでも政府は、自衛隊が戦闘に巻き込まれるのを防ぐために、こう言っている。「もし現地の武力紛争が再発すれば、政府の判断で部隊を引き揚げる」と——。

しかし、実際そういくものではない。

自衛隊も国連の指揮下に入って行動するのだから、国連の命令で動かねばならない。それは、ある陸上自衛隊二佐が、「PKOに参加した自衛隊員を、日本だけ国連事務総長（国連司令官）に指揮権を渡さず、日本が指揮するなんてできるわけがない。政治家は法律は知っていても軍事をまったく知らない。」と言っているとおりだ。他国の軍隊が居並ぶ中で、まさか日本だけが「危ないから、お先に……」と勝手に帰るわけにはいかないのだ。**結局、危険な戦闘行動に参加せざるを得なくなるのは確実**なのである。



いくら後方支援でも、戦闘に巻き込まれる危険性は高い



いっそう危険なカンボジア

このように、ただでさえぶっそう極まりないPKO参加なのに、今回自衛隊が派遣されることになるカンボジアは、いっそう危ないのだから大変。

カンボジアは、昨年（九一年）十月のパリ和平協定の調印によって、十二年間続いてきた内戦がひとまず終息したのだが、現在は当初予想できなかった不安定な状態が生じている。

というのも、反政府勢力最大の軍事力を擁しているポル・ポト派（過去に急激な共産主義化を掲げて約三百万人の同国国民を大量虐殺したことで有名）が、「国連カンボジア暫定行政機構」の指導に逆らって、パリ和平協定で約束していた武装解除を拒否しているのである。

強硬姿勢を崩さないポル・ポト派と国連側との溝は次第に深まっており、もし





ポル・ポト派の武装解除拒否によって、カンボジアの危険性は一段と高まっている

自衛隊は戦闘行動に参加せざるを得ない
── 有識者の声

有識者は、自衛隊が戦闘に参加せざるを得なくなる可能性や、組織的な戦闘行動、つまり憲法が禁じた武力行使を行なう危険性があることを指摘する。

◆元官房副長官・元自治相の後藤田正晴氏

「政府はその時（紛争が再発した時）は自衛隊派遣の前提が崩れたとして、現場から引き揚げるという。机上の理論としては分かるが、現場で実際に可能なのか。ガラス細工の論理だ。」

「部隊が危急に陥った時の武器使用は個人の自己防衛にとどまるのか。指揮官がいて組織体として武器を使用するのは戦闘行動であり、まさに主権発動の武力行使だ。」

「PKF（平和維持軍）は自衛のためのみならず、任務遂行のための武力行使もあり得る。」

◆独協大学・山内敏弘教授

「法案は、武器使用を日本人要員の防衛に限って認めるとしているが、これは国内向けの詭弁だ。国連の報告書は、要員全体の安全が脅威にさらされた場合など、より広範な武器使用を認め、さらに、個々の要員は完全に国連の指揮下に入るとしている。実際に参加したら、法案の内容は国際的に全く通用しない。国連文書が『現地司令官のコマンドに従わなければならない』という場合、コマンドの核心をなすのは武力行使・武器使用だ。この点については個々の隊員の判断にまかせるなどという議論は、PKFの活動原則を無視した空論だ。」

「『中断』や『撤収』も政府の一存でできるものではない。」

「さらに、現地司令官の指揮命令には他国部隊のための武力行使も含まれ、自衛隊は集団的自衛権を行使せざるをえない。」

◆愛知大学・三好正弘教授

「自衛隊が派遣された場合、第一義的には現地の指揮官の判断に従うため、日本政府のコントロールが難しい場合もあるかも知れない。」

◆平和・安全保障研究所会長・猪木正道氏

「紛争が再発したら撤収するというのも非常識。戦闘行為に巻き込まれることは覚悟していかねばならない。」

自衛隊が国連側に加わった場合、同派と戦火を交えることになる危険性が高い。しかも、日本人の場合はよりいっそう危険度が高まりかねないと、上智大学の村井吉敬教授は述べている。

「かつて日本軍に侵略された記憶がアジアの人々に残っており、日本人の商社マン、技術者へのゲリラなど反日感情が強い。今回の法案で、日本政府が（現地の）支配階層とつながっているというイメージが増幅され、かえって反日感情を助長することになる――。」

こういうわけで、**自衛隊がカンボジアで戦火を交える危険性は高い。**

こうした事実から考えると、カンボジアへの自衛隊派遣が、尊師の予言どおり日本を戦争に巻き込んでいくきっかけになるのではないだろうか。実に恐ろしいことだ。

しかし、本当に恐ろしいのが、それ以降の出来事であることはもはやいうまでもない。事実、尊師も、

「九三、九四年に戦争に巻き込まれることは事実だけど、それによって日本が破局に及ぶほどのことはない。」

とおっしゃっている。つまり、日本が戦争に巻き込まれることというのは、戦慄の世紀末へ向けてのほんのプロローグにすぎないのだ。

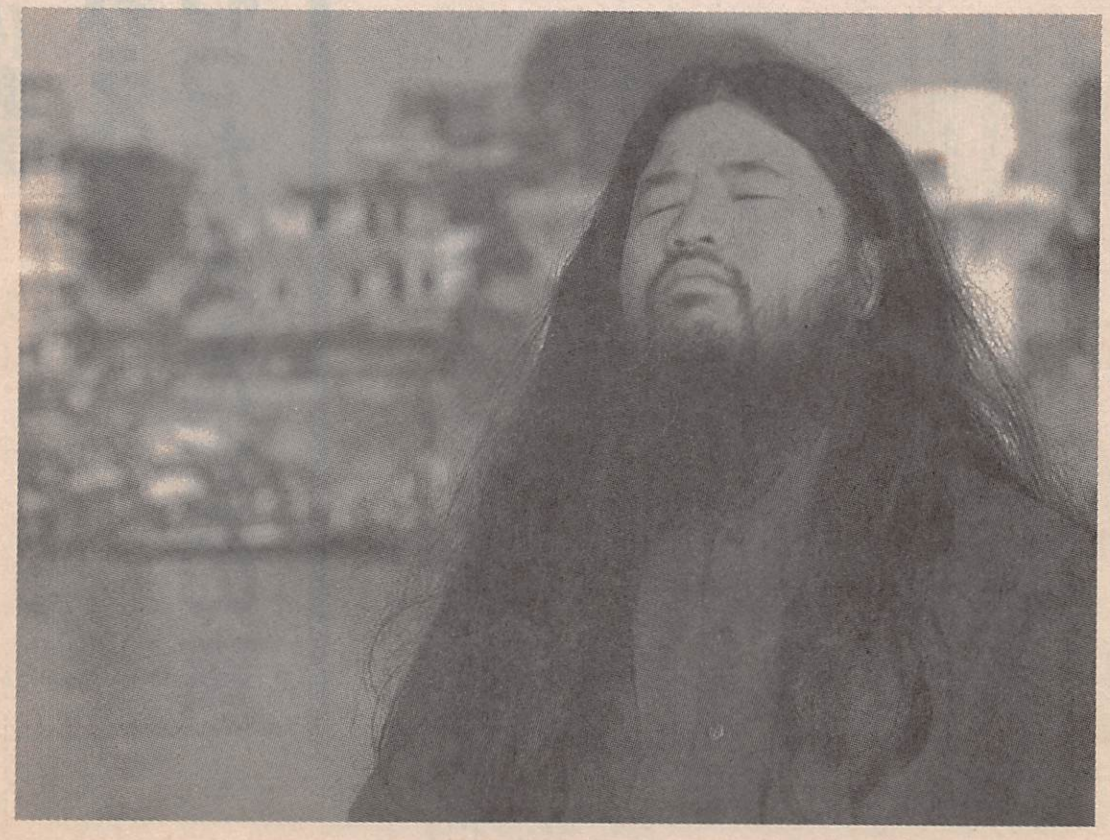
戦慄の世紀末に向けて

日米経済摩擦の激化、異常気象の頻発、ＰＫＯ協力法の制定、国家・警察の力の増大、日本の右傾化。そして、日本は戦争に巻き込まれていく。今世紀末の大破局へ至るまでの日本のプロセスである。最終戦争への秒読みが、いよいよスタートしたのだ。

オウム真理教の修行者は、その予言を冷静に受け止め、その対策を正しく取っているので、何も恐れることはない。ひたすら超人類への道を極め、大破局にあたって苦しむであろう人々の救済のために、日々修行に励むのみである。

それこそが、天によってわたしたちに課せられた「歴史的使命」であるからに他ならない。





わたしは変わった！オウム真理教体験談

麻原尊師の説く教えで、新しく生まれ変わった人たちの声

最高の向上心



■アパーヤジャハ正悟師
（本名・青山吉伸　32歳）

一九八一年十月　司法試験合格（第三十六期）
一九八二年　四月　京都大学法学部卒業
一九八四年　四月　弁護士資格取得
一九八四年　四月
～一九八九年　九月　なにわ共同法律事務所勤務

わたしは大学に入って、薬害スモン病等の社会問題を知るにつれて、次第に「社会的に役に立ちたい」という思いが募り、弁護士の道を選びました。

その結果、困っている人たちの救済のために自分の向上心を振り向け、精神的にも充実した毎日を過ごしていました。

しかし、いくら社会問題の解決に役立とうと思っても、「人間の心が変わらないかぎり本質的な解決にはならないんだな」という空しさを感じることがありました。また、個々のエゴを全うすることや経済的利益を追求することが本当に価値あることとも思えませんでした。

真理に出会ったのはそんなときでした。そこに、社会的に価値あるとされているものよりももっと素晴らしいものを見つけたのです。

というのも、麻原尊師という素晴らしい指導者とその教えにより、仏教の経典に記されている「悦」や「楽」という、心の奥底からわき上がってくる喜びや安らぎを得ることができたのです。これは物質的な快楽では得ることのできない本当の喜びです。

それに、富士山の道場で立位礼拝という修行に連続で取り組んだときのこと。長時間の修行の後に、パッとこれまでの苦痛が消え、心が完全にチェンジして、感情が静止する境地に達したこともありました。また、口では表現できない本当に優しい心の状態を修行によって培うことができます。

さらに、人に対する嫌悪の気持ちが感謝の気持ちに変わったとたん、クンダリニーという霊的なエネルギーが背筋を駆け上ったことがあります。

これは、心のひっかかりがとれた瞬間にエネルギーが上がるという「クンダリニー・ヨーガ」の特徴です。

その他にも、「懺悔の詞章」という詞章を唱える修行で、まる四日間一睡もしなかったり、五日間飲まず食わずで瞑想修行をする経験もしましたが、修行によって自然とそういう厳しい修行にも耐え得る強靭な心身が得られたのです。

これもすべて、経典どおりの経験であり、尊師から注がれている聖なるエネルギーのたまものです。現に、自宅で修行を始めたとき、身体が揺れ、尊師からものすごいエネルギーが注がれているのを体感しました。

わたしは、修行によって、何ものにも壊されない不動の心と安らぎを

得ました。かつて不当な弾圧を受けたときでさえ、心は動じることなく、相手に対する哀れみの念が生じるだけでした。以前のわたしからは考えられない変化です。「人間は確実に変われるんだな」、そう思いました。

さて、それに比べて、財産や地位や名誉などに、いったい何の価値があるでしょう。それらは、移ろい壊れ去ってしまう「無常」のものであって、それらに対する執着は苦しみの原因にほかならないのです。

あなたも心の底では本当の安らぎや自由を求めていませんか。欲望をかきたてる現代の物質主義社会では忘れ去られた絶対的な自由・幸福・歓喜。正しい修行でそれを実現できるのです。それこそが、最高の向上心を生かす道であり、最高の目標だとわたしは思うのです。

煩悩超えて神の世界へ



■石川公一（23歳）

一九八七年　三月　灘高等学校卒業
一九八七年　四月　東京大学教養学部理科Ⅲ類入学
一九八九年　九月　東京大学医学部進学

「わたしは修行をしています」、と言うと「へえっ」と言われる。修行というと滝に打たれたり、荒行をしたりという苦行のイメージがあるようだ。しかし――、修行によって得られるものは、その対極にある超越的歓喜状態と神の境地なのである。

さて、オウム真理教で修行を始める前のわたしは、コントロール不能のダンプカーのような、強烈な煩悩に苦しんでいた。特に性欲や闘争心には、さんざん振り回されていた。

「何とかしてこの煩悩を消滅させたい。そして超人に生まれ変わりたい！」

そう熱望していたわたしは、精神世界を模索。そして、とうとう麻原尊師の名著『イニシエーション』に巡り合ったのだ。一読して驚いた。特に圧巻だったのが、巻末の信徒の体験談。皆修行によって、確実にものすごい神秘体験を重ねている。さらに、尊師によって「解脱」「悟り」への修行プロセスがハッキリと明かされていたのにも驚いた。

「これだ」と思い、迷わず入信。早速修行を行なうと、効果はみるみるうちに現われた。まず第一に、わたしをあれほど悩ませた煩悩がどんどん弱まっていったのだ。というのも、オウム真理教には「ツァンダリー」というチベット伝来の秘儀瞑想法が存在しているのだが、これによって煩悩を昇華させることができたからだ。例えば、性欲ならば、性欲が上昇のエネルギーに転じて、昇華していくのが物理的に感じられた。

このようにエネルギーを上昇させていくと、経典の記述どおり、性的快楽を含めた世俗の快楽とは比較にならない超越的な歓喜状態に至ることができる。そうすれば、煩悩を満たすことで得られる世俗の喜びなどは取るに足りなくなる。こうしてわたしの煩悩は見事に克服されていったわけだ。

また、以前ならばとても耐えられないような出来事にもまるで動じなくなったし、性格も積極的・肯定的になり、何をやるにも不可能な気がしなくなった。心で思ったことがすぐに現象化することもあった。

さらに、何といってもすごいのが神秘の力「クンダリニー」だ。この解脱と悟りをもたらしてくれる〝生命進化促進装置〟と呼ぶべきエネルギーが完全覚醒したとき、稲妻のごとくインスピレーションが大脳を直撃する。

そして、闘争心も徐々に消えていき、「みんな幸せになってくれたらいいなあ」と思えるようになり、豊かな心が得られたのだった。

これもみな、麻原尊師のエネルギーのおかげである。現に、尊師がわたしに意識を向けられたとき、わたしの心は沈んだ状態から晴れ晴れした状態へ一気にチェンジし、また、わたしが尊師を意識すれば、頭頂がジーンとしびれてエネルギーが充実する。

尊師と弟子とは特別な霊的パイプでつながれていて、弟子は常に尊師の見えないお力によって、超人＝神の境地へと導かれているのだ。

オウム真理教は、実践することによって百パーセント経典どおりの体験が可能な実践宗教だ。「自己を帰依所とせよ」とは釈迦牟尼の言葉。そう、全てが〝バブル〟の世の中において、絶対なる自分、不動の心を修行で確立しよう。

名参謀への道を求めて



■エーラカ正師
（本名・柴田俊郎 44歳）

一九七二年 三月 中央大学商学部会計学科卒業
一九七六年 四月〜一九七九年 七月 監査法人第一監査事務所（現・センチュリー監査法人）勤務
一九八〇年 四月〜一九九〇年 五月 サンワ・等松青木監査法人（現・トーマツ監査法人）勤務
一九七五年十月 公認会計士第二次試験合格。
その後、公認会計士として現在に至る。

「トーマツ監査法人」上場企業や証券・金融業界に勤務されている方は、この名前をご存じの方も多いと思います。企業の上場準備や経営コンサルティング等に優れた、日本一の規模を誇るといわれている監査法人です。

公認会計士であるわたしはこの監査法人に勤務し、企業の上場準備とそれに伴う経営コンサルティングに従事していました。外見的には充実した日々を送っていましたが、それでも現状の自分の能力には満足していませんでした。

公認会計士の経営コンサルタント業務は、大中企業の参謀役です。ですからわたしは、『三国志』に登場する有名な名参謀・諸葛亮孔明に非常に興味を持ち、彼のように優れた参謀になるための研究をしていたのです。ところが、研究の結果、孔明のような卓越した戦略を駆使するためには、全宇宙を包括する法則を理解し、それを自在に使いこなせるだけの智慧と能力を有していなければならないことがわかりました。この日本では獲得不可能なことだと思い、一度は断念しました。

ところが、そんなとき、麻原彰晃尊師に出会い、すべてを包み込むその大きさと暖かさ、物事の本質を深く見抜く智慧に触れ、オウム真理教入信しました。

オウム真理教の修行とは、期待に違わず素晴らしいものでした。例えば、現代科学では依然ナゾに包まれたままの宇宙の構造も、瞑想によって、変化身・法身・報身という霊的な身体を使って体験して理解することができました。また、「バルドー」という死後の中間状態も、経典どおりに経験しました。

さらに、すべての魂が輪廻転生（生まれ変わり）している事実や、全宇宙を包括する「カルマの法則」も、わたし自身が自分の過去世や来世を見ることのできる「宿命通」や「死生智」という神通力を身につけることによって、理解することができました。

そして、何よりも価値あることは、煩悩が落ちていったことでしょう。集中的な修行によって、偏った愛着や食欲、プライドなどがどんどん落ちていきました。その結果、意識は覚醒状態になり、二十四時間修行しても頭が冴えわたるようになりました。

苦しみの原因である煩悩から解放され、常に平安であることの素晴らしさ。真っ暗な空間にいても、常に白銀の光に包まれているわたしには闇が存在せず、いつ死んでも今より高い世界に転生できるという安楽。瞑想すれば、高い世界から光が頭頂に降り注ぎ、至福感に包まれてわたしが輝きを増します。

わたしが得た平安と至福と神通。そして、明晰な頭脳と智慧……。名参謀への道を模索しつつ到達したこの境地。尊師と尊師の説かれる法によって得られたものは、当初の目的をはるかに超えるものでした。

さて、高い地位、学識、名誉、多くの財産などを得ていらっしゃる、社会的に成功された方々は、修行に

不可欠な功徳が多くあり、さらに精神集中力にも優れておられるため、正しい修行を実践されるなら、極めて短期間に高い解脱と悟りが得られるといわれています。それだけに、一人でも多くの方が、この素晴らしい道に気づいていただきたいと思います。

利己主義者からの超越



ヴァジラティクシュナー師

（本名・野田成人　25歳）

一九八五年　四月　東京大学教養学部理科I類入学
一九八七年　四月　東京大学理学部物理学科進学

わたしは小さい頃から煩悩が強く、特に、闘争心はわたしを一番苦しめた煩悩でした。

東京大学理学部物理学科に進学したとき、わたしは「ノーベル賞を取り、理論物理学において大理論を打ち立て、物理学史上さらには人類史上にニュートン、アインシュタインをはるかに上回る超特大金字塔を打ち立てよう」と本気で決心しました。

しかし、全国の秀才が集まる東大。現実はそれほど甘くありませんでした。道の険しさゆえ、大部分の人があきらめていく中、わたしは、その自己のアイデンティティーのために自分にむち打たざるを得なかったのです。

苦しみながらいくら自己を追い立てても自分の目標には遠く及ばず、「周りを完膚なきまでに叩きのめさなければ」という焦りにも駆られ、またそこで苦しむという泥沼。ついには周囲との闘争、途方もない目標の重圧の苦しみのあまり、自己の存在そのものを消して自殺したいと思うようになったのです。

そんなときに麻原尊師の法の存在を知り、苦しみから本当に解放されたように感じました。なぜなら、そこには、「自と他の区別をなくすことが真の幸福につながる」ということが明確に説かれていたからです。

わたしの二十歳までの人生は、全く自分しかない、自分以外の者を認めない、友人と呼べる人さえいない、エゴしかない状態でした。それで他との軋轢で苦しむわけですが、客観的に見られない状態ですから、ますます誤った方向に行ってしまっていたわけです。

しかし、尊師のもとで修行して変わりました。尊師の教えというものがあり、それを自分の考えより優先させることによって――それはエゴをつぶすことになるので、苦しみの状態から解放される方向に向かえるわけです。

また、尊師は弟子を成長させるために、いろいろな観念崩しをしてくださいます。例えばあるとき信徒を指導する役割を与えられました。それまでほとんど自分から他人にアプローチすることがなかったわたしは、当然そこで葛藤がありましたが、それが弟子の役目ですから、初めは嫌でもやるしかないと思ってやりだしました。すると他人というものがわかり、それまでの自己中心的な考えが崩れていきました。そうして一つ一つ視野が広がり、他に対する許容量が増していくわけです。

このように、尊師によって、エゴを超えなければならない環境の中に身を置かれることによって、より高い自己へ変わることが可能なわけです。

もともと「自己」という意識を発生させ、そのために生きてきたがゆえに、この苦しみの世界に落ちてきたのですから、その「自己」から離れて「他」のために生きることが自分を解放することにつながるのです。わたし自身も全く自分だけという世界から、弟子として救済のお手伝いをさせていただくことにより、昔の苦しみから解放されつつあるのです。

今の我々の苦しみよりももっと大きな苦しみにあえいでいる魂のために心を動かすことこそが、今尊師のお導きによって少しずつ苦しみから解放されつつある者の役割ではないかと痛切に感じています。そこにこそ、修行の素晴らしさがあるものといえましょう。



修行の力で成績トップ



溝口博文

高校生のとき、入信するまではパッとしなかった成績でしたが、行法を行ない始めてから集中力がつき始め、短い時間でたくさんのことを覚えることができるようになりました。また、長時間の勉強も平気になり、飽きることなく集中できるようになりました。

また、各教科ごとに分析して問題を予想することができるようになり、高校三年のときは、最後の期末テストを除いてずっと一番でした。しかも、最後のテストでわたしの代わりに一番になったのは、同じ日にオウム真理教に入信した友人だったのです。このとき、改めてオウム真理教の修行はすごいと思ったのでした。

（広島県　二十一歳）

上司との関係もスムーズに

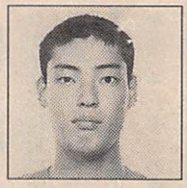


宮沢恭一

オウム真理教に入信して、自分の性格を冷静に見つめることができるようになり、自分を縛りつけていたものが取れて、会社での人間関係がとても良くなりました。特に上司との間ではお互いが理解できず嫌悪し合っていたのですが、打ち解けて話すことができるようになりました。限界に達していた仕事上のストレスも、アストラル音楽（麻原尊師作曲の高次元の音楽）を聴いたり、修行をしたりすることによって緩和され、常に心が安定するようになりました。気がつくと、あんなに気が重かった通勤が楽しみになり、そして重要な仕事も難なくこなすことができるようになりました。

（東京都　三十歳）

短眠獲得　活動時間がグンと増える



松尾信幸

わたしはオウムの修行によって、とてもエネルギッシュになりました。また、短眠、食事の量が減る、病気をしなくなるなど、修行によって体質がずいぶん変わりました。

オウムの修行を一時間することによって、睡眠時間が二時間短縮され、しかも修行してから寝ると、次の日の朝はすっきりと目覚めます。つまり、修行すると、一日の活動時間が増えるのです。多眠型の生活をしている人にはお勧めです。

（神奈川県　二十四歳）

記憶力　頭の中がスッキリ



山本治義

時間があれば道場に来て功徳を積み、修行のコースに出ることによって、特に記憶力が良くなりました。頭の中が以前よりスッキリし、暗記しなければならないことや、その他のいろいろなことも一、二回聞いたり、読んだりするだけで覚えられるようになりました。頭の回転も良くなり本当に変わったと思います。

（京都府　二十六歳）

直観力　ほぼ百パーセントの確率



田辺勝治

仕事上、わたしは電話が故障したので直してほしいと依頼されることがよくあるのですが、そんなときはどこが壊れているか、どこが故障になっているということが、ほぼ百パーセントに近いくらいの確率でわかってしまいます。

また、修理に必要ない材料まで事前に用意して現場へ行くと、必ずそれが必要になる状態になっているとか……自分でも不思議なほど当たっているのです。

（東京都　四十八歳）

直観力 その日のテストをみんなに公開



瓦吹英宣

入信以来、非常に直感力がさえてきました。例えば、学校の期末試験の勉強では、いつも一日前になってやっと重い腰を上げて勉強して、試験に出そうなところだけをやっていたのですが、次の日、ちょうど勉強したところが試験問題に出るのです。一度、教室の黒板に、その日のテストで出そうな問題を書いておいたことがあるのですが、これも見事に一致してしまいました。

（東京都 十九歳）

不動心獲得 移り気なわたしが別人に！



吉岡実

わたしは子供の頃から「好奇心が服を着て歩いている」と友人から言われるほど落ち着きがなく、一瞬たりともひと所にいることなく、よく動き回っていました。ところが修行を始めると、徐々に集中力がつき始め、興味の対象がすぐ変わるといった移り気なところや、雑なところがなくなりました。精神的にも安定して、わたしなりに不動心といったものが得られたと思っています。

たとえるならば、わたしの好きな言葉に「明鏡止水」という言葉があります。以前のわたしは、この言葉とはほど遠かったわけですが、今の自分はまさにこの「鏡」のように物事すべてを映し出し、波・風の一切ない「水面」のように落ち着いて、全く別人のようになったと感じています。

（大阪府 二十六歳）

鬼のような姑といい関係に



中山浩子

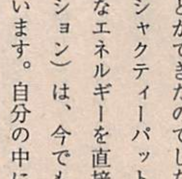
わたしの結婚は苦しみから始まりました。方言、家事における一切の習慣、食べる物……これらのすべてにおいてわたしと姑たちの間に違いがあり、そのうちの一つですらわたしのやり方は認めてもらえませんでした。毎日が針のむしろの上にいるようで、嫁とは名ばかり、わたしの境遇は女中以下ではないかと思ったものです。ただひたすら耐えるだけそんな生活が二十余年続きました。

しかし、あるときそれが一変してしまったのです。八六年のこと、わたしは、夫の導きでオウム真理教に巡り合うことができたのでした。

初めてのシャクティーパット（解脱者の神聖なエネルギーを直接注ぐイニシエーション）は、今でも鮮やかに覚えています。自分の中にあった姑に対する憎しみや嫌悪、怒り、そういったものが溶けてしまって、すべてを許せるような、すべてを愛せるような、そんな気持ちになりました。そのうち、姑に対する哀れみの心もわいてきました。姑の現在の態度、今までの生き方を見ていて「このままでは来世低い世界に落ちるに違いない」と感じたからです。しばらくすると、少しずつ姑の態度が変わり始めました。そして、ふと気づいたときには、いつの間にかあの口やかましい姑が何も言わなくなっていたのです。潤いのある、とてもいい「嫁と姑」の関係が保てるようになったのでした。現在では姑もオウム真理教に入信し、奉仕修行に励んでいます。真理こそが、すべてを変えるのです。

（五十五歳 京都府）

一日が二十七時間に



松崎喜美子

かつてのわたしは、自他ともに認める〝眠り魔〟で、一日に十時間程度は眠らなくては満足できませんでした。オウム真理教に入信した晩、早速修行をしてみました。床に就いたのは真夜中……。パッと目覚め時計を見ると、なんと早朝の三時です。しかし、スッキリしていて、こんなに爽やかな目覚めは、今まで経験がないものでした。そして次の日、いつものように夜八時に床に就くと、またまた爽やかに目覚めたのが、なんと夜の十一時。昨夜と同じように三時間の睡眠です。それからというもの、修行をした日は三時間、また修行ができなかった日でも、四時間から六時間の睡眠で十分になり

ました。一日八時間睡眠の方は、修行の時間を差し引いても一日三時間も得をして、一日が二十七時間になるのです。短い人生において、こんな得はないと思います。

（東京都　五十五歳）

アレルギー性鼻炎がスッキリと

亀田明子



わたしは大人になるにつれ、季節の変わり目に花粉症で苦しむようになりました。周りの人は春の訪れで心を和ませているときでも、わたしはティッシュペーパーを離すことができない身になっているのでした。

鼻が詰まって夜眠ることもできず、ものすごく大きな音で鼻をかみ、家の者を起こしてしまったりすることもあったくらいです。近くの耳鼻科に通っても、一時しのぎで根本的な解決にならないということがわかりました。

オウム真理教に入信して、花粉症によい修行法があると聞いて早速始めてみました。すると、どんどん良くなり、水ばなが出たり、鼻が詰まることもなくなりました。お陰でティッシュペーパーとも縁が切れ、いろいろな匂いを前よりも敏感に感じることができるようになりました。

（京都府　三十一歳）

生涯の伴侶に巡り合えた

片岡寛次



オウム真理教に入信する前から、結婚願望の強かったわたしですが、そのチャンスに恵まれず、縁談話もほとんどない状態でした。

ところが、教学をし、財施・安心施・真理施やオウム真理教の仕事を手伝うバクティーをしているうちに、ある日突然、会社関係の方や知人、幼なじみから三件立て続けに見合い話を持ちかけられたのです。入信して二カ月ほどしての出来事でした。

そして、幼なじみに紹介してもらった女性に縁を感じ、お付き合いすることになったのです。ほどなくして結婚したのですが、なんと知り合ってから六カ月目にして結婚というスピードでした。

また、結婚ばかりではなく、他の面でも、やることなすことすべてがトントン拍子に進むという調子で、オウム真理教の修行の素晴らしさを確信しました。

（高知県　二十九歳）

心が洗われ強くなった

畑島俊司



わたしは中学に入学して間もなく、赤面症になり、よくその場から逃げたいという気持ちに駆られるようになりました。勉強に力を入れてみたり、体力的に人より力をつけたりという努力をしてみましたが、そういうことをするほど自分の良い部分なども表現できなくなったりしました。ちょうどそんなときに、オウム真理教に巡り合ったのです。入信して日々真理を学んでいくうち、徐々に心が洗われ、安定し、自分を深く見つめることができるようになっていきました。そして、他人を嫌悪する心や他人に良く見られたいという気持ちなど、様々な自己のけがれに気づかされるようにもなったのです。

今では、心が次第に強くなり、あれほど悩んでいたのが不思議なほど人前であがることもほとんどなくなりました。

（愛知県　二十六歳）

落ちこぼれからトップに

稲葉紀人



中学で遊んでしまったわたしは、三流高校に進学せざるを得なかった。しかも、その高校でも遊び暮らしていたため、ドンジリから数えて四分の一から三分の一の成績となってしまった。ところが、オウム真理教に入信した学期から上がり始め、最初、同学年の生徒を百六人抜き、次の学期はさらに九十人抜いて、その次は六十数人抜くこととなった。

一年もしないうちに教師に期待されるようになり、大学模試は学年で一番になり、実力試験も四番で、いつの間にか人にうらやましがられるシチュエーションに立っていたのである。

（大阪府　二十一歳）

好評！ あなたとオウムをつなぐ

パソコン通信、 "オウム真理教ネット"

オウムについてもっと詳しく
知りたい……
教義その他について、いろいろと
聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を
聞いてみたい……
そんなあなたに最適な
情報ネットワーク



"オウム真理教ネット" のご紹介

TEL番号	03-5370-1726（三回線） Tri-P利用可能（CXAUMNET）
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、 SYSOPあてメールにて申請

面倒くさい手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

※ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼント（えんじょい・はぴねす最新号）をさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。
〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
"オウム真理教ネット" 事務局 TEL 03-5370-1721

尊師対談ハイライト

麻原尊師は各界の有識者と対談されてきたが、その際次のような高い評価を受けている。



中沢新一氏（宗教学者・東京外大アジアアフリカ言語文化研修所助手）
「僕は彼（麻原尊師）がとても高度なことを考えている人で、高い意識状態を体験している人だと認めています。日本の今いるいろいろな宗教家のなかでも知性においてかなり上等なレベルにいる人だと思いました。今の日本で宗教をやっている人のなかで稀に見る素直な人なんじゃないかな」（『週刊ポスト』89年12月4日号より）



島田裕巳氏（宗教学者・日本女子大学助教授）
「『オウム』は最初はヨーガから始まったが、その後は、仏教の本来のスタイルに近づいている。日本の仏教は世俗化しているために『オウム』が特異な集団に見えるが、むしろ仏教の伝統を正しく受け継いでいる。パーリ語の仏典を訳したりして、勉強している点も、それを裏づけている。」（『週刊朝日』91年10月11日号より）



荒俣宏氏（作家）
「私は麻原尊師にかぎりない好感を抱いた。おそらく解脱した者は幼児のように他愛もないか、あるいは阿修羅のように熱狂的であるかの、どちらかだろう。……麻原彰晃がほんものの解脱者であるとして、かれが示す寛大の姿勢は、あきらかに前者の例といえるだろう。」（『０３』91年6月号より）



栗本慎一郎氏（経済人類学者）
「麻原さんのように煩悩を越えられた方は、非常に素晴らしいし、そこからの教えを説いていっていただきたいと思います」（『サンサーラ』92年1月号より）



『ビートたけしのテレビタックル』（91年12月30日放映）ビートたけし氏と対談。以前から尊師に会いたがっていたというたけし氏と話が弾んだ。録画終了後にたけし氏から尊師に個人的に話しかけがあり、後日『Bart』（集英社）誌上において再び対談がなされた。

各地の大学で大反響を呼んだ麻原尊師

昨年から今年にかけて、麻原尊師は日本全国の有名大学において学生を相手に講演し、いずれの地でも好評を博した。



東京大学の講演では、二階席のある大教室でも立ち見の出るほどの大盛況だった。大宇宙の創造のプロセスから社会問題まで広範な質問がなされたが、どの質問に対してもスパッと回答する尊師の明快さがきわ立っていた。

京都大学講演会においては、定員二百人の会場に、麻原尊師を一目見ようとした学生千三百人以上が詰めかけて大変な盛況を呈した。後半の大質問会では、時間を延長して、人類学や物理学の専門家からの問いに答える尊師に何度も熱い拍手が巻き起こっていた。





なお、国内のみならずロシアの大学においても講演が行なわれ、大反響を呼んだ。写真は日本でいえば東大に当たるモスクワ大学での講演（本年3月）。その他、モスクワ工科物理大学、モスクワ国際関係大学、モスクワラジオ電子自動制御大学でも行なわれ、超満員の聴衆が集まり、尊師への質問が殺到した。

聖者からのメッセージ

「救世主はあなただ!」──聖者方に使命を託された麻原尊師

日本で唯一の最終解脱者・麻原彰晃尊師は、高い霊性と精神性を持つ世界中の聖者から、その修行ステージの高さを絶賛されている。



ダライ・ラマ法王（チベット仏教の政治・宗教の最高指導者）
「君（＝麻原尊師）が日本に本当の宗教を広めなさい。君ならそれができる。」（87年　インド・ダラムサラーにて）
「オウムは宗教的・社会的活動を通じて、人々の覚醒を促すよう努力する団体です。瞑想の実践方法を人々に指導するとともに、オウムの人たちは大乗仏教の伝統を引続き実践しています」（89年5月　親書）



故カール・リンポチェ師（チベット仏教カギュ派総帥）
「今生のわたしたちは大きな幸運に恵まれています。それは、仏陀（覚者＝目覚めた人）が現われて法を説き、その法が今なおここに存在している時代に、わたしたちは転生したからです。……それは皆さんのグル、麻原彰晃尊師です。」（88年8月　オウム真理教福岡支部道場にて）
「尊師は偉大な智慧と、偉大な法の理解、そして大いなる愛、すべてのものを助けようという願望を持っておられます。」（88年　同名古屋支部道場にて）



カムトゥール・リンポチェ師（元ダライ・ラマ法王宗教局長：チベット仏教ニンマ派の高僧）
「あなた（＝麻原尊師）は高い悟りを得ている。イェシェ（完全なる絶対なる神の叡智）のステージだ。完全にあなたの生きている意味合いは、衆生を済度するためである。」（91年5月　インド・ダラムサラーにて）
「麻原尊師は公の協力が得られた場合には、真に多くの人々に受け入れられる仏教の師として、日本に真の法を再び確立できるお方です。」（以上89年5月：親書）



アーナンダ・マイトリー高弟（仏教国スリランカナンバー1の瞑想家であり学者として同国国民から尊敬を集めている聖者：高弟とは「長老」の意）
「初めて尊師にお会いしたとき、尊師が今の時代、この地球に現われた偉大な聖者の一人であることを理解しました。尊師は偉大な宗教的師です。精神的に非常に高いレベルに達している方です。わたしは多くの修行者、グル（霊的指導者）に会いましたが、尊師ほど素晴らしいグルには会ったことがありません。」（92年5月　スリランカ・パランゴダにて）



スワミ・アカンダナンダ（歴史上傑出したヨーガ行者ラーマ・クリシュナ・パラマハンサの孫弟子：「功徳の聖者」と呼ばれている）
「あなたには特別の使命がある。……近い将来、日本はほとんど破壊されるでしょう。それは神の意思なのです。そのときに、歴史に姿を現わす新しい人類を率いなければならないのが、あなたです。」
「あなたには特別の任務がある。それは日本人を高い精神状態へと引き上げることです。」（86年　インド・ウッタルカシにて）



パイロット・ババ（インド政府より「マハリシ〈大聖者〉」の称号を受けている日本でも有名な超能力者：86年、日本でのサマディ実験がテレビで放映された）
「……日本だけではない。アメリカも、ソ連も、中国もいろいろな形で破壊されていくことだろう。しかし、救われる道は残されている。それは、日本人が正しい宗教を持つことである。そうすれば、日本は破壊を免れるに違いない。そう、あなたは日本を救うことができる。あなたは日本を救わねばならない。」（86年2月　インド・デリーにて）

へ羽ばたくオウム真理教

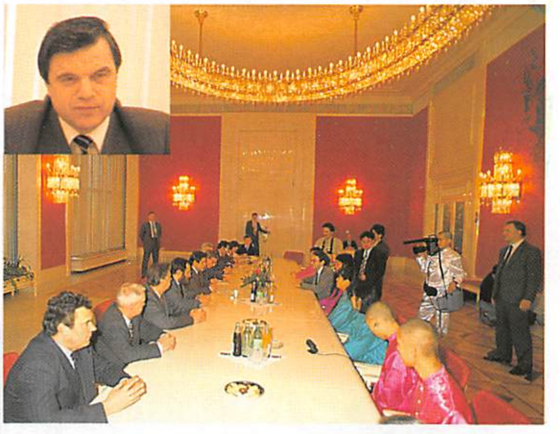
えは全世界へ広がるという。そして、予言
大し、各地で大歓迎を受けているのだ。

ロシアにて

麻原彰晃尊師はじめとするオウム真理教のメンバー約三百名は、今年三月ロシア共和国に公式招待された。



ルツコイ副大統領 「麻原尊師と会えて、とてもうれしい」



ハズブラトフ最高会議議長（エリツィン大統領に次ぐロシア・ナンバー2の政治家）
「尊師が日本だけでなく、全世界で、その純粋な仏教の崇高な理念を普及するため、本当に偉大な活動をなさっていることをわたしはよく承知しております。この活動のますますのご成功と、ご健康をお祈りします」



露日基金会長ロボフ氏（露日基金会長／前ソ連首相代行／現大統領直属専門評議会議長）
「オウム真理教の若いスタッフがモスクワで活躍することを望みます。」
「露日基金の会館が、モスクワの中心地にできます。その中の一部をオウム真理教の拠点にすればいいのではないでしょうか。」



オウム真理教の舞踏歌劇「死と転生」がクレムリン大会宮殿で行なわれた。六千百五十人収容の同会場は超満員となった。

ブータンにて

今年七月に尊師一行はブータン王国に国賓として招かれ同国国王ならびに法王と会見した



法王と

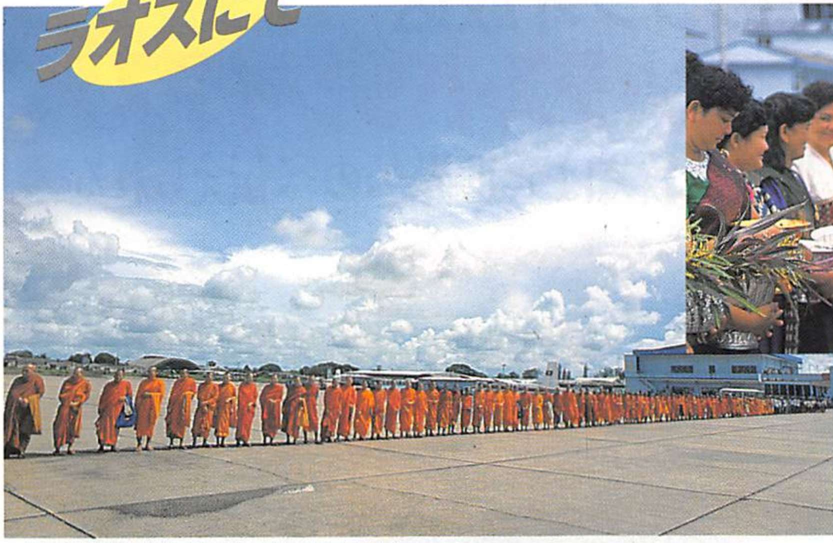


国王と

世界との交流――世界

予言によると、世紀末の救世主が説く教
どおり麻原尊師の活動は全世界的規模に拡

ラオスにて



ラオスの出家修行僧による尊師一行に対する出迎え



麻原尊師は仏教国ラオスにおいても国賓として迎えられ、大歓迎を受けた。ラオス国民の温かい歓迎を受けた尊師一行

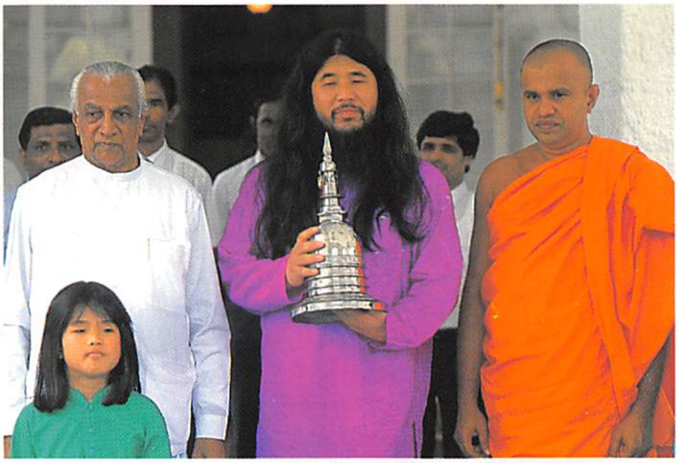
スリランカにて

尊師を歓迎して日本語で歌を歌うスリランカの少女たち

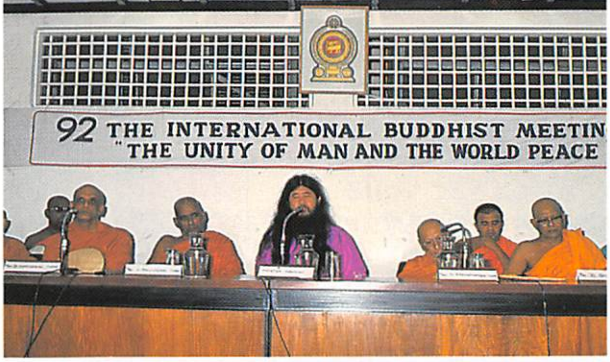




尊師を歓迎して集まったスリランカの民衆（ゲートの文字からは手作りの温かさが伝わってくる）



麻原尊師は仏教国スリランカからも公式招待された。総理大臣D・B・ビジェトゥンガ氏より仏舎利（仏陀釈迦牟尼の遺骨）を受け取る尊師

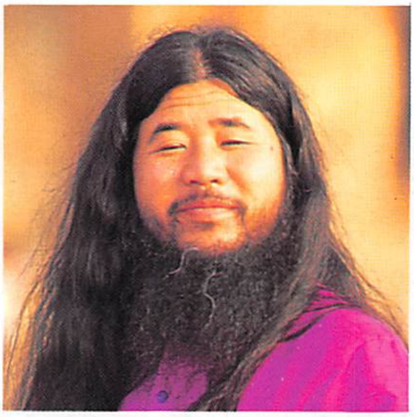


麻原尊師の呼びかけによって、「国際仏教会議」が開かれ、スリランカを代表する高僧の方々が出席された

を聴いたか？

オウム真理教のラジオ放送
「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」
——救世主の教えは全世界へのべ伝えられる

オウム真理教・麻原彰晃尊師の声があなたの耳を直撃！
今、オウム真理教では、日本全国に、そして全世界に向けては英語で、毎日ラジオ放送を行なっています。その名も「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」。ギリシャ語で「御国の福音」という意味です。
その名に違わず、番組内容は魅力たっぷり。ラジオから流れ出る〝福音〟は、きっと、あなたの心をときほぐし、安らぎを与えてくれるでしょう。そして、明日への新たな活力を与えてくれるに違いありません。



●主な番組内容

◎麻原彰晃尊師説法
大好評の尊師説法。最終解脱者の説き明かす真理の法則は、あなたのいかなる悩みや疑問でも解決してくれるでしょう。

◎わたしは見た！　これが尊師の超越神力
弟子が目撃してきた尊師の驚くべき神通力の数々。尊師が持っている人間を超えた神の力をレポートします。

◎リラクゼーションのコーナー
現代人を悩ませるストレスを昇華し、肉体と心に健康を呼び戻す秘儀を伝授。

◎麻原彰晃尊師のノストラダムスの大予言
『諸世紀』の原文翻訳のうえ、尊師が解脱者の智慧を駆使して解読するノストラダムスの予言。驚くべき人類の未来が今明らかに！

◎麻原尊師の運の良くなるザンゲコーナー
知能を発達させ、心を安定させる仏教の修行「ザンゲ」の方法をお教えします。

◎ミラクルパワー　神秘の世界を開け！
修行によって超人類へ変身していく過程で得られるミラクルパワーの世界を公開。

◎仏典を楽しもう
二六〇〇年の時を超えて復活した覚者サキャ神賢の法。あなたを「悟り」へと導く覚者の叡智をどうぞ。

◎STEP　UP　真理
生きることの本当の意味、宇宙や生命の神秘、なぜ修行が必要なのか。そのナゾに明快な回答をもたらす真理の法則をわかりやすく解説します。

◎今月の歌
尊師が作曲された真理の歌を歌おう。歌えば力がもりもりわいてくる！

その他にも番組内容はもりだくさん。一日の最後に、ゆっくり体を休めながら耳を傾けてみてください。いにしえの聖者方が説かれた「解脱」と「悟り」の素晴らしさが、心に染みて感じられることと思います。そして、あなたも超人類への道を歩みましょう！

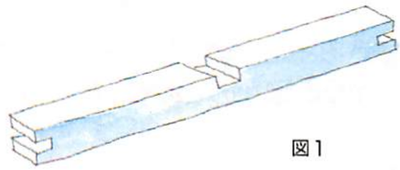
・放送時間と周波数
中波　七二〇kHz　二三：〇〇〜一：〇〇
短波　一七、七一〇MHz　二二：〇〇〜二三：〇〇
また短波では、全世界へ向けた英語放送も行なっています。

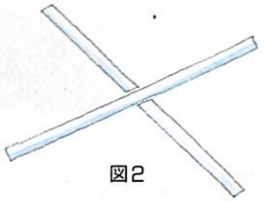
ラジオ・タイアップマガジン『えんじょい・はぴねす』プレゼント

「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」が10倍楽しくなるタイアップマガジン月刊『えんじょい・はぴねす』最新号をもれなくプレゼントします。放送の聴きどころのほか、オウム真理教の最新情報を満載したオールカラー80頁。巻末のハガキに必要事項を記入して、どしどしお申し込みください。



キミはもう尊師


図1


図2

エウアンゲリオンを10倍クリアに聴こう

日本全国どこでも聴ける「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」。この番組をもっと鮮明に聴きたいという方のために、簡単にできるループアンテナの作り方をご紹介します。

◉中波用ループアンテナの作り方

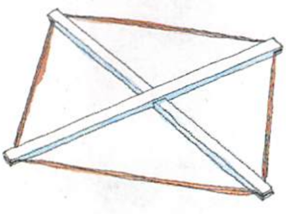
①長さ90センチ、太さ12ミリくらいの角材二本を図1のように加工し、組み合わせて接着し骨組をつくる。（図2）

②〇・五ミリくらいの太さのエナメル線を骨組みの端の切れ込みに沿わせ、十回巻きする。（図3a）

エナメル線の巻き始めと巻き終わりは、角材の端に穴を空け、その穴に通して数回巻きつけておくと解けないので作業がしやすい。（図3b）

③エナメル線の末端のある側の角材の端にポリバリコンを接着する。（図4）

④エナメル線の端を適当な長さに切り、サンドペーパー等で被覆をはがし、ポリバリコンの端子にハンダ付けする。（図4）


図3a

◉使い方

・ラジオを七二〇キロヘルツに合わせて受信する。

・ポリバリコンを回して、最もよい受信状態にする。

・ラジオとループアンテナをそのまま一緒に回してみて、最もよく受信できるようにする。

ラジオは図5のとおり、ループアンテナに対して常に垂直になるようにする。

◉材料

・バルサの角材（非金属であれば何でもいい）……12ミリ角を90センチ（2本）

・エナメル線太さ〇・五ミリを30メートル

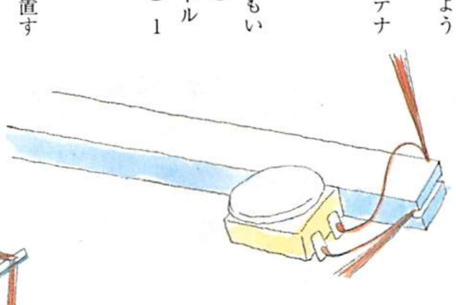
・ポリバリコン（中波ラジオ用、単連）1個

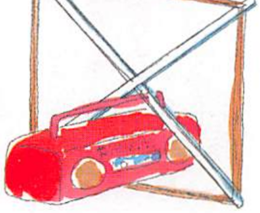
●注意点

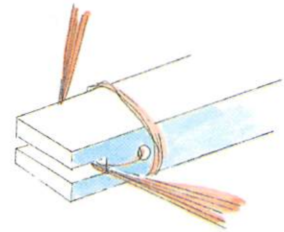
・ラジオはループアンテナの内側に配置する。外側だとあまり効果がない。

・鉄筋の建物では電波が届かず受信しづらいので、できるだけ窓際で聴く。

・コンピュータ、蛍光灯などの電気製品は雑音を発することが多いので、雑音の多いときは電源を切ってみる。


図4


図5


図3b

コーナー ——救世主の法をあなたに

麻原彰晃尊師の説く法とは？



でお申し込みください。もれなく無料でプレゼントいたします。
目でしっかりと確かめてみてください。

◆オウム真理教を知りたい方のための一〇冊

——この本なしには宗教は語れない！
絶対最勝の教え



絶対幸福の鍵を解く
生死を超える・増補改定版
解脱と悟り。それは人としての最高の宝物。八年の歳月を経て修行の最終地点に到達された尊師の体験が、解脱への道程を克明に語りかける。

真理勝者　絶対最勝の法則
タターガタ・アビダンマ
第一誦品　大宇宙の実相
オウム真理教の教義をやさしく教える入門書第一弾。真実の宇宙観と魂の落下のプロセスを詳述。

第二誦品　真理勝者の救済計画
サキャ神賢の教えの全体系が明かされる！　魂が救済されていくプロセスと解脱への道程を詳述。

イニシエーション
最高の秘儀を惜しみなく公開。今日の日本と世界の動向を正確に予言している驚くべき記述の数々。

大乗ヨーガ経典
マハーヤーナ・スートラ
解脱の真理が実体験として証明された。解脱へのステップ、希代の体験談がすべてを語っている。

マハーヤーナ・スートラ PART2
サキャ神賢の教えと尊師の説法と弟子たちの体験談が満載。読み、考え、実践する「本物のお経」。

麻原彰晃の世界　PART1
幸福に至る四つの実践
仏教の基本ともいえる「四預流支」を麻原尊師が縦横無尽に説いた画期的な説法群。

麻原彰晃の世界　PART3
真実！六道輪廻
麻原尊師と高弟たちの瞑想体験が証明する六道輪廻の真実。間違いだらけの現代の死生観を正す。

麻原彰晃の世界　PART4
宗教にだまされるな！
霊障、水子供養、先祖供養……。この世にはびこる間違った観念を打破し、正しい意味を説く尊師。

麻原彰晃の世界　PART5
絶対の真理
運命の鍵を握る〝カルマの法則〟。すべての人がカルマに支配されていることを多数の例が証明！

◆真理をもっと深く学びたい方の本

——甦る釈迦牟尼の教え

麻原彰晃の世界　PART7
仏教真理・八正道



原始仏教の根幹をなす教え「八正道」。仏教の基礎ともいえるサキャ神賢直説の教えを、麻原尊師が正確かつ現代人にわかりやすく説く。

麻原彰晃の世界　PART8
仏教真理・六波羅蜜
仏教の基本的な教え「六波羅蜜」をただ一人の最終解脱者、麻原彰晃尊師がわかりやすく説いた。

麻原彰晃の世界　PART10
仏教真理・五蘊無我
わたしたちを構成する五つの要素（五蘊）を浄化し、不死へと至る教えを集大成した瞑想家待望の書。

麻原彰晃の世界　PART12
仏教真理・十二縁起
絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜へと至るプロセスを自ら体験された尊師が説く「十二縁起の法」の真実。

原始仏典講義　一
どんな学者も修行者も解き明かせなかったサキャ神賢の真理の法を麻原尊師が鋭く解説！

◆麻原彰晃尊師の魅力を探りたい人のための本

——真理勝者の叡智をあなたに

麻原彰晃の世界　スペシャル
約束の大地



インド・チベット・ラオス……仏教ゆかりの地を尊師が行く。尊師が初めて明かす高度な瞑想・秘儀の数々。その魅力を結集させたファン待望の書。

麻原彰晃の世界　PART2
尊師、麻原彰晃が斬る！
願望成就の秘法、UFO&宇宙人、医学、音楽、食養、輪廻転生等について麻原尊師が斬る！

チベット仏教の高僧が、インド・ヨーギが、世界の聖者が絶賛した！
麻原彰晃の聖者誕生
チベットの高僧をはじめとする聖者方が、唯一の最終解脱者麻原尊師について語った全記録を収録。

原爆覚醒
最高のイニシエーション（エネルギー移入）、「シャクティーパット」。今その詳細が明らかに。

麻原彰晃は魅せた
神通力
すべての魂の救済のための神通力とは？　最終解脱者、麻原尊師の神通力を弟子たちが徹底追究。



オウム真理教の本プレゼント

世紀末の人類を救済するオウム真理教・

以下のオウム出版の本の中から、ご希望の一冊を選んで巻末のハガキ
予言されていた「超人類」の姿をあなたの

◆超能力を獲得したい方の手引書
——あなたの持っている本当の力

すべてが思いのままになる
超能力秘密の開発法 増補大改訂版



人が修行によって〝人間〟を超えようとするとき、必ず人智を超えた力が身につく。あの不朽のベストセラーが増補・大改訂されて今ここに登場。

あなたの持っている本当の力
超越神力

PART1
天耳通・他心通
人の魂に宿っている力〝超越神力〟。その神秘の力の秘密、そのすべてを今明らかに。

PART2
前生を知れ!・死生智の秘密
輪廻転生を繰り返しているわたしたちの魂。本書では、麻原尊師の興味深い前生体験を満載。

PART3
完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通
最終解脱者だけが知る〝完全なる絶対なる神の叡智〟とは? 漏尽通の秘密が今明らかになる。

PART4
わたしは見た!これが尊師の超越神力
麻原彰晃尊師の〝超越神力〟を目の当たりにした内弟子の生の声を豊富に満載。

麻原彰晃の世界 PART6
願望成就の秘法
心からの幸福を願うすべての人々に、麻原尊師が仏教の願望成就の秘法をそっと伝授する。

能力覚醒の秘法を解く
多くの科学的智見を駆使して人が超人へと進化していくプロセスを解明し、その衝撃の秘法を公開。

麻原彰晃のズバリ!浮揚
二十八人の決定的瞬間、空中浮揚の仕組みを解説する仏教・ヨーガ理論。空中浮揚のすべてを満載!

麻原彰晃のザ・サマディ
サマディ——それは真の解脱者のみがなし得る奇跡。生死を超えた瞬間、彼らの見た世界とは?

実録:アンダーグラウンド・サマディ 一九九一
ザ・サマディ PART II
尊師の愛弟子マイトレーヤ正悟師が挑んだ「土中サマディ」、その奇跡を再現。

甦る聖者伝説
呼吸も止まった〝死〟の状態から、彼らは復活する。解脱者のみがなし得る奇跡、サマディの神秘。

人間から神に生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち
神通力者への道 1〜4
尊師の指導のもと、秘儀を駆使して生まれ変わった弟子たち。彼ら「神通力者」のすべて。

そのステージに達した弟子が語るグル・麻原尊師と修行
マハー・ムドラー
仏典でいう〝阿羅漢〟の境地に達した高弟二人が語る、だれも知らないグル・尊師の姿、そして修行。

◆世紀末の行方を知りたい方の本
——大予言をズバリ解明

1999の謎
ノストラダムス秘密の大予言



ついに封印を解くべきときが来た! 自らの神秘力によって奇跡を見せた尊師が明かす衝撃の真実。遥かなる時間を経て今甦るノストラダムス——。

「黙示録大預言」の秘密のベールを剥ぐ
滅亡の日
『ヨハネの黙示録』の謎を麻原尊師が徹底的に解読。人類滅亡のシナリオの封印が解かれた。

「黙示録大預言」完全解読
滅亡から虚空へ(続・滅亡の日)
大破局後に来る新たなる闘いとは? だれにも解けなかった予言書のすべてが、今明らかにされる。

人類滅亡の真実
滅亡の真実を克明に説き明かす、真理勝者サキャ神賢と最終解脱者麻原尊師が贈る人類啓蒙の書。

Harmagedon 1
マンガ 滅亡の日
尊師が動き語る。未来ヴィジョンが迫ってくる。『ヨハネの黙示録』の謎がヴィジュアルに!

◆宗教に疑問をお持ちの方の本
——邪法を正す書

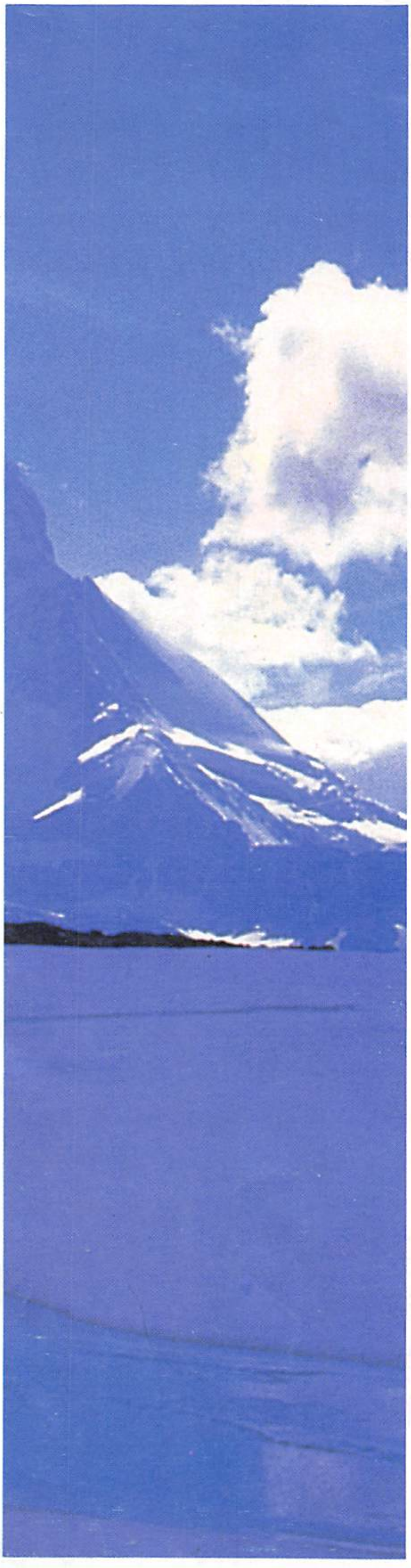
キリストの教えのすべてを明かす
キリスト宣言

PART1
日本でただ一人の最終解脱者、オウム真理教麻原彰晃尊師が説く、これがイエスの真実だ。この一冊でイエス・キリストの教えのすべてがわかる!



PART2 再臨・裁き・終末
神の審判のとき、この世は破滅する——「聖書」にあるイエス・キリストの予言をいよいよ解読。

幸福の科学の会員よ聞きなさい!
真実の仏陀の教えはこうだ!
すべての仏典を熟知した最終解脱者、麻原彰晃尊師が大川流仏法の大ウソをズバリと正す!



◆── 各道場のご案内 ──◆

富士山総本部 0544(54)1267
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部 03(3327)8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場） 03(3396)9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
大阪支部 06(397)1022
〒532 大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部 092(474)2877
〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部 052(252)0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部 011(241)4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部 075(371)3759
〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部 022(268)3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部 0762(51)8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部 0888(84)8286
〒780 高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部 082(264)6250
〒732 広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部 045(243)8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部 0734(24)2859
〒640 和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部 0292(26)8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部 0474(66)4965
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部 098 (869) 7707
〒902 沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
堺支部 0722 (21) 1843
〒590 大阪府堺市海山町4-168-9
高崎支部 0273(46)1573
〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町下稲荷前1081-5
福井支部 0776 (26) 6145
〒910 福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F
深谷出張所 0485(74)6205
〒366 埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所 03 (3476) 5065
〒150 東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部 212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部 (0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany
スリランカ支部（AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION）
Sorahena, Watta, Anglugaha, Galle, Sri Lanka

理想社会 9
1992年9月5日発行
定 価 1,000円
監 修 麻原彰晃
発行者 青山吉伸
発行所 オウム出版
〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
電話 03(3439)6043 振替 東京2-109325
※乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

オウム真理教の本と『えんじょい・はぴねす』最新号をプレゼント！



PRESENT





下のハガキでお申し込みの方にもれなく無料で、ご希望のオウム真理教の本と、オウム真理教のラジオ放送『エウアンゲリオン・テス・バシレイアス』が10倍楽しめるタイアップマガジン『えんじょい・はぴねす』最新号をプレゼントいたします。

詳しくは、本文の「キミはもう尊師を聴いたか？――オウム真理教ラジオ放送開始」と「オウム真理教の本プレゼントコーナー」をご覧ください。

おハガキお待ちしています。

キリトリ線

郵便はがき

1 6 8

料金受取人払

杉並南局承認

359

差出有効期間
平成6年8月
24日まで有効
(切手不要)

東京都杉並区宮前
3－8－11

オウム出版
理想社会係 行

キリトリ線

オウム出版の本、および「えんじょい・はぴねす」プレゼントカード
詳しくは本文をご覧ください。

フリガナ お名前	性別 男・女 / 年齢 歳
フリガナ ご住所	〒 － 都道府県 TEL. （ ） 内 様方
ご職業	① 学生 ② 主婦 ③ 会社員 ④ 自営 ⑤ 公務員 ⑥ その他（ ）
興味のあるジャンル	① 超能力・UFO・オカルト ② 思想・哲学・宗教 ③ 健康・食養 ④ 自然科学 ⑤ エコロジー・環境問題 ⑥ 政治・経済 ⑦ ドキュメンタリー ⑧ 武道・スポーツ ⑨ 文芸 ⑩ コミック ⑪ 歴史 ⑫ その他（ ）
ご希望になるオウム出版の本	
「えんじょい・はぴねす」ご希望ですか	YES NO

理想社会 第（ ）号をお読みになっての感想



キこはもう尊師を聴いたか？